

仙台市文化財調査報告書第246集

欠ノ上Ⅱ遺跡

発掘調査報告書

2000年3月

仙台市教育委員会

欠ノ上Ⅱ遺跡

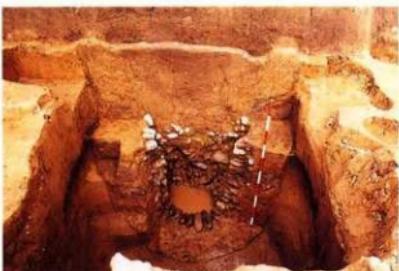
発掘調査報告書

2000年3月

仙台市教育委員会



1. 造構検出状況（東より）



2. SE-1 井戸跡下部（西より）



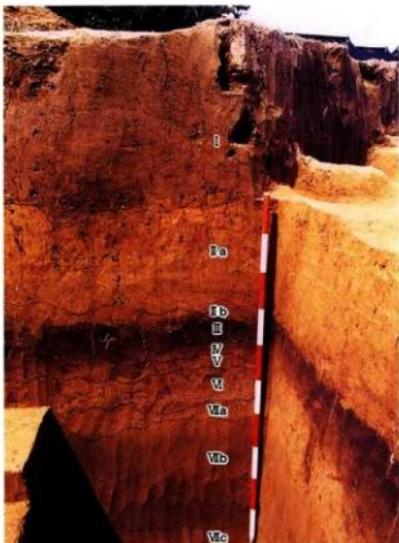
3. 調査区全景（南より）



4. 下層調査区の状況（南より）



6. 7世紀末～8世紀初頭の遺物
①羽口 ②トリベ ③高坏 ④环 ⑤関東系土器破片



5. 基本層断面（西部北壁）

序 文

仙台市内には、旧石器時代と縄文時代の山田上ノ台遺跡・弥生時代の富沢遺跡・全長110mを誇る遠見塚古墳・全国的にも最古の地方官衙の一つである郡山遺跡・国分寺として最北の陸奥国分寺跡・伊達政宗が築城した仙台城跡など全国的にも著名な各時代の遺跡をはじめ、約700ヶ所もの遺跡があります。おりしも今年は西暦2000年にあたり、仙台平野で稻作が開始され、現代文明へつながる農耕社会に移行してから約2000年の歳月が流れることになります。この間に多くの遺跡を残し、郷土に暮らした幾多の祖先の努力により、社会は急速に発展し、現在の私たちは、豊かな生活を実感することができるようになりました。しかしながらその一方で、消費社会・情報化社会などと呼ばれてめまぐるしく変化する生活の中で、環境問題や将来の社会生活への不安が話題となっております。こうした情勢のなかで、新たな創造力と調和に基づくゆとりある社会への変革が求められています。ゆとりあふれるふるさとの創造にあたって、郷土の深みある歴史的環境を形作っている遺跡をはじめとする様々な文化財は、調査・研究・学習という市民それぞれの体験のなかで、私たちの将来への展望を開くうえで大きな役割を果たしてくれるものと期待されます。このような可能性を秘めた遺跡や文化財を、先人の残した遺産として護りながら活用し、未来に受け継いでいくことは、市民と行政にとって大切なことと思われます。

今回行われた欠ノ上Ⅱ遺跡の調査は、遺跡に係る事業主体者の多大なる理解と協力によって実施されました。その結果、郡山遺跡と同時代の遺構や、関東地方からの移民との関連が考えられる遺物の発見など、東北地方の歴史時代における黎明期の解明に関する多くの調査成果をあげることができました。

本発掘調査報告書の刊行にあたり、事業主体者をはじめ、調査にご協力・ご指導いただきました多くの方々に深く感謝申し上げるとともに、本書が研究者のみならず各方面に活用され、また出土遺物や調査記録が郷土史の資料として活かされることを期待いたしまして刊行のご挨拶といたします。

平成12年3月

仙台市教育委員会

教育長 小 松 弥 生

例　　言

1 本書は、宅地造成工事に伴う宮城県仙台市久ノ上Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。

2 本書の本文執筆と編集は、竹田幸司と協議のうえ工藤哲司が担当した。

3 報告書作成にあたり、以下のとおり作業を分担した。

遺物接合・復元　　：庄子・菅井・杉松・高橋美香・中里・深瀬

遺物写真撮影　　：今野・安部

遺構図面整理　　：竹田

遺物実測　　：相沢・高橋朝子・中里・工藤

遺構図・遺物実測図トレース　：工藤

4 報告にあたり、出土した陶器・磁器の年代観については本課の佐藤洋の、縄文の施された土器については赤澤清章の助言を得た。

5 本調査で出土した溶解物付着土師器については、郡山遺跡出土品とともに国立歴史民俗博物館に科学分析をお願いし、分析の結果については仙台市文化財調査報告書第244集郡山遺跡XXに収録されている。

6 調査と報告書の刊行にあたり、次の方々に協力を賜った。記して感謝の意を表す次第である。

　　国立歴史民俗博物館・福仙興業株式会社・桂島建設株式会社

7 本書に関する資料の全ては、仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1 本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」(小山・竹原：1976)に準拠している。

2 本文・図版で使用した方位は、全て真北で統一してある。

3 図中の座標値は、平面座標系Xを基準とし、単位はkmである。

4 標高値は、海拔高度を示している。

5 遺構名の略号として、次の略号を使用した。

SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SE：井戸跡 SI：竪穴住居跡及び竪穴遺構 SK：土坑跡 P：ピット

6 報告書中の全体図および遺構平面図においては、搅乱と新しい重複遺構は、省略または簡略化している。

7 遺物の登録には、以下の分類と略号を使用した。

B：甕生土器 C：土師器（非ロクロ） D：土師器（ロクロ） E：須恵器 I：陶器

J：磁器 K：石器・石製品 L：木製品 N：金属製品 P：土製品

8 竪穴住居跡床面の濃いスクリーントーン（網）は強い焼け面を、薄いスクリーントーン（網）は弱い焼け面を示している。また、柱穴内のスクリーントーン（網）は柱痕跡の位置を示している。

9 土師器実測図内面のスクリーントーン（網）は黒色処理されていることを示している。

10 磁石器実測図のスクリーントーン（網）は、磨り面の範囲を示す。

11 羽口実測図の■は溶解部分を、■は還元して灰色に変色した部分を表している。また、前者はトリベの溶解物付着部分も表現している。

12 遺物観察表の（ ）内の法量は、残存値を示している。

13 本文中の灰白色火山灰（庄子・山田：1980）については、現在、十和田a火山灰（To-a）と同定されており、降下年代は西暦915年初夏とされている（町田：1981、1996）。

目 次

序 文

例言・凡例

目 次

第1章 遺跡の立地と環境	1
1 地理的環境.....	1
2 歴史的環境.....	1
第2章 調査の経緯と体制	4
1 調査に至る経緯と経過.....	4
2 調査要項.....	5
第3章 調査概要	6
1 遺跡の状況.....	6
2 基本層位と発見遺構.....	6
第4章 検出遺構と出土遺物	7
1 掘立柱建物跡.....	7
2 溝 跡.....	13
3 井 戸 跡.....	15
4 土 坑 跡.....	16
5 堅穴住居跡.....	20
6 III・IV層出土遺物.....	47
7 その他の出土遺物.....	49
第5章 考察と調査のまとめ	49
1 遺構の時期と性格.....	49
2 遺物の総括.....	56
写真図版	59
遺構写真.....	61
遺物写真.....	71

第1章 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

欠ノ上Ⅱ遺跡は宮城県仙台市の東部、仙台市太白区郡山字欠ノ上に所在する。JR長町駅の南東約1.8kmの地点にある。

仙台市の地形は、西側から東側にかけて大きく3段階の変化する。西部は東北地方の背梁をなして南北にのびる奥羽山脈から派生する七北田丘陵・青葉山丘陵・高館丘陵など、標高300~100m級の山地とその周辺の丘陵地帯となっている。山地・丘陵地帯の東側・高層ビルの立ち並ぶ仙台市街地は、広瀬・名取川により5面の段丘地形が形成されている。段丘面の標高は、上位（古期）段丘では200~100m、低位段丘では20~50mである。

丘陵段・段丘地形の東側は、宮城都七ヶ浜町から亘理郡山元町まで、最大約10kmの幅で南北約40kmに渡って形成された「仙台平野」となる。この沖積平野は、北から順に七北田川・広瀬川・名取川・阿武隈川などの運搬物によって形成されたもので、流域は扇状地・自然堤防・後背湿地・旧河道など沖積地特有の微地形が複雑に入り組んでいる。また砂浜海岸からなる現海岸線付近の沿岸部には、幅約3kmの範囲に3列の浜堤とその間に堤間湿地が形成されている。

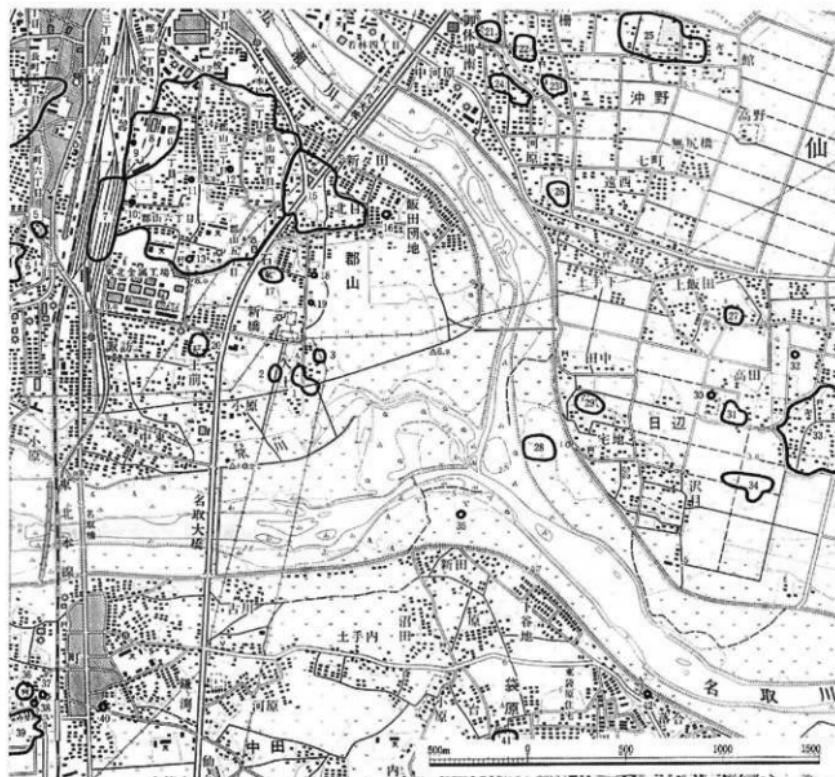
欠ノ上Ⅱ遺跡は、名取川と広瀬川に挟まれた仙台平野の中央付近に位置し、遺跡の東南方約1kmの地点で両河川及び名取川支流の旧荒川が合流している。遺跡周辺はこれらの河川とその旧河道により複雑な微地形が形成されている。遺跡は、標高約8mの自然堤防上に立地し、現在南北200m・東西150mの比較的狭い範囲が遺跡として登録されている。遺跡の西側には、郡山遺跡の方向から蛇行しながら現3河川合流地点方向に向って南北方向にのびる旧河道が存在する。旧河道の幅は80m前後ある。遺跡の立地する自然堤防上面と、現在水田となっている旧河道面との比高差は約2.5mあり、自然堤防面から旧河道面にかけては急な傾斜面となっている。

2 歴史的環境

宮城県では、蒸館町上高森遺跡において約60万年前の前期旧石器が発見され、さらにその下の地層からの石器の発見が続いている。仙台市内においても、上位段丘の青葉山段丘に形成された青葉山B遺跡で前期旧石器時代に所属する石器が発見されている。以降、山田上ノ台遺跡・北前遺跡・住吉遺跡などで中期旧石器時代及び後期Ⅲ・Ⅳ石器時代の石器が層位的に発見されている。また、欠ノ上Ⅱ遺跡の北西2.5kmの沖積地に位置する富沢遺跡では、現水田面の約5m下から約2万年前の後期旧石器時代の焚き火跡を伴う石器製作跡と森林跡が発見され、注目を集めた。

縄文時代になると、富沢遺跡周辺で早期の遺物や落し穴が発見されている。前期には富沢遺跡を望む段丘上に位置する三神峯遺跡に集落が形成されている。中期には、段丘面に集落が継続的に形成されるだけでなく、再び沖積地への進出が活発になり、六反田遺跡・下ノ内遺跡・王ノ壇遺跡・伊古田遺跡など、荒川流域の自然堤防上に多くの遺跡が形成されるようになる。後期には、沖積地の遺跡は荒川下流へとさらに拡大し、西台畠遺跡・郡山遺跡・北目城跡で遺構・遺物が発見され、さらに名取川と広瀬川の合流地点から1.5km下った高田B遺跡においても竪穴住居跡が発見されている。しかしこの時期、丘陵部の遺跡は相対的に縮小していく。晩期には、名取川上流の茂庭地区の門野山廻遺跡・柴野A遺跡・沼原A遺跡などの丘陵地帯及び富沢遺跡周辺や郡山遺跡・南小泉遺跡・今泉遺跡・高田B遺跡などの沖積地に立地する遺跡で遺物が散見されるが、集落等の遺跡の実態は不明である。

弥生時代も晩期に引き続き集落の実態は不明な点が多い。前期段階は、富沢遺跡・南小泉遺跡・船渡前遺跡等の遺跡で土器などが発見されているだけであるが、中期には富沢遺跡や高田B遺跡で大規模な水田跡や農具などが発見され、農耕社会への急速な発展を伺うことができる。後期は、富沢遺跡における水田の規模は縮小するが、遺物の散布は市内各地で認められている。



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代	
1	久ノ上三道跡	集落跡	自然堤防	弥生?~中世	22	神崎塚跡	古街?	散布地	自然堤防	古代
2	久ノ下三道跡	水田跡	米漬溝跡	古墳~古代・中世	23	中橋西面跡	散布地	自然堤防	張良・古墳・古代	
3	久ノ上土道跡	散布地	自然堤防	古墳~古代	24	砂押川土道跡	散布地	自然堤防	張良・古墳・古代	
4	宝沢古跡	散布地・水田跡	自然堤防	石器一磪文・弥生~近世	25	津井城跡	城跡	自然堤防	中世	
5	長町六丁目遺跡	散布地	自然堤防	古代	26	河原足跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	
6	長町向遺跡	散布地	自然堤防	古代	27	上野疊跡	散布地	自然堤防	古墳・六代	
7	長町東室道跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・古代	28	日迈遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	
8	西台東道跡	集落跡	自然堤防	磧文・弥生~古代	29	日迈疊跡	城跡	自然堤防	中世	
9	西台向坂跡群	坂跡	中世		30	上野田3丁目坂跡	坂跡		中世	
10	長町家森古跡群	坂跡	中世		31	高田山遺跡	散布地	自然堤防	六代	
11	八幡社古跡群	坂跡	中世		32	坂塚古墳	円墳?	自然堤防	古墳?	
12	鴨山二丁目古跡群	坂跡	中世		33	今会疊跡	島疊跡・城跡跡	自然堤防	磧文~古代・中世~古美	
13	諏訪川古跡群	坂跡	中世		34	高田山遺跡	築居跡・水正跡	芦原平野	磧文~近世	
14	鶴山北跡	集落跡・宮衙跡	自然堤防	磧文~古墳・古代	35	大原山小廻	円墳	(径18m)	自然堤防	
15	北目城跡	集落跡・坂跡	自然堤防	磧文~古代・中世~近世	36	中田神社古跡跡	散在地	自然堤防	古墳・古代	
16	吉野神社坂跡	坂跡	中世		37	伊豆野塚古古墳	円塔・坂跡	自然堤防	古墳・中世	
17	矢来古跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	38	中田神社坂跡	坂跡		中世	
18	北目古跡群	坂跡	中世		39	安久裏遺跡	集落跡・古墳	自然堤防	新生・中世	
19	穴田東古跡群	坂跡	中世		40	中田二丁目疊跡	坂跡		中世	
20	能之瀬遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	41	中田畠中遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・古代	
21	御井ノ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	42	落合横木盆地跡群	坂跡		中世	

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡（国土地理院1:25,000・仙台東南部を複製）

古墳時代になると、前期の戸ノ内遺跡・安久東遺跡の方形周溝墓に続き、南小泉遺跡のなかに全長110mの前方後円墳である遠見塚古墳が造営され、首長権の拡大した社会の成立を知ることができる。以後、中期には裏町古墳・兜塚古墳が、後期には一塚古墳や二塚古墳が作られ、欠ノ上Ⅱ遺跡の西方約1.5kmの荒川北岸には中期・後期を通じて大野田古墳群が形成されている。また、名取川を挟んで対岸の河岸上には大塚山古墳がある。終末期になると、富沢遺跡・郡山遺跡北側の広瀬川に沿った丘陵斜面に、向山横穴墓群と総称される墳墓群が作られる。古墳時代を通じ、荒川流域の自然堤防上には連続的に集落が形成されている。

古墳時代の終末・飛鳥時代と呼ばれる7世紀中頃から7世紀末にかけての時期、欠ノ上Ⅱ遺跡の北西1kmの郡山遺跡に東北最古の官衙（I期官衙）が形成される。官衙は7世紀末から8世紀初頭に寺院を伴う施設に大きく改変（II期官衙）され、多賀城造営以前の陸奥国府として機能していたことが考えられている。官衙城及び西台畠遺跡など周辺地域には官衙と同時期の堅穴住居跡も多数発見されている。

奈良・平安時代には、荒川流域の遺跡をはじめ、各自然堤防上に集落跡が形成され、その周辺の低地には水田跡が発見されている。また、神橋遺跡では官衙に関係すると考えられる掘立柱建物跡群が発見されている。

中世の遺跡としては、沖野城跡・今泉遺跡・王ノ壇遺跡などの城館があり、次第にその実態が明らかになりつつ



第2図 調査地点の位置と周辺の地形

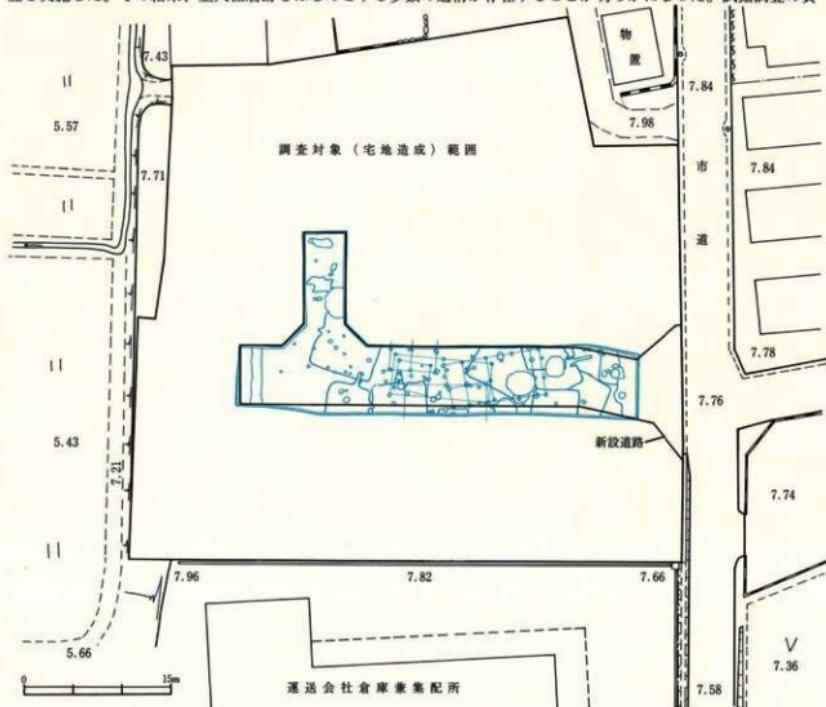
あるが、遺跡周辺では、郡山遺跡で掘立柱建物跡や欠ノ上Ⅰ遺跡で中世の水田跡が発見されている以外は、その状況は明らかでない。郡山遺跡から欠ノ上Ⅱ遺跡にかけての地区には多くの板碑が存在することから、同地区は中世においても活発な生活が営まれていたことを伺い知ることができる。

中世末から近世初頭には北目城跡が造られ、天正年間までは栗野大膳の居城として機能し、その後関ヶ原の戦いの前後から仙台城完成まで伊達政宗が居住している。北目城跡の廃城以降、欠ノ上Ⅱ遺跡周辺は城下及び都市部の近郊農業地帯として近年にいたっている。

第2章 調査の経緯と体制

1 調査に至る経緯と経過

本件に関する発掘調査は、平成10年6月17日仙台市若林区石名坂7番地 福仙興業株式会社 代表取締役加藤正文より、欠ノ上Ⅱ遺跡における宅地造成工事に関する協議書が提出されたことに起因する。本遺跡はこれまで発掘調査実績がなかったことから、仙台市教育委員会は発掘届に基づき、原因者と協議のうえ平成10年8月25日に試掘調査を実施した。その結果、堅穴住居跡をはじめとする多数の遺構が存在することが明らかになった。試掘調査の資



料を基に、仙台市教育委員会と原図者のと再協議の結果、本調査を平成11年4月から約3ヶ月間実施することで協議が成立した。

協議を基に平成11年4月6日に「発掘調査委託契約」を締結し、4月7日から6月30日まで調査を実施した。

発掘調査にあたっては、調査事務所関係・表土排除業務関係・測量基準点設置の各業務については調査委託者の直接負担として調査準備の円滑化を図った。

調査途中、遺構の検出された面（II層上部）より下位の地層において遺構・遺物が存在するかどうかの確認のため、深掘り調査を実施した。深掘り調査区は、耕作による削平により残存遺構の希薄な調査区西部において、東西5m・南北6m・約30m²の範囲とした。その結果、現地表面から約1.5m、遺構確認面から約1m下がったIII層およびIV層上面において縄文の施された数点の土器片が発見された。またV層以下からは、遺構・遺物は発見されず、VI層下部に至ると水が染み出す状況となった。

深掘り調査の状況から、III層については、遺物包含層の可能性が高いと考えられたので、調査区中央部から東部の地域では、SK-3・4・5上坑、SE-1井戸跡等の掘削深度が深い遺構の壁面で、同層における遺物の包含状況を観察した。しかし、遺構壁面では遺物を発見することができなかった。深掘り調査区の希薄な遺物散布状況と、遺構壁面の観察結果から、本調査区におけるIII層に包含される遺物は少量で、その分布範囲も限られた狭い範囲と判断されたので、調査区全面に及ぶIII層の調査は実施しないこととした。

SE-1井戸跡は、現地表面から約2.5m、遺構確認面から約1.8mまで人力により調査を実施したが、石組を有する遺構で崩落の危険があるため、そこから下は重機を使用して調査を行った。重機では地表下約3.5m、標高6.2mまで下げたが、重機の作業限界と安全面からそれ以下の調査を断念し、調査記録も写真撮影だけに留めた。また、SK-3・4・5上坑も、確認面から約1m下げるごとに降水により水が溜まるたびに壁面が著しい崩落を起こしたので、確認面から約1.5mまで下げたところで調査を打ち切った。

原図者の協力を得て、野外調査は予定期日の6月30日に終了した。

2 調査要項

- 1) 遺跡名 欠ノ上II遺跡
- 2) 所在地 仙台市太白区郡山字欠ノ上2-10
- 3) 調査理由 宅地造成
- 4) 調査面積 340m²
- 5) 調査期間 平成11年4月12日～6月30日
- 6) 調査主体 仙台市教育委員会
- 7) 調査担当 仙台市教育委員会文化財課調査第二係
課長 大越裕光 調査第二係長 結城慎一
調査担当職員 工藤哲司 竹田幸司
- 8) 調査参加者 青木吉次 浅見禮子 向部みのる 伊藤清子 伊深みつ子 小野寺達重 加嶋みえ子
斎藤慶子 庄子弘子 須賀栄子 菅井民子 高橋美香 竹森光子 田中さと子 千田タイ子
島中真知子 三浦貴 山田千代子 横尾由紀子
- 9) 整理参加者 相沢せい子 安部文子 今野順子 庄子善昭 菅井民子 杉松比佐子 高橋朝子 高橋美香
中里とわ子 深瀬嶺子

第3章 調査概要

1 遺跡と調査区の位置

久ノ上II遺跡は先に述べたように、南北150m・東西200mの範囲で広がり、名取川・広瀬川・荒川の形成した標高約8mの自然堤防に立地している。遺跡の西側から南側にかけては、幅80m、自然堤防面との比高差約2.5mの旧河道による急斜面により区画され、北側と東側は旧河道または後背湿地へと緩やかに移行する。旧河道を挟んだ西側の後背湿地に立地する久ノ上I遺跡では、平安時代後半以降の水田跡が2面検出されている。また、北側に近接する久ノ上III遺跡からは、土器類・須恵器が採集されている。

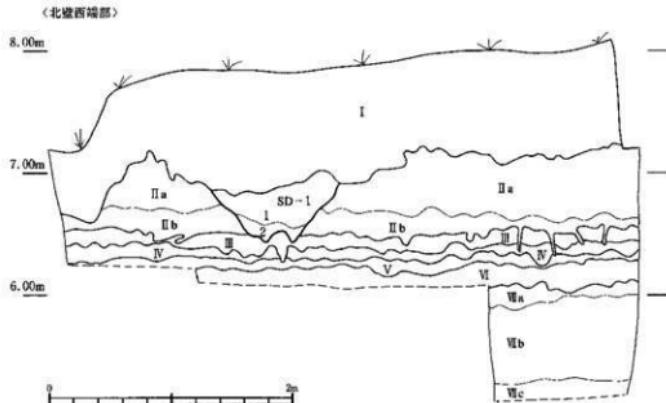
調査地点は、遺跡の北西部に位置する。調査区は、宅地造成に伴う道路に合わせて、自然堤防の中央部から自然堤防の西端にかけて東西長40.5m・南北幅約7mと、この調査区の西側で北側に幅約4.5m・長さ12mに渡って北側にT字状に交差する部分からなる。約340m²を調査した。地目は畑地である。遺構面は耕作によりかなり削平を受けている。特に自然堤防の肩部にあたる調査区西部の削平が著しい。

2 基本層位と発見遺構の概要

1) 基本層位

本調査においては、調査区西端部の深掘り調査の状況から基本層位を大別7層・細別10層に分けて調査を実施した。

I 層 暗褐色のシルト質粘土からなる耕作土層である。層厚は60~90cmあり、西部ほど厚い。土色の濃淡により上下2層に細分が可能であるが、両層ともビニールシートの断片を含む新しい耕作土である。II a層上部を削平している。土層中には耕作により遺構から巻き上げられた遺物が含まれている。



層位	土 色	土 質	標 號	層 位	土 色	土 質	標 號
I	10YR 5/4 黒褐色	シルト質粘土	耕 作 土	II	10YR 5/4 黑褐色	シルト質粘土	Ⅱa
IIa	10YR 5/4 黄褐色	色	シルト	下部に黄褐色土粒が多く含む			
IIb	10YR 5/4 黑褐色	シルト					
III	10YR 5/4 黑褐色	シルト					
IV	10YR 5/4 黑褐色	シルト					
V	10YR 5/4 黄褐色	シルト					
VI	10YR 5/4 黑褐色	シルト					
VIIa	10YR 5/4 黑褐色	シルト					
VIIb	10YR 5/4 黑褐色	シルト					

第4図 基本層断面図

II a層 黄褐色のシルト質粘土を基調とする土層で、層厚は40~60cm。現存の上面で7世紀後半以降の遺構が検出されている。層中には浅黄色シルトの薄い層を織状に含んでいる。含有物の状況により細分も可能である。

II b層 にぶい黄褐色のシルト質粘土を基調とする土層で、層厚は、20cm前後。暗褐色土粒を霜降状に含むほか、浅黄色シルトを織状または所によってブロック状に含んでいる。

II a層・II b層とも、調査区の場所によって上色・含有物に若干の相違が観察される。

III層 黒褐色の粘土層で、層厚は10~15cm前後。層中から縄文の付された土器片が数点出土している。上面では亀甲状の干割れが観察され、クラック内にはII b層が落ち込んでいる。底面には細かな凹凸が認められるが、水田耕作が行われたような下層の巻き上げは観察されない。

IV層 暗褐色のシルト質粘土層で、層厚は5~10cm。にぶい黄褐色粘土のブロックや炭化物粒を含んでいる。上面から縄文の付された土器片が出土している。

V層 灰黄褐色粘土を基調とする上層で、層厚は5~15cm。酸化鉄を霜降状に含む。また炭化物を粒状に少量含んでいる。

VI層 にぶい黄褐色のシルト質粘土層で、層厚は15~25cm。酸化鉄を霜降状に含む。

VIIa層 黄褐色の砂質粘土で、層厚は10~20cm。酸化鉄を斑状に含む。

VIIb層 褐色の砂層で、層厚は約65cm。層中央部は幅10~20cmの範囲が酸化したように赤く変色している。

VIIc層 にぶい黄褐色の砂層で、層厚は10cm以上ある。酸化鉄を斑状ないし雲状に含む。

VIIb層・VIIc層からは漆むぎやな湧水がある。

2) 発見遺構の概要

上述のように、本調査においてはII a層で遺構が検出され、III層及びIV層上面から土器片が数点出土している。

II a層上面において検出された遺構には、竪穴住居跡11軒（竪穴遺構を含む）・掘立柱建物跡5棟を含むビット125個・井戸跡1基・土坑10基（井戸跡の可能性のあるもの3基を含む）・溝跡2条がある。遺構間で切り合がある場合、いずれの場合も掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・溝跡は、竪穴住居跡よりも新しい。このことから欠ノ上II遺跡で検出された遺構にについては、第5回①・②のように、掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・溝跡などの遺構が組み合わさせて構成される時期と、主に竪穴住居跡だけで構成される時期の大きく2時期の変遷が考えられる。前者の時期は、後述のように出土遺物が少ないために時期を特定できるものは少ないが、出土遺物全体としては中世から近世の長期に渡る遺構群である。竪穴住居跡の時期は、古墳時代終末期頃から奈良・平安時代である。

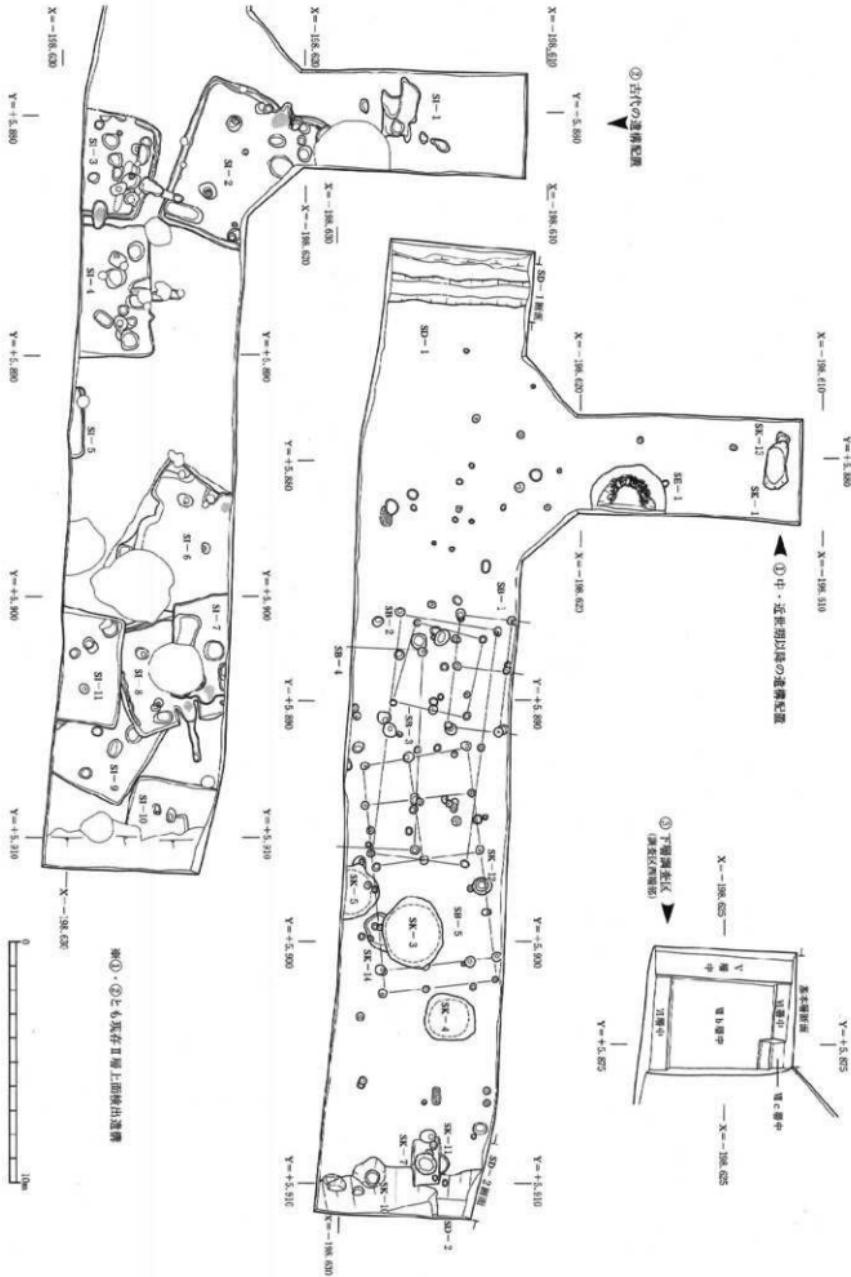
III層中及びIV層上面では土器片が数点出土しが、これに伴う遺構は発見されなかった。

第4章 発見遺構と出土遺物

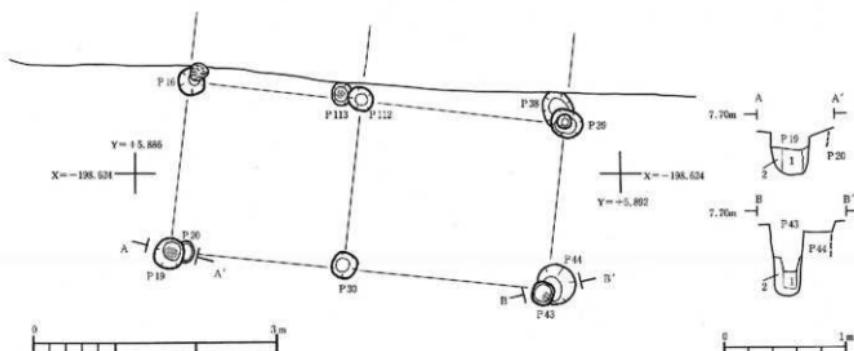
1 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、ビットの多数検出された調査区の中央付近で、5棟分を推定復元した。調査区の幅が狭いので、全容の不明なものもある。また、推定復元した5棟以外に、柱痕跡の検出されているビットも存在することから、他にも建物が存在した可能性もある。

SB-1 掘立柱建物跡 東西2間・南北1間分が検出されたが、北側にのびる可能性がある。検出部の東西長は4.7m（柱間寸法は西から220cm・250cm）、南北長は2.1m（東列）である。建物の方向は、南列でE-6°-S、西列でN-6°-Eである。SB-2・3 掘立柱建物跡とプランが重複しているが、遺構には直接の切り合いは無く、前後関係は不明である。またSB-4・5 掘立柱建物跡についても、近接した位置関係にあることから同時に存在し

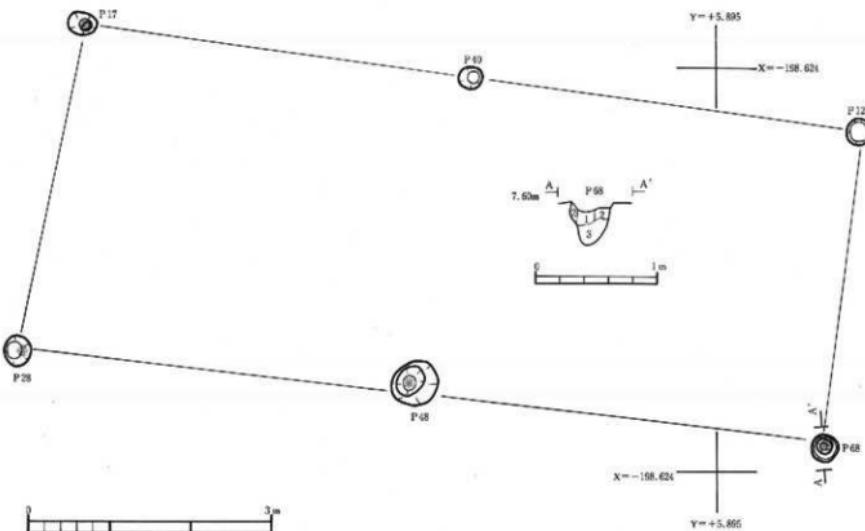


第5図 遺構配置図



ビットNo	P16	P112	P39	P19	P30	P43
形 状	圓 形	圓 形	圓 形	圓 形	圓 形	圓 形
大 き さ	34×36cm以上	31×26cm	37×35cm	37×36cm	36×36cm	28×25cm
深 さ	17.5cm	20cm	44cm	37cm	37cm	41cm
土 色	10YR5/4暗褐色	10YR5/4暗褐色	10YR4/4褐色	10YR4/4褐色	10YR4/4褐色	10YR4/4褐色
土 質	シルト	シルト質粘土	粘土質シルト	粘土	粘土質シルト	粘土
備 考	明黄褐色土上のブロックを含む	黄褐色土を粒状に含む	明黄褐色土・緑褐色土のブロックを含む	底面に浅黄色粘土土	明黄褐色土の小ブロッ	明黄褐色土のブロックを含む

第6図 SB-1 捩立柱建物跡

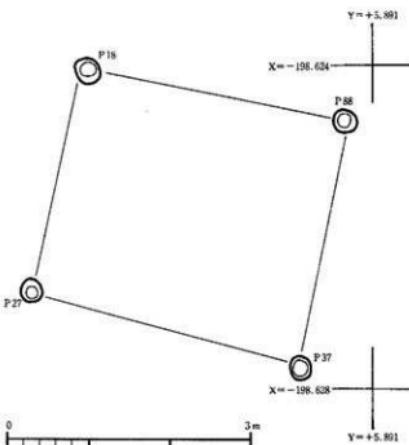


第7図 SB-2 捩立柱建物跡

SB-2 捜立柱建物跡

ピットNo.	P17	P40	P125	P28
部 位	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形 式	横円形	円 形	?	円 形
大 き さ	38×28cm	16×14cm	30×28cm	?
深 さ	16cm	11cm	12cm	?
土 色	10YR4/4 咸褐色	10YR4/4 咸褐色	10YR5/4 に近い黄褐色	10YR4/4 咸褐色
土 質	シルト質粘土	粘 土	粘 土	粘 土
備 考	明黄色土の小ブロックを多く含む 板石あり	暗褐色土の小ブロックを少々含む	羽黄褐色土・炭化物を含む	羽黄褐色土の小ブロックを少々含む

ピットNo.	P45	P68
部 位	掘り方	柱痕跡
形 式	横円形	円 形
大 き さ	61×32cm	10×10cm
深 さ	58cm	58cm
土 色	10YR4/4 咸褐色	10YR4/4 咸褐色
土 質	粘 土	粘 土
備 考	明黄色土の小ブロックを多く含む 炭化物を含む	羽黄褐色土を含む



ピットNo.	P18	P28
部 位	掘り方	柱痕跡
形 式	横円形	円 形
大 き さ	32×28cm	32×27cm
深 さ	28cm	9.5cm
土 色	10YR4/4 に近い黄褐色	10YR4/4 咸褐色
土 質	粘土質シルト	粘土質シルト
備 考	明黄色土のブロック・炭化物を含む	羽黄褐色土のブロックを少々含む

ピットNo.	P27	P37
部 位	掘り方	掘り方
形 式	円 形	円 形
大 き さ	28×26cm	29×24cm
深 さ	25cm	11cm
土 色	10YR4/4 咸褐色	10YR4/4 に近い黄褐色
土 質	粘土質シルト	粘土質シルト
備 考	明黄色土のブロック・炭化物を含む	羽黄褐色土のブロック・炭化物を含む

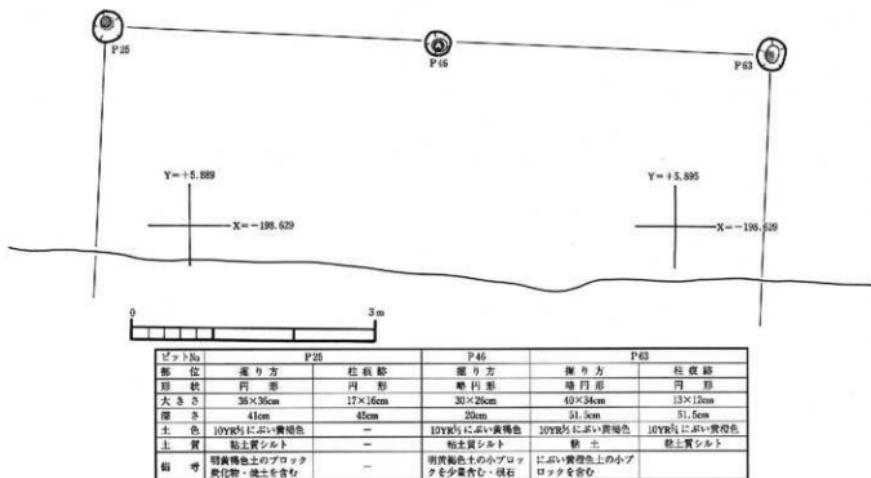
第8図 SB-3 捜立柱建物跡

た可能性は低いと考えられる。柱穴（掘り方）は、直径28~37cmの円形で、柱痕跡は直径12~16cmの円形である。遺物は、P.16から須恵器片1点・土師器片2点、P.19から土師器片4点、P.39から土師器片5点、P.43から須恵器片4点、P.112から刀子の破片と考えられる鉄製品が1点出土している。

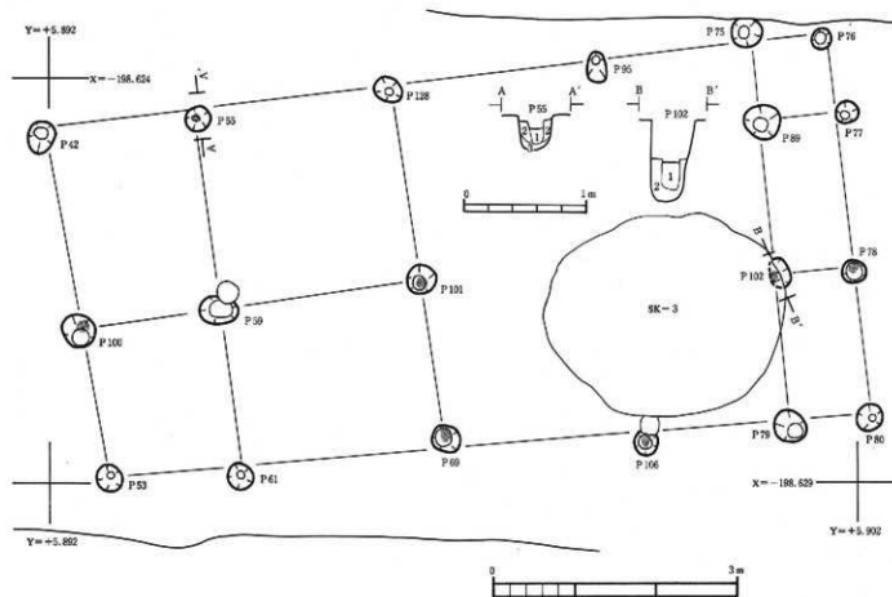
P.112・39・19・43は、それぞれ対応する位置に、これに切られる状況でP.113・38・20・44が存在していることから、SB-1 捜立柱建物跡は建替えられている可能性も考えられる。

SB-2 捜立柱建物跡 東西2間・南北1間の南北棟建物である。桁行総長は10.1m（柱間寸法は南列で西から485cm・525cm）、梁行総長は4.1m（東列）である。建物の方向は、南列でE-6°-S、（西列はN-6°-E）である。柱穴は、直径32~61cmの円形で、柱痕跡は直径10~16cmの円形である。遺物は、P.17から土師器片2点、P.48から上師器片13点が出土している。

SB-3 捜立柱建物跡 東西1間・南北1間の比較的小規模な建物である。東西長は3.4m（南列）、南北長は3.1m（東列）である。建物の方向は、南列でE-15°-S、東列でN-11°-Eである。柱穴は、直径30cm前後の円形で



第9図 SB-4 掘立柱建物跡



第10図 SB-5 掘立柱建物跡

ピッタ番	P42	P55	P128	P98
部 位	柱 痕	柱 痕	柱 痕	柱 痕
形 状	円 形	一	円 形	柱 痕
大 き さ	40×34cm	32×32cm	13×12cm	32×30cm
深 度	38.5cm	37cm	33cm	22cm
上 色	10YR5/2 基礎色	10YR5/2 基礎色	10YR5/2 基礎色	10YR5/2 基礎色
下 色	シルト質粘土	シルト質粘土	粘 土	シルト質粘土
備 考	阿蘇鉄色及び褐色 底土のブロックを含む	明黄褐色の小ブロックを含む	明黄褐色の小ブロックを多く含む	上: 黄色、下: 明黄褐色を複合に含む

ピッタ番	P75	P76	P77	P100	P59
部 位	柱 痕	柱 痕	柱 痕	柱 痕	柱 痕
形 状	円 形	柱 痕	円 形	円 形	柱 痕
大 き さ	38×36cm	26×24cm	45×40cm	48×40cm	48×32cm
深 度	49.5cm	13.5cm	35.5cm	47cm	47cm
上 色	10YR5/2 黑褐色	10YR5/2 基礎色	10YR5/2 基礎色	10YR5/2 基礎色	10YR5/2 基礎色
下 色	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	粘 土	粘 土
備 考	底土のブロックを含む	地盤上のブロック	地盤上のブロック	地盤上のブロックを含む	上: 黄色、下: 明黄褐色を複合に含む

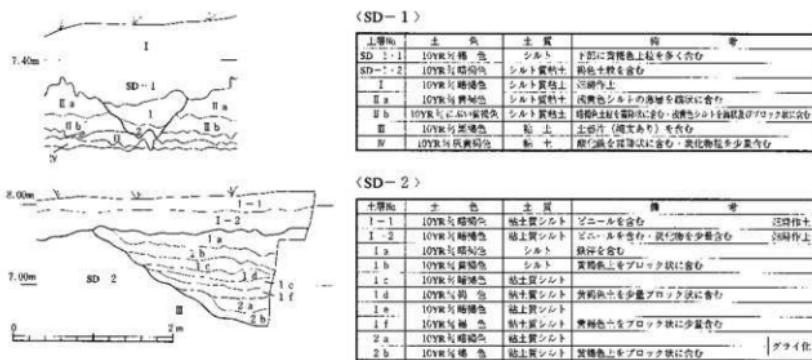
ピッタ番	P101	P102	P128	P53
部 位	柱 痕	柱 痕	柱 痕	柱 痕
形 状	円 形	円 形	円 形	円 形
大 き さ	38×35cm	14×16cm	16×(15?)cm	32×30cm
深 度	38.5cm	6.5cm	6.5cm	37.5cm
上 色	10YR5/2 基礎色	10YR5/2 基礎色	10YR5/2 基礎色	10YR5/2 基礎色
下 色	粘土質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土
備 考	底土のブロックを含む	地盤上のブロックを含む	地盤上のブロックを含む	底土のブロックを含む

ピッタ番	P61	P65	P106	P79	P80
部 位	柱 痕	柱 痕	柱 痕	柱 痕	柱 痕
形 状	円 形	円 形	円 形	円 形	円 形
大 き さ	32×26cm	35×33cm	18×15cm	28×28cm	40×38cm
深 度	34.3cm	—	54cm	11×11cm	36×35cm
上 色	10YR5/2 基礎色				
下 色	粘土質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土
備 考	底土のブロックを含む	地盤上のブロックを含む	地盤上のブロックを含む	底土のブロックを含む	地盤上のブロックを含む

ある。柱痕跡は検出されていない。遺物は、P.27から土師器片が6点出土しているだけである。

SB-4 捩立柱建物跡 東西410cmの等間隔で直線的に並び、柱痕跡も検出されたことからSB-4建物跡を想定した。南側の調査区外に展開すると考えられ、東側もSK-3上坑の位置までのびている可能性もある。東西長は8.2mで、柱列の方向はE-2°-Sである。柱穴は、直径30~40cmの円形で、柱痕跡は直径13~17cmの円形である。遺物は、P.25から土師器片4点、P.63から須恵器片2点、羽口片1点、鉄滓1点が出土している。

SB-5 捩立柱建物跡 東西桁行4間、南北梁行2間（東辺は3間）の変則的な南北棟建物で、東面に廟が付く。桁行総長は北列で8.85m（柱間寸法は西から192cm・235cm・258cm・180cm）、梁行総長は西列で4.3m（柱間寸法は北から245cm・185cm）、東列で4.85m（柱間寸法は北から115cm・190cm・180cm）である。建物の方向は、南列でE-6°-S、（西列はN-6°-E）である。西から2間分は中央に柄柱と考えられる柱穴がある。東側2間分の中央はSK-3土坑に切られているので柱の建物であったかどうかは不明である。柱穴は、直径28~44cmの円形を基調とし、柱痕跡は直径11~18cmまで不均一な円形である。遺物は、P.42から土師器片5点、P.59から須恵器片2点、土師器片1点、P.69から須恵器片2点、上師器片2点、P.75から須恵器片1点、土師器片4点、P.76から土師器片1点、P.77から土師器片6点、P.78から土師器片7点、P.80から土師器片が12点、P.89から須恵器片3点、土師器片7点、P.95から陶器片1点、土師器片5点、P.100から土師器片4点、P.101から土師器片4点、羽口片1点、鉄滓1点、P.102から須恵器片1点、土師器片7点、P.106から須恵器片1点、土師器片2点が出土している。出土遺物のうち、P.95から出土した陶器片は、唐津産の刷毛目文の碗または皿（図版17-17）で、17世紀後半から18世紀前半頃の年代に位置付けられ、SB-5摻立柱建物跡の年代と近い時期のものと考えられる。



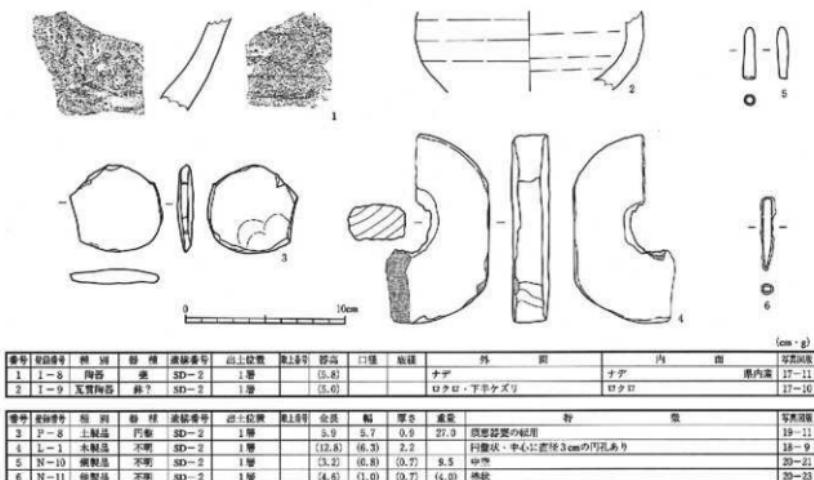
第11図 溝跡断面図

2 溝跡

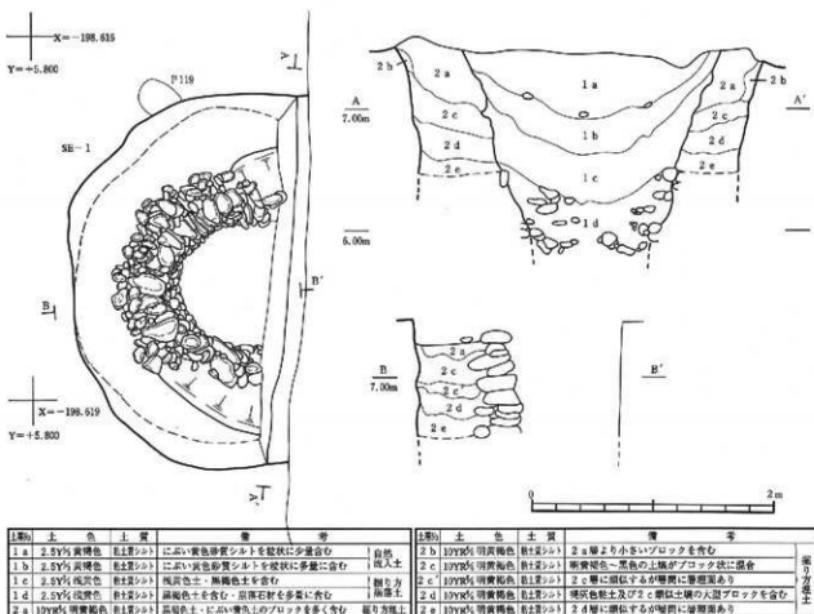
溝跡は、調査区の西端と東端で1条ずつ2条が検出されている。

SD-1 溝跡 調査区西端の自然堤防の肩部から斜面にかかるところで検出された。上面は耕作によってかなり削平を受けている。検出面での幅は上面で100cm前後で、方向はN-3°-Eで直線的に伸びている。断面形は逆台形を呈し、深さ60cm・底面幅40~50cmを測る。底面の北端と南端とでは、高低差は認められない。堆積土は上部が褐色シルト、下部が暗褐色シルト質粘土からなる自然堆積層である。両端から出土した遺物は、ロクロ使用を含む土師器片106点、須恵器片8点があるが、そのほとんどが摩滅した小破片であることから、これらの遺物は遺構の時期を反映しているものではないと考えられる。

SD-2 溝跡 調査区東端で、西岸の上端から底面の一部が検出された。S I-11堅穴住居跡を切り、溝の堆積土除去後にSK-10土坑を検出した。検出部分の最大幅は約2mである。断面形は台形を呈するものと考えられる。溝底面の北側には、溝を横断する方向で段差があり、南側が20cm前後低くなっている。溝の検出面からの深さは、段の北側は95cm・南側は122cmである。溝の方向は不明確であるが、N-5°-W前後である。SK-10土坑より南側の西岸斜面には、疊面が2地点・3段に抉られている部分がある。各段は略平坦になっており、昇り降りの際の足場であった可能性がある。堆積土は、人为的堆積層と考えられる黄褐色土ブロックを含む褐色の粘土質シルトないしシルト層と、自然堆積層と観察される暗褐色の粘土質シルトないしシルト層が交互に堆積している。層下部はグライ化している。遺物は、第12図及び図版17に示した陶器片4点・磁器片2点・木製品1点・須恵器の壺の破片を転用した円盤1点のほか、各層から多数の土師器片と須恵器片が出上している。I-7は体部外面に横位の筋目をもち内外面に鉄輪の施された壺または壺の破片、I-8は壺内壁と考へられる中世陶器壺の破片、I-9は鉢型の瓦質陶器片、I-10は灰白色の釉薬施された長胴の壺の破片である。J-2は肥前窯染付の皿の破片、J-3は描絵の碗または皿の破片である。L-1は、長径約11.5cm・厚さ2.2cmの楕円形を呈する円盤状の木製品で、中央で縦に半分に折れている。残存する木目方向の側面は直線的に加工されている。中央には直径3cmの円孔が明けられている。図示した遺物は、SD-2溝跡の1層から出土したもので、掘削時の年代を示すものではないが、図示しなかった土師器・須恵器を含めると遺物の年代は古代から中世・近世にまで及ぶ。この中でJ-2の肥前窯染付皿は18世紀以前、J-3の描絵磁器は19世紀後半以降の製品と考えられることから、この遺構の年代については近世以降と考えられる。



第12図 SD-2溝跡出土遺物



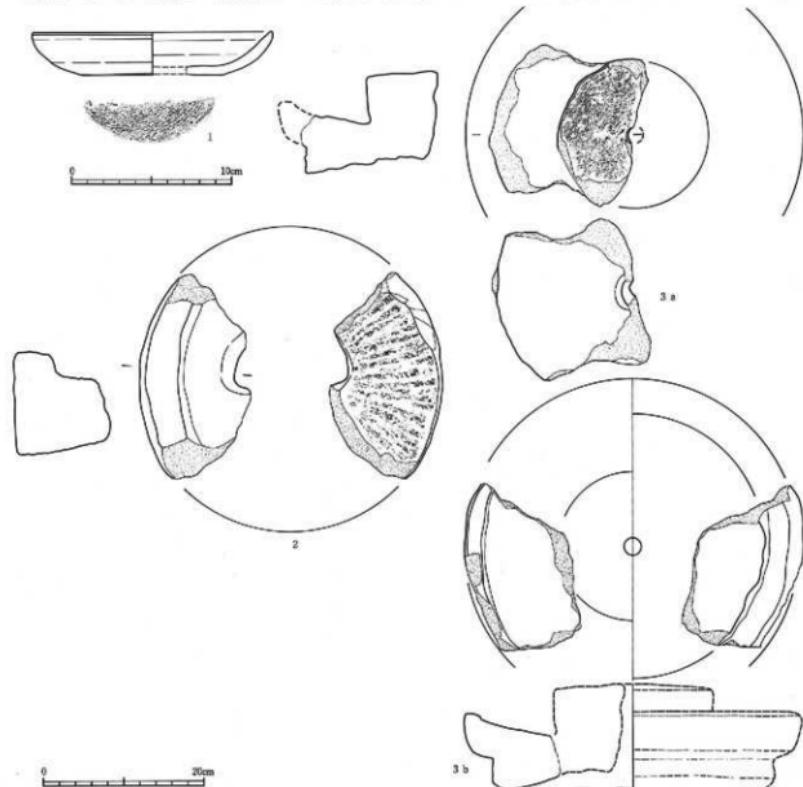
第13図 SE-1井戸跡

3 井戸跡

井戸跡として明確なものは、SE-1 井戸跡（調査時はSK-2と呼称）1基だけであるが、後述するように調査区の中央部で検出されたSK-3・4・5土坑（安全のため完掘せず。）についても井戸跡の可能性がある。本項ではSE-1 井戸跡について記述する。

SE-1 井戸跡 調査区の北西部で検出され、東半部は調査区外となる。SI-2 竪穴住居跡を切る。井戸跡周辺は調査区中央部と比較すると掘立柱建物跡・ピットが少ない。石組みの井戸枠を有する井戸である。現地表から3.5m、検出面から約2.8mまで掘り下げたが底面を検出することはできなかった。

<堆積土> 井戸跡の堆積土は、黄褐色ないし浅黄色の粘土質シルトからなり、自然堆積の状況を呈している。検出



番号	発見番号	種別	形態	波浪番号	出土位置	地上手引	器向	口径	底径	外観		内面	(cm・g)	
										外	内			
1	1-2	小わらけ	皿	SK-1	測り方			2.7	15.0	8.7	□クロ・測定赤目引	竹手引	17-0	
2	K-8	砂漠瓦臼	上口	SE-1	1-2層	(25.4)	(13.8)	4899	復元外径 38.6cm			安山岩	19-1	
3	K-9	茶臼	下口	SE-1	1-2層			12.8			復元外径 42.0cm		安山岩	19-2

第14図 SE-1 井戸跡出土遺物

面から約1.2m下がった地点から下層には、井戸枠の右組みから崩落した石材が多数混入している。

<掘り方>井戸の掘り方は、直径3.1mの円形である。壁面は約85°前後の急角度をなす。石組みと壁面との間は30~50cmの間隔がある。掘り方の埋め土は、地山を起源とする明黄褐色の粘土質シルトのブロックを主体としているが、細かく観察すると、石の積み方にに対応するように10~20cm間隔で積み手の違いが認められる。(第13図B-B') 石を1~2段積み上げる度に掘り上げた土を埋め戻し、さらに展圧を加える作業を繰り返したものと考えられる。

<石組み井戸枠>石組みは円形に組まれているが、東側の上部は崩落している。石組みの規模は、残存する上部の標高7.3m付近で外径約200cm・内径120cm、手掘り調査下端の標高5.8m付近で内径95cm程度である。石組みの石材は、井戸枠の内側の表面に出るように比較的規則的に積まれた大型ものと、これらの石の裏側に掘り方の埋め土とともに不規則に埋めこまれた小形のものの2種類がある。前者は長径20~30cm・短径10~15cmの扁平な橢円形の石材(河原石)で、長軸を放射状に配して下段の石と石の間に次の段の石を積み上げている。これらの表面に配された石の間には、詰め石状に表面側から楔状に挟まれた石も存在している。後者の石は、長径が20cm程度から10cm以下の小さななものまであり、表面の石の隙間および裏込めとして20~30cmの幅で配置されている。

<出土遺物>井戸跡の堆積土及び掘り方からは、陶器・磁器等とともに多数の土師器片・須恵器片が出土しているが、第14図・図版17には、この遺構の年代に關ると考えられる陶器・磁器を図示した。I-2は掘り方埋め土出土のいわゆるカワラケの皿である。ロクロを使用し、底部外面には回転糸切り痕が残る。底部から口縁部に至るまで丸みをもって緩やかに立ち上がり、仕上げは丁寧である。I-4は、崩落上ないし流入土から出土した唐津の碗で、長石胎の上に魚文のような鉛絵が描かれる。内面見込みには目跡が残る。I-6は、I-4と同一個体と考えられる口縁部の破片である。I-5も崩落土または流入土から出土した志野皿の底部片である。J-1は、掘り方の埋め土から出土した肥前の染付または白磁で、器種は碗または皿と見られる。これ以外の遺物としては石臼が3点出土している。石臼の種別としては、粉引き臼の上臼片1点(K-8)と茶臼の下臼片2点(K-9a・9b)がある。

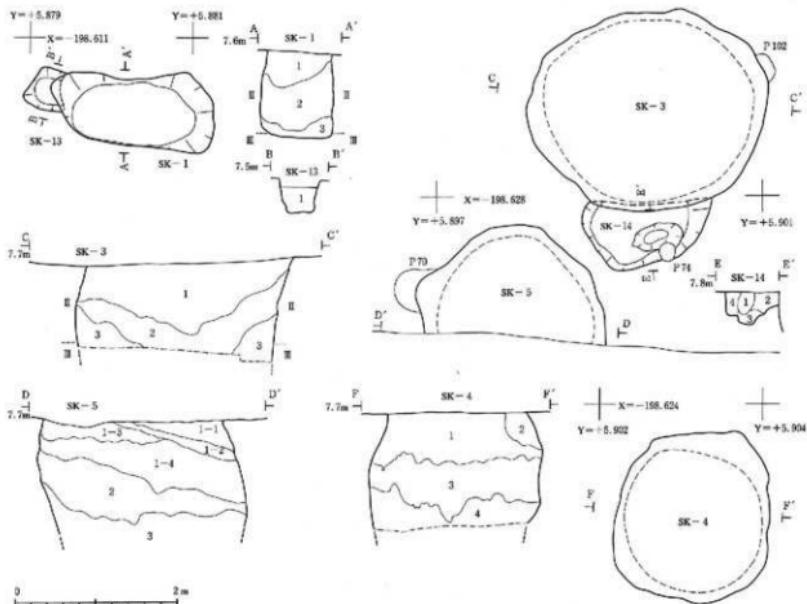
<遺構の年代>崩落上ないし流入土から出土した施釉陶器(I-4~6)については、16世紀末から17世紀代の年代に位置付けられるが、掘り方から出土した肥前磁器(J-1)は、17世紀後半以降のものと考えるのが妥当である。したがって、流入土からは江戸時代前期の遺物が出土しているが、遺構の年代は17世紀後半以降の江戸時代中期以降のものと考えられる。

4 土坑

土坑は10基検出されている。土坑の分布は、調査区の北西端部と東部の2箇所に別れている。東部はさらに掘立柱建物跡の集中する中央寄りの部分と、SD-2溝跡の西岸部とに分かれ、前者には大槻で深い土坑が優勢で、後者には小型で浅い土坑が分布している。

SK-1土坑 調査区の北端で検出されSK-13土坑を切っている。平面形は不整な長方形を呈し、長軸203cm・短軸99cmを測る。断面形は凹形で、深さは検出面から105cmである。壁面は、長辺側はほぼ垂直に掘られ、短辺側は傾斜をつけて掘られている。堆積土は、地山を起源とする褐色ないし黄褐色の粘土質シルト・シルト質粘土のブロックを主体とし、人為的な堆積状況を呈している。遺物は、1層から須恵器4点・土師器57点・溶解物付着土師器(トリベ)1点・鉄滓1点が、2層から須恵器片2点・土師器片20点・カワラケ片1点が出土している。カワラケは皿の破片で、底部外面には回転糸切り痕跡が残る。外面は底部と体部の境付近に角がついて急に立ち上がり、内面は底部から口縁部まで緩やかな弧状の立ち上がりとなる。

SK-3土坑 調査区の東部で検出され、SB-5掘立柱建物跡・SK-14土坑・SI-6・8堅穴住居跡を切ってい



<SK-1>

試験番号	土色	土質	備考
1	IJOYR灰褐色	色 黏土	しまりあり、炭化物・灰土を含む
2	IJOYR灰褐色	粘土	灰褐色シルト質粘土(下層部)をブロック状に含む
3	IJOYR灰褐色	シルト	堆積過程のブロック状を基とし堆積過程の粗粒灰土を含む

<SK-3>

試験番号	上色	土質	備考
1	IJOYR灰褐色	シルト	暗褐色土質シルトのブロックを土壌に多く含む、灰褐色土を認める
2	IJOYR灰褐色	粘土	土壌に暗褐色粘土の大形のブロックを含む
3	IJOYR灰褐色	粘土	大形のブロック状の堆積、堆積シルト質粘土の大形ブロックを含む

<SK-4>

試験番号	土色	土質	備考
1	2,3,YR灰褐色	シルト	暗褐色シルト質粘土の大形ブロックを多く含む、全量がブロック状の堆積
2	IJOYR灰褐色	砂質シルト	灰褐色シルト質粘土の大形ブロック、砂質のシルト質土の大形ブロックを含む
3	IJOYR灰褐色	シルト	大形のブロック状の堆積、堆積シルト質粘土の大形ブロックを含む
4	IJOYR灰褐色	粘土	堆積シルト質粘土の大形ブロックを含む

<SK-5>

試験番号	土色	土質	備考
1-1	IJOYR灰褐色	シルト	暗褐色土質シルト質粘土の大形ブロックを多く含む
1-2	IJOYR灰褐色	砂質シルト	にかい灰褐色土質シルト質粘土の大形ブロックを含む
1-3	IJOYR灰褐色	砂質シルト	にかい灰褐色土質シルト質粘土の大形ブロックを含む
1-4	IJOYR灰褐色	粘土	暗褐色粘土とのブロック状の混合層
2	IJOYR灰褐色	シルト質粘土	にかい灰褐色シルト質粘土の大形ブロックの混合層
3	IJOYR灰褐色	粘土	暗褐色粘土を部分的に少量化

<SK-13>

試験番号	土色	土質	備考
1	IJOYR灰褐色	シルト質粘土	明黄褐色粘土の小ブロックを含む

<SK-14>

試験番号	上色	土質	備考
1	IJOYR灰褐色	砂質シルト	灰褐色粘土、暗褐色土の小ブロックを多く含む、根土・高湿度を含む
2	IJOYR灰褐色	シルト質粘土	にかい灰褐色粘土のブロックを多く含む
3	IJOYR灰褐色	粘土	明黄褐色粘土を少量含む
4	IJOYR灰褐色	シルト質粘土	

第15図 土坑跡1 (SK-1・3・4・5・13・14)

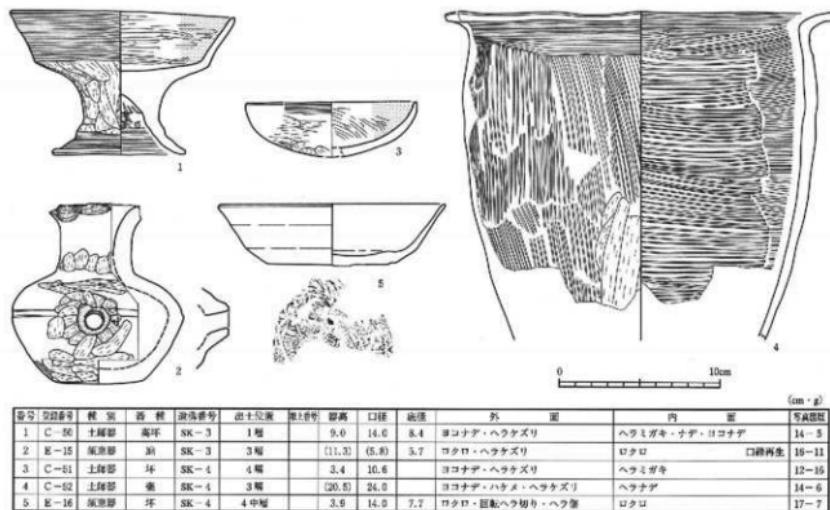


0 10cm

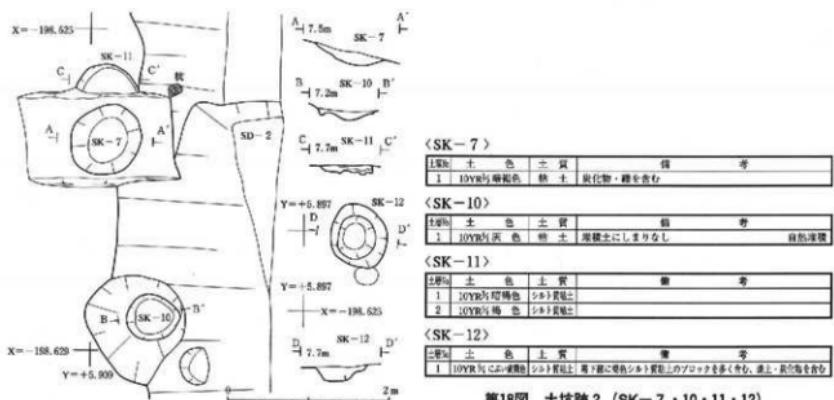
(cm g)

試験番号	試験部位	種	試験部位	測定部位	当土深度	試験割引	高さ	口径	底面	外	内	等高線
1	1-1	かわらけ	Ⅲ	SK-1	2層	(2.2)	8.1	ロクロ・同根系切引	ロクロ	17-8		

第16図 SK-1 土坑跡出土遺物



第17図 SK-3・4 土坑跡出土遺物



る。平面形は円形を呈し、東西軸297cm・南北軸248cmを測る。検出面から125cmの深さまで調査したが底面に達しなかった。調査部分の壁面はほぼ垂直で、一部の壁面はオーバーハングしているが、この部分については調査時の状況から壁面の崩落によるものと判断される。堆積土は、地山を起源とする褐色ないし黄褐色の粘土またはシルトのブロックを主体とし、人為的な堆積土または壁面の崩落土と観察される。堆積土中からは第17図の土器部高环・須恵器等の多数の土器片が出土しているが、これらの遺物はSK-3土坑が切っている堅穴住居跡に伴うものが壁面の崩落などによって流入したもので、遺構の時期とは直接関係していないと考えられる。

SK-4 土坑 SK-3 土坑の北東側1.2mのところで検出された。SI-7・8堅穴住居跡を切っている。平面形は円

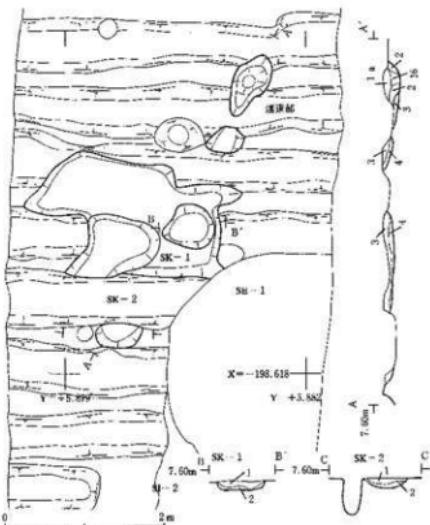
形を呈し東西軸189cm・南北軸223cmを測る。検出面から150cmの深さまで調査したが底面に至らなかった。調査部分の壁面は、上端部よりも中程が崩落によって抉れて広くなっている。堆積土は、黄褐色ないし黒褐色土のブロックを主体とし、SK-3土坑と同様に人為的な堆積土または壁面の崩落土である。堆積土中からは、第17回の土師器壺・壺・須恵器壺など多数の土器片が出土しているが、これらも重複する堅穴住居跡に伴う遺物の流入と考えられる。

SK-5土坑 SK-3土坑の南西70cmのところで検出された。掘立柱建物跡との関係の明らかでないピット70・71・72に切られている。南側は調査区の外にのびている。検出部の平面形は半円形を呈し、東西軸227cmを測る。検出面から140cmの深さまで調査したが底面に達しなかった。壁面はSK-4土坑同様に抉れて中膨らみとなっている。堆積土は、黄褐色のブロックを主体とし、SK-3・4土坑と同様に人為的な堆積土及び壁面の崩落土によって堆積している。堆積土中からの出土遺物は土師器12点・鉄片1点があるだけで、SK-3・4土坑と比較すると少ない。堅穴住居跡との重複のないSK-5土坑からの出土遺物が少ないと、SK-3・4土坑から出土した多数の遺物が、重複する堅穴住居跡に由来することを示しているものと解釈される。

SK-7土坑 SD-2溝跡の西岸部で検出された。SD-2溝跡・SI-10堅穴住居跡・SK-11土坑と重複する位置関係にあるが、試掘調査の掘削により各遺構の底面よりも下がった面で検出されたので、前後関係は不明である。平面形は円形を呈し、東西軸87cm・南北軸86cmを測る。断面形は緩やかな舟底形を呈し、検出面からの深さは15cm程度である。堆積土は炭化物や礫を含む暗褐色の粘土層で、自然堆積と考えられる。堆積土中からは土師器片が5点出土している。

SK-10土坑 SD-2溝跡の西岸部で、同溝跡の堆積土除去後に検出された。平面形は円形を呈し、東西軸66cm・南北軸67cmを測る。断面形は緩やかな舟底形を呈し、検出面からの深さは15cm程度である。堆積土は、灰色の粘土からなる自然堆積層1層である。遺物は堆積土中から土師器片が3点出土している。

SK-11土坑 SK-7土坑の北側で検出された。南側半分は試掘調査の際に削平されている。SI-11堅穴住居跡を切っている。残存部の平面形は半円形を呈し、東西残存軸78cmを測る。断面形は不整形形で、底面も凹凸が著しい。検出面からの深さは8~12cm程度である。堆積土は2層に分けられ、1層は暗褐色シルト質粘土、2層は褐色のシルト質粘土である。遺物は出土していない。



番号	土色	土質	備考
1 a	7.5YR+褐色	粘土	黒褐色土上・青褐色土・黄褐色土のブロックを多く含む
1 b	7.5YR+褐色	土	1a層に比べて青褐色を少しうのブロックを混入
2	2.5YR+褐色	シルト	炭化物・黄褐色土上のブロックを多く含む
3	2.3YR+褐色	シルト	所々褐色土のブロックを少く含む(盛り方土)
4	2.5YR+褐色	シルト	黒褐色土の土を少し含む(盛り方土)
5	10YR+褐色	シルト	10YR+褐色を少しうのシルト
6	10YR+褐色	シルト	10YR+褐色を少しうのシルト
7	10YR+褐色	シルト	10YR+褐色を少しうのシルト
8	2.5YR+褐色	シルト	上層に黒褐色を含むシルトを粒状に含む
9	2.5YR+褐色	シルト	炭化物・土を含む中に含む

規模	方向(カマド中心)	カマド位置	埋没在土	底	地	生土穴	時	期
(2.6×2.4)m	(N-23°-E)	北東壁中央	0cm	SI-2 ≈ 7 ≈ SK-1 = SE 1	不明	不	明	

第19図 SI-1堅穴住居跡

SK-12土坑 調査区西部の中央よりで検出された。SI-6堅穴住居跡を切っている。平面形は略円形を呈し、東西軸69cm・南北軸77cmを測る。断面形は途中で傾斜の変わる逆台形を呈する。検出面からの深さは19cm程である。堆積土はにぶい黄褐色のシルト質粘土層である。遺物は堆積土中から須恵器片1点と土師器片33点・溶解物付着土師器片1点が出土している。

SK-13土坑 調査区北部でSK-1土坑に東部を切られた状態で検出された。残存部の平面形は略方形を呈し、南北軸53cmを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは40cm程である。堆積土は、褐色のシルト質粘土で、明黄褐色土のブロックを含む。人為的な堆積土と観察される。遺物は出土していない。

SK-14土坑 SK-4上坑に北半部を切られて検出された。残存部の平面形は略円形を呈し、東西軸141cm・残存南北軸75cmを測る。断面形は不整形で、底面には凹凸がある。深さは最深部で12cmである。堆積土はにぶい黄褐色および明黄褐色土層である。遺物は、堆積土中から須恵器片1点と土師器片5点が出土している。

5 堅穴住居跡

堅穴住居跡は住居跡と確定できない堅穴遺構を含めて11棟検出されている。堅穴住居跡は、調査区西端を除くほぼ全域から重複しながら検出されている。

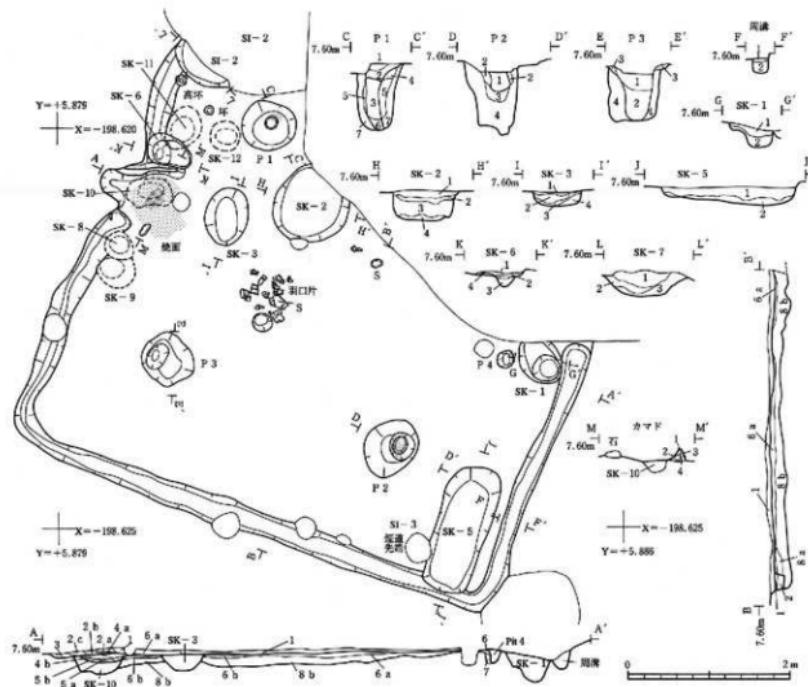
SI-1 堅穴住居跡 【位置・遺存状況・重複】調査区北西部で検出された。遺構は削平されてしまつておらず、煙道の一部と土坑・掘り方の一部が残っているだけである。SE-1 井戸跡に切られている。SI-2 堅穴住居跡と重複する位置関係にあるが、削平のために新旧関係は不明である。

【平面形・規模・方向】削平のため平面形は不明である。残存範囲は東西2.6m・南北2.4m（煙道の長さは含まれない）である。煙道から推定される軸方向はN-23°-Eである。

【堆積土】住居跡そのものの堆積土は残存しておらず、カマドの堆積土の一部と掘り方埋め土の一部が残っているだけである。

(SI-2)

地番	南北	東西	土質	風景	参考
1.	10YR 5/10 程度赤土	私家墓	明黄褐色土・純褐色土・炭化物付着土	堅穴1	10YR 5/10 程度赤土・明黄褐色土・炭化物付着土のブロックを少數含む
2-a	10YR 5/8 明黄褐色土	私家墓	灰化土・焼土を含む。カマド焼土	堅穴2	10YR 5/8 明黄褐色土 粘土・明黄褐色土のブロックを少數含む
2-b	10YR 5/8 明黄褐色土	樹木下	にじみ黄褐色土や灰化土に含む、灰化物、焼土を少數含む	堅穴3	2.5% 明黄褐色 粘土・明黄褐色土を多く含む、灰化物を少數含む
2-c	10YR 5/8 明黄褐色土	樹木下	灰化物・焼土を多量に含む	堅穴4	2.5% 明黄褐色 粘土・灰化物を多く含む、灰化物を少數含む
3.	10YR 5/8 明黄褐色土	樹木下	明黄褐色土を多量含む。土甌・須恵器・燒土を少數含む	堅穴5	10YR 5/8 明黄褐色 粘土・須恵器・燒土を少數含む
4-a	2.5% 以下	樹木下	陶器ブロックを多く含む	堅穴6	2.5% 以下 灰化物・土甌
4-b	2.5% 以下	樹木下	灰・炭化物・焼土を少數含む	堅穴7	2.5% 以下 灰・灰化物・土甌
5.	2.5% 以下	樹木下	灰化物を多く含む。土甌・須恵器・燒土を少數含む	堅穴8	2.5% 以下 灰化物・土甌
6-a	10YR 5/8 黄褐色土	樹木下	灰化物の一部を含む。土甌・須恵器・燒土を少數含む	堅穴9	2.5% 以下 灰化物・土甌
6-b	10YR 5/8 黄褐色土	樹木下	灰化物を多く含む。土甌・須恵器・燒土を少數含む	堅穴10	2.5% 以下 灰化物・土甌
7.	2.5% 以下	樹木下	灰化物を多く含む。土甌・須恵器・燒土を少數含む	堅穴11	10YR 5/8 黄褐色土 灰化物・土甌
8-a	2.5% 以下	樹木下	須恵器土・陶器ブロックを含む	堅穴12	10YR 5/8 明黄褐色 土・土甌
8-b	2.5% 以下	樹木下	須恵器土・陶器ブロックを少數含む	堅穴13	10YR 5/8 明黄褐色 土・土甌
P1	2.5% 明黄褐色土	樹木下	明黄褐色土・灰化物を含む	堅穴14	10YR 5/8 明黄褐色 土・土甌
P1-1	7.5% 黄褐色土	樹木下	にじみ黄褐色土のブロックと明黄褐色土・灰化物を含む	堅穴15	10YR 5/8 明黄褐色 土・土甌
P1-2	10YR 5/8 明黄褐色土	樹木下	明黄褐色土を多量に含む	堅穴16	10YR 5/8 明黄褐色 土・土甌
P1-3	2.5% 以上	樹木下	明黄褐色土を多量に含む	堅穴17	2.5% 明黄褐色 土・土甌
P1-4	2.5% 以上	樹木下	明黄褐色土を多量に含む	堅穴18	2.5% 明黄褐色 土・土甌
P1-5	2.5% 以上	樹木下	明黄褐色土を多量に含む	堅穴19	2.5% 明黄褐色 土・土甌
P2	10YR 5/8 黄褐色土	樹木下	土甌を含む。土甌・須恵器・燒土を少數含む	堅穴20	10YR 5/8 黄褐色土 土甌
P2-1	10YR 5/8 黄褐色土	樹木下	土甌を含む。土甌・須恵器・燒土を少數含む	堅穴21	10YR 5/8 黄褐色土 土甌
P2-2	10YR 5/8 黄褐色土	樹木下	土甌を含む。土甌・須恵器・燒土を少數含む	堅穴22	10YR 5/8 黄褐色土 土甌
P2-3	10YR 5/8 黄褐色土	樹木下	土甌を含む。土甌・須恵器・燒土を少數含む	堅穴23	10YR 5/8 黄褐色土 土甌
P3	2.5% 黄褐色土	樹木下	土甌を含む。土甌・須恵器・燒土を少數含む	堅穴24	2.5% 黄褐色土 土甌
P3-1	10YR 5/8 黄褐色土	樹木下	土甌を含む。土甌・須恵器・燒土を少數含む	堅穴25	10YR 5/8 黄褐色土 土甌
P3-2	10YR 5/8 黄褐色土	樹木下	土甌を含む。土甌・須恵器・燒土を少數含む	堅穴26	10YR 5/8 黄褐色土 土甌
P3-3	2.5% 黄褐色土	樹木下	土甌を含む。土甌・須恵器・燒土を少數含む	堅穴27	2.5% 黄褐色土 土甌
P3-4	10YR 5/8 黄褐色土	樹木下	土甌を含む。土甌・須恵器・燒土を少數含む	堅穴28	10YR 5/8 黄褐色土 土甌
P3-5	2.5% 黄褐色土	樹木下	土甌を含む。土甌・須恵器・燒土を少數含む	堅穴29	2.5% 黄褐色土 土甌
P4	10YR 5/8 黄褐色土	樹木下	土甌を含む。土甌・須恵器・燒土を少數含む	堅穴30	10YR 5/8 黄褐色土 土甌
P4-1	10YR 5/8 黄褐色土	樹木下	土甌を含む。土甌・須恵器・燒土を少數含む	堅穴31	10YR 5/8 黄褐色土 土甌
P4-2	10YR 5/8 黄褐色土	樹木下	土甌を含む。土甌・須恵器・燒土を少數含む	堅穴32	10YR 5/8 黄褐色土 土甌
P4-3	2.5% 黄褐色土	樹木下	土甌を含む。土甌・須恵器・燒土を少數含む	堅穴33	2.5% 黄褐色土 土甌



第20図 SI-2 穫穴住居跡

【床面・壁面・柱穴】床面・壁面は残存せず不明である。柱穴も検出できなかった。

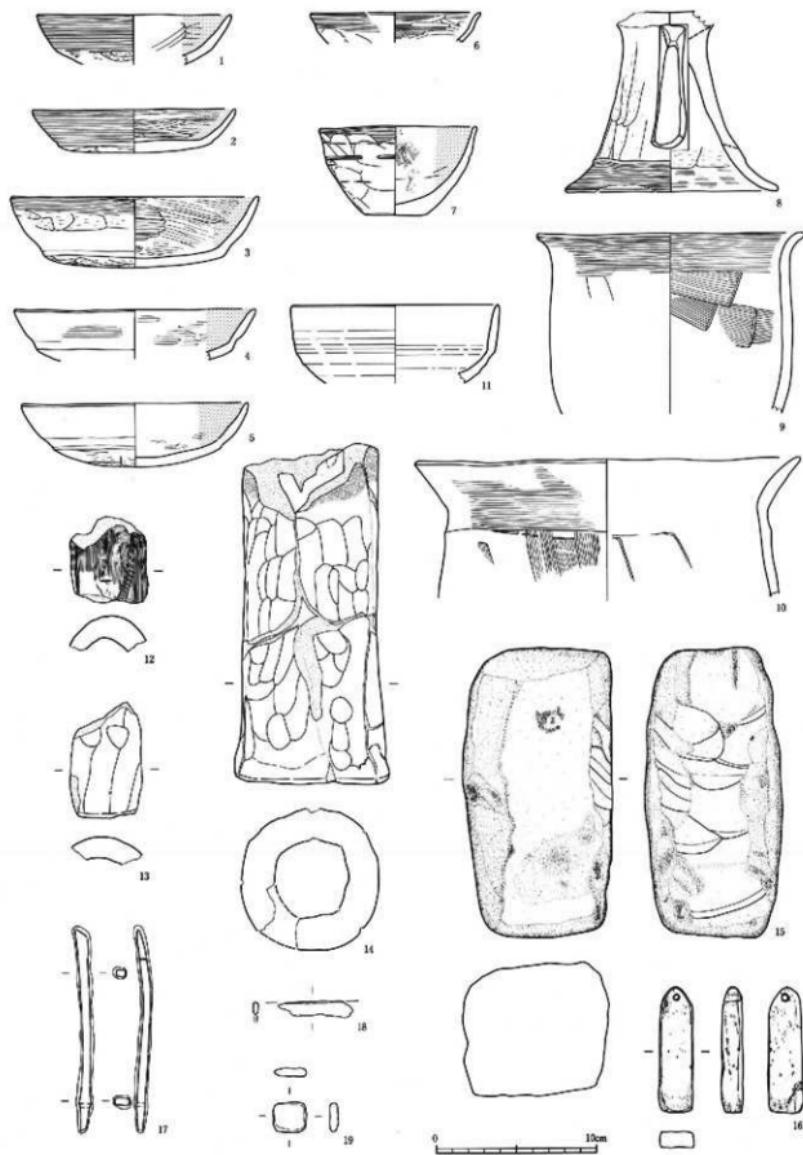
【カマド】カマド自体は残存していないが、煙道の先端部と考えられる落ち込みが、残存する遺構の北東部で検出されたことから、カマドの位置は北東の壁面と考えられる。

【周溝】周溝は検出されていない。

【掘り方】掘り方の一部と考えられる不整形の落ち込みが検出されたほか、掘り方底面で堆積土に焼土や炭化物を含む小規模な土坑が2基検出されている。

【遺物出土状況と出土遺物】遺存状況が悪いため、出土遺物も少なく、掘り方の埋め土中から非ロクロ土師器片5点、SK-1土坑から非ロクロ土師器片5点、須恵器片1点が出土しているだけである。固化した遺物はない。

規格	方向(カマド中心)	カマド位置	壁残存高	底	幅	柱穴	時 期
6.3×(5.4) m	N=69°-W	北西面	7~5cm	SI-2⇒SI-3	P. 1-2-3 (+1)	1a期	
ピット3m							
掘方形状	円 形	略円形	圓柱形	略円 形			
掘方大きさ	66×60cm	77×61cm	63×69cm	21×26cm			
深 度	93cm	96cm	86cm	22cm			
柱根形状	円 形	円 形	—	—			
柱根大きさ	17×(10) cm	20×(16) cm	—×—cm	—×—cm			



第21図 SI-2 積穴住居跡出土遺物

SI-2

(cm・g)

序号	全跡番号	種別	形	種	直径(単位)	出土位置	地層番号	基高	U往	火候	外観	内観	年月日
1.	C-28	土器部品	环	SI-2	1層	床面	No3-4	(3.1)	12.0		ヨコナデ・ヘラケズリ	ハラミガキ	
2.	C-3	土器部品	环	SI-2	床面	No3	2.7	12.5	9.0	ヨコナデ・ヘラケズリ	ハラミガキ	12-4	
3.	C-2	土器部品	环	SI-2	床面	No3-8	4.4	15.4	11.1	ヨコナデ・ヘラケズリ	ハラミガキ	12-3	
4.	C-5	土器部品	环	SI-2	6層		(2.0)	14.9	12.1	ヨコナデ・ヘラケズリ	ハラミガキ		
5.	C-4	土器部品	环	SI-2	P-3-6層		(1.1)	14.0	10.2	ヨコナデ・ヘラケズリ	ハラミガキ	12-5	
6.	C-6	土器部品	环	SI-2	SK-2 土		(1.8)	10.5		ヨコナデ・ナナ	ハラミガキ・介内無		
7.	C-7	土器部品	环	SI-2	底清1層		5.6	9.6	3.4	ヨコナデ・ナナ	ナダ・指紋有	14-1	
8.	C-1	土器部品	环	SI-2	底清	No1	(1.1, 3)		13.1	ハラケズリ・ヨコナデ・3方追し	ハラケズリ・ヨコナデ	24-4	
9.	C-8	土器部品	壳	SI-2	SK-1-1層		(11.3)	16.5		ヨコナデ・ナナ	ヨコナデ・ヘラナ	14-7	
10.	C-9	土器部品	壳	SI-2	SK-2-3層土		(8.2)	23.8		ヨコナデ・ヘラナ	ヘラナ	24-8	
11.	E-1	陶質	环	SI-2	床面		(4.9)	12.7		テクノ	テクノ	17-1	

序号	全跡番号	種別	形	種	直径(単位)	出土位置	地層番号	全長	幅	厚さ	重量	特徴	年月日
12.	P-1	土器部品	羽口	SI-2	6層切妻		5.9	(4.8)	1.5		ハケノ網目	19-4	
13.	P-2	土器部品	羽口	SI-2	断面1層		(7.3)	(4.5)	1.3		ナダ無	19-5	
14.	P-3	土器部品	羽口	SI-2	床面	No9	(21.3)	(9.7)	2.1	1193	面あり・工具による加工痕あり	19-3	
15.	E-2	石製品	不明	SI-2	カマド南シダ		18.2	9.1	8.5	1289	面あり・工具による加工痕あり	18-4	
16.	E-1	石製品	砥石	SI-2	床面		7.8	2.2	1.0	30	孔φ60mm	18-1	
17.	N-1	石製品	砥石	SI-2	6層		(2.9)	(1.3)	(1.2)	17.0	片刃無	20-1	
18.	N-3	鉄製品	鍔?	SI-2	断面1層		(4.7)	(1.1)	(0.3)	3.5		20-9	
19.	N-2	鉄製品	不明	SI-2	断面6層		(2.1)	(1.9)	(0.6)	5.5	丸形板状	20-18	

SI-2 壁穴住居跡 [位置・遺存状況・重複] 調査区北西部で検出された。耕作による削平が一部床面に及び、良好な遺存状態とは言い難いが、全体の輪郭は残っている。住居跡の北西部はSE-1井戸跡に切られ、北部から北東部は調査区の外にのびている。またSI-3壁穴住居跡の煙道に切られている。

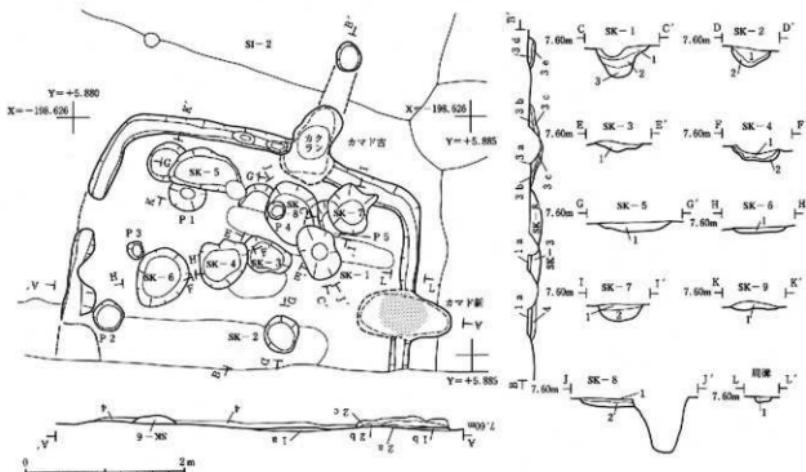
[平面形・規模・方向] 平面形は、南北の大きさが不明であるため確定はできないが、柱穴の配置から東西・南北の長さのはば等しい正方形を呈するものと推定される。規模は、東西6.3m・検出部南北長5.4mを測る。方向はN-69°-Eである。

[堆積土] 残存部の堆積土は、カマド付近を除くと、にぶい黄褐色の粘土質シルト1層からなり、残存する堆積土の層厚は2~5cm程度である。

[床面・壁面] 床面はほぼ平坦であるが、全体に西側がやや低くなっている。床面には浅黄色の粘土による貼り床が施され、丁寧に床が仕上げられて締まっている。特に、カマド前面から反対側の壁面にかけての住居跡中央部は繕まりが顕著である。カマド周辺の床面では多数の十坑が検出され、このうちSK-2・3・6・8・9・11土坑には焼土・炭化物が多く認められカマド内の堆積物（灰・消し炭・カマド崩落土等）の処理用に掘削された可能性が考えられる。壁面は、西壁についてはカマドの部分がやや内側に入り込むように掘られているが、他の辺はほぼ直線的である。壁の立ち上がりは緩やかであるが、周溝部分は急な立ち上がりである。

[柱穴] P. 1・2・3が柱穴と考えられる。検出された3個の柱穴の配置から、主柱穴は4本であると推定される。各柱穴は長軸が60~70cmの円形ないし不整形の掘り方で、柱痕跡は直径20~30cmの円形である。柱間寸法は東西約3.2m・南北約3.3mである。柱穴列と壁面までの距離は東面が1.75m・西面が1.5m・南面が1.65mほどである。カマドの反対側の東壁面中央近くには、小型のビット（P. 4）があるが、このビットについては、梯子の据え穴の可能性がある。

[カマド] カマドは西壁の中央に位置し、カマド奥部が住居の方形プランの外にわずかに張り出るように作られている。右袖の下端部・煙道の付け根部分・燃焼部の焼上面が残っている。右袖は、壁面から八字状に開いて、約55cmに渡って細長く残っていた。残存部の高さは約12cmある。焼け面は西壁から60~80cm離れた部分が強く焼け、



規 模	方 向 (カマド中心)	カマド位置	壁面高さ	重	復	生 烧 火	時 期
4.4x1.3(2.2) m N=15° E=N-75° W			6~9cm	SI-2~4 ⇔ SI-3		P1~SK-1?	1b期

ピットNo	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
掘方形状	円 形	円 形	椭 圆 形	円 形	椭 圆 形
掘方底面	45x(32) cm	38x37cm	24x21cm	23x22cm	(50) x (14) cm
深 度	60cm	12.5cm	21.5cm	11cm	23cm
柱状形状	-	-	-	-	-
柱状直径	-x~cm	-x~cm	-x~cm	-x~cm	-x~cm

層	上 色	土 質	相 扇	層	上 色	土 質	相 扇
1 a	JOYR 5% C-25% 黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色土を粒状に含む	2 a	JOYR 5% 明黄褐色	シルト質粘土	にいに明黄褐色土を粒状に含む。炭化物・焼土を多量に含む
1 b	JOYR 5% 明黄褐色	粘土質・炭化物を多量に含む。カマド内堆積土(新熱)		2 b	JOYR 5% 明黄褐色	シルト質粘土	上面に炭化物・焼土を帶状に含む
2 c	JOYR 5% C-25% 黄褐色	焼 土	2~3cmの厚さで常有	2 d	JOYR 5% 明黄褐色	シルト質粘土	炭化物・焼土を薄くに含む
2 e	JOYR 5% 黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色土を多量に含む	2 f	JOYR 5% 明黄褐色	シルト	明黄褐色土をプロック状に含む
3 a	JOYR 5% 黄褐色	シルト	炭化物・焼土を少量含む。カマド内堆積土(古熱)	3 b	JOYR 5% 明黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色土・炭化物・焼土を少量含む
3 b	JOYR 5% 黄褐色	シルト	炭化物・焼土を多量に含む。カマド内堆積土(古熱)	3 c	JOYR 5% C-25% 黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色土を粒状に含む
3 c	JOYR 5% C-25% 黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色土を粒状に含む	3 d	JOYR 5% 黄褐色	シルト	焼土・炭化物・にいに明黄褐色土を多く含む
3 e	JOYR 5% 黄褐色	シルト	明黄褐色土・燒結物を粒状に含む	3 f	JOYR 5% 黄褐色	シルト	にいに明黄褐色土及び過熟土を1層より多く含む
4 a	JOYR 5% 明黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色土を粒状に含む。表面静脈状方塊土	4 b	2.5% 黄褐色	シルト	上面に炭化物・焼土を帶状に含む
4 b	JOYR 5% C-25% 黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色土を粒状に含む。表面静脈状方塊土	4 c	JOYR 5% 明黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色土を粒状に含む
4 c	JOYR 5% C-25% 黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色土を粒状に含む	4 d	JOYR 5% 明黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色土・炭化物・焼土・明黄褐色土を少量含む
4 d	JOYR 5% C-25% 黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色土を粒状に含む	4 e	JOYR 5% 明黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色土を少量含む

第22図 SI-3 穹穴住居跡

110cm離れたところまで焼けている。カマド本体から煙道にかけては緩やかに立ち上がっている。

[周溝] 周溝は、壁面に沿って各面で検出されているが、西壁部ではカマド部分は掘り残されている。周溝の規模は幅18~33cm、深さ12cm前後である。堆積土はブロック状の人为的な埋め土である。

[掘り方] 本住居跡は、一度全体的に緩やかな凹凸が残る状態に掘った後、凹部を主として全体的に埋め戻しを行って平らな床面を形成し、さらに貼り床を施している。床面から掘り方底面までの深さは、深いところで15~20cmあり、全体としては西部が深く東部が浅い。掘り方の埋め土は、基本層II層に由来する明黄褐色のシルト質粘土である。

【遺物出土状況と出土遺物】カマド周辺の床面から土師器と石製品がまばらに、住居跡中央付近から土師器と須恵器・土製品がまとめて出土している。また、東壁際の周溝から土師器の小型の塊が、正立の状態で出土している。遺物の種類としては、土師器・須恵器・砥石・石材・鉄製品・土製品がある。土師器は壺・壇・高壺・甕などの器種が出土している。いずれもロクロは使用されていない。壺は丸底で、底部体部の境の外面に段が形成され、内面は外面の段の位置に角が形成されるもの（C-2・3・4・5）と、底部から口縁部まで緩やかに立ち上がるるもの（C-59）がある。須恵器は丸底の壺で、体部は直立する。砥石は所謂分鏡形のもので片方の端部には円孔がある。石材としたものは、砂岩を長方形の柱状に加工したもので、表面には手斧状工具による加工の痕跡が残っている。鉄製品には鐵・鎌・不明品がある。土製品は、羽口が出土している。

SI-2 穫穴住居跡 【位置・遺存状況・重複】 SI-2 穫穴住居跡の南側で検出され、南半部は調査区の外にのびる。東壁と北壁に新旧2時期のカマドがある。耕作による削平が床面のはば全域に及び、特に南西部における搅乱が著しく、掘り方の埋め土も失われているが、遺存する周溝によって全体の輪郭が推定できる。煙道部及びカマドがSI-2・4 穫穴住居跡を切っている。

【平面形・規模・方向】 平面形は、四隅がやや狭まる隅丸方形を呈するものと推定される。規模は、東西4.4m・検出部南北長3.2mを測る。方向は北カマドでN-18°-E、東カマドでN-75°-Wである。

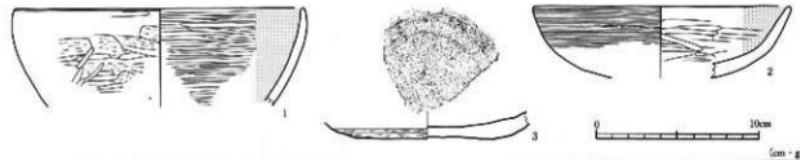
【堆積土】 残存部の堆積土は、カマド内の凹部を除くと、住居跡の中央部に残るだけである。にぶい黄褐色の粘土質シルト1層からなり、残存する堆積土の層厚は、厚いところで4cm程度である。

【床面・壁面】 床面は、耕作の削平による凹凸のため、本来の状況は不明である。搅乱を除去した面では、住居に伴うと考えられる多数の土坑・ビットが重複して検出された。土坑のうち、SK-2・4・7土坑には焼土・炭化物を多く混入する土壤が堆積している。壁面は、カマド部分がやや内側に湾入するように掘られているが、他の辺はほぼ直線的である。壁は残存していないので、壁面の立ち上がりは不明である。各壁面は周溝で観察すると中央が外側にわずかに膨らんでいる。

【柱穴】 P.1・5が柱穴に関するビットと考えられる。また、SK-2 土坑として調査した遺構も、カマドの位置を変更した段階での柱穴の可能性がある。

【カマド】 カマドは北壁と西壁の2箇所で検出されているが、両方とも袖等のカマド本体の構築土は残存していない。燃焼部の焼け面の残存状態から、焼け面の残っていない北壁側のカマドが古く、焼け面の残存する東壁側のカマドが新しいと解釈される。両カマドともカマド本体の奥部が住居跡壁面の外側に張り出している。

北側のカマドは、北壁中央より東側に寄っており、北壁を三等分した場合、東寄りの1/3の所にカマド中軸が位置する。カマド本体中央付近は、住居跡床面よりやや窪んでいる。SI-2 穫穴住居跡を切って煙道先端の落ち込みが検出され、北壁面から煙道の先端までは1.4mを測る。



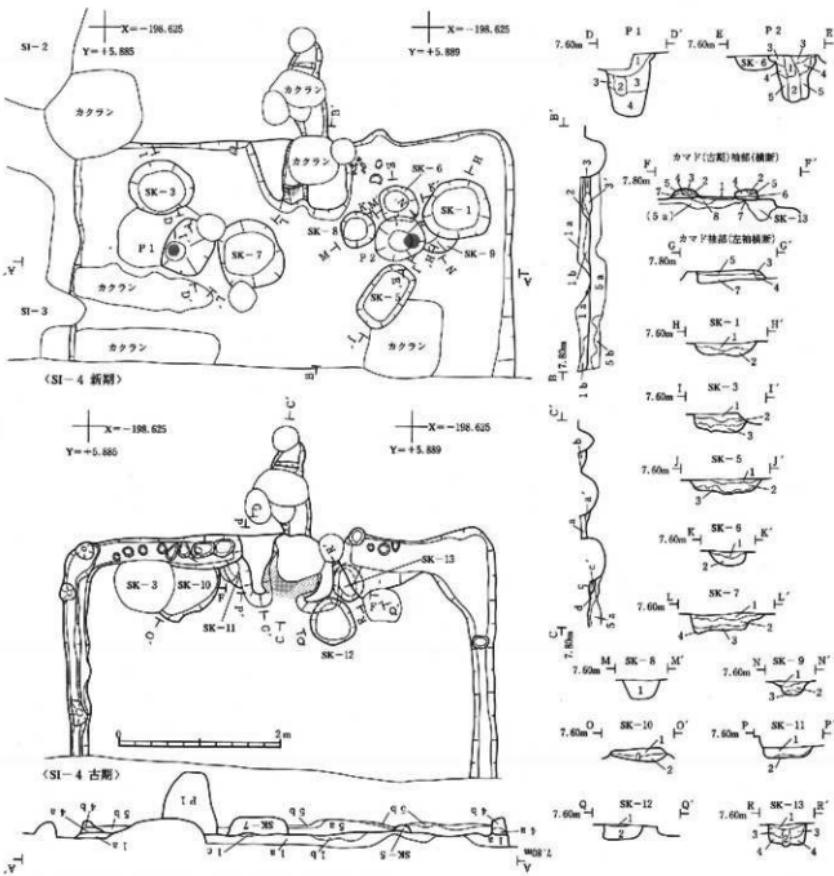
第23図 SI-3 穫穴住居跡出土遺物

番号	区分番号	絞	羽	器種	追跡番号	出土位置	地上高	口径	底径	外 面	内 面	写真番号
1	C-11	土師器	壺	SI-3	SK-5	(6.1)	18.0			ハラケズリのちヘラミガキ	ヘラミガキ	14-2
2	C-16	土師器	壺	SI-3	SK-4	(4.4)	15.9			ヨコナヂ	ヘラミガキ	12-6
3	E-16	須恵器	壺	SI-3	1号	(1.7)	11.7			ハラケズリ	ロクロ	16-15

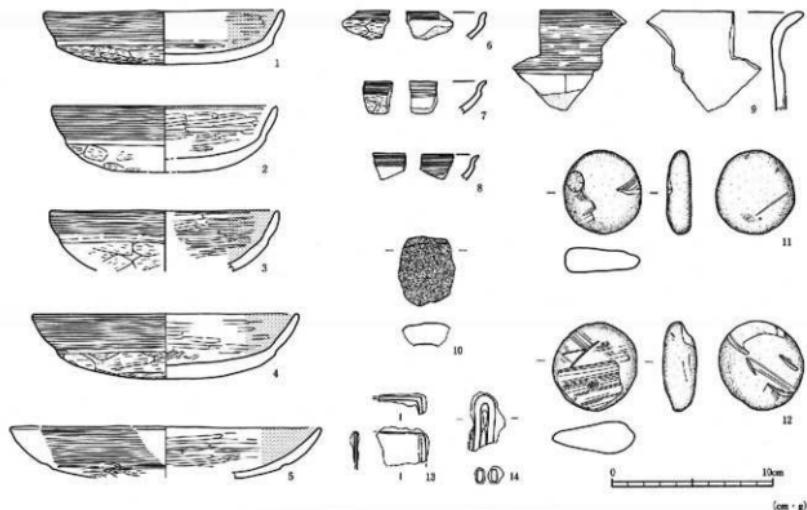
東側のカマドは、本住居跡がほぼ正方形のプランとした場合、東壁中央より北側に寄って位置している。カマドの本体にあたる部分は長軸（奥行き）118cm・短軸（幅）62cmの梢円形に窪んでおり、カマド全体の1/2～1/3が住居跡の外側に張り出している。カマド底面は、東壁のライン上を中心にして焼けている。

【周溝】周溝は、検出された各面に存在しているが、北壁面ではカマド部分は掘り残されていた可能性がある。周溝の規模は幅18～38cm、検出面からの深さは5cm前後である。堆積土はブロック状の人为的な埋め土である。

【掘り方】掘り方の埋め戻し土層の厚さは、床面の残存部で7cm前後で、掘り方の底面には緩やかな凹凸がある。掘り方の埋め土は、基本層II層に由来する明黄褐色のシルト質粘土層である。



第24図 SI-4 穴竪住居跡



番号	登録番号	種別	器種	造形番号	出土位置	出土層	傾斜	口径	底径	外観	内観	重さ	(cm・g)
1	C-12	土師器	碗	SI-4	床面	No.1	3.3	14.8	13.4	ヨコナデ・ハラケズリ	ハラミガキ		12-7
2	C-13	土師器	碗	SI-4	床面	No.3	4.1	14.0	12.4	ヨコナデ・ハラケズリ	ハラミガキ・南北内側		12-8
3	C-16	土師器	碗	SI-4	SK-1・北・2層	(3.7)	14.0	13.4	ヨコナデ・ハラケズリ	ハラミガキ		12-11	
4	C-14	土師器	碗	SI-4	1層		4.0	16.6	13.4	ヨコナデ・ハラケズリ	ハラミガキ		
5	C-15	土師器	碗	SI-4	SK-3・1層	(3.1)	19.2	14.0	ヨコナデ・ハラケズリ	ハラミガキ		12-10	
6	C-17	土師器	碗	SI-4	1層		(1.7)			ヨコナデ・ハラケズリ	ヨコナデ・開底系		13-1
7	C-18	土師器	碗	SI-4	1層		(2.0)			ヨコナデ・ハラケズリ	ヨコナデ・開底系		13-2
8	C-19	土師器	碗	SI-4	1層		(1.6)			ヨコナデ	ヨコナデ・開底系		13-3
9	C-20	土師器	碗	SI-4	床面	(6.1)				ヨコナデ・ハラケズリ			

番号	登録番号	種別	器種	造形番号	出土位置	出土層	傾斜	厚さ	重量	特徴	等高線
10	P-4	土製品	窓口	SI-4	1層	(4.3)	(3.5)	1.4		先端部破片	13-6
11	K-4	石製品	不明	SI-4	SK-7	5.3	4.9	1.6	29	金属鋸による削痕・削り痕	13-7
12	K-3	石製品	不明	SI-4	SK-7	5.5	5.2	2.0	35.5	金属鋸による削痕・削り痕	
13	E-4	陶製品	不明	SI-4	1層	(1.9)	(3.3)	(0.6)	9.0	縁?	20-10
14	E-5	陶製品	不明	SI-4	SK-6・2層	(3.6)	(2.2)	(1.0)	11.6		20-12

第25図 SI-4 穫穴住居跡出土遺物

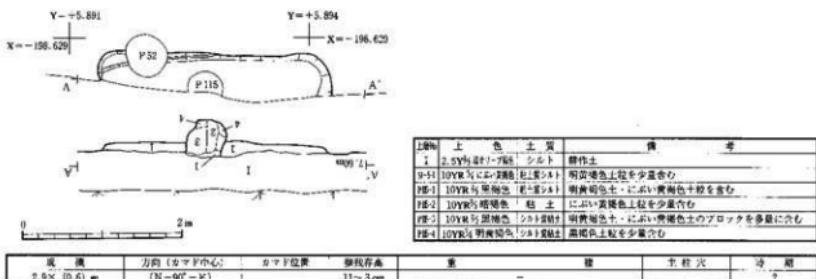
古期のカマドは床面上にカマド本体を構築している。カマド袖の基部は、左右対称でなく、右袖の焚き口側の端部が左袖に比べて大きく内側に折れ曲がり、袖の先端はカマドの中軸近くに位置している。これは、焚き口がカマド中央より左に寄って作られていたことを示すと考えられる。袖の変化と対応し、カマド内部も底面の強く焼けた部分が左側に寄っている。古期のカマドの袖の下からは土坑が検出され、SK-13土坑のように多量の焼土混じりの土壤が検出されていることから、古期としたカマド以前にも別のカマドが存在した可能性がある。

【周溝】周溝は、検出された各壁面下に存在しているが、北壁面のカマド部分は掘り残されている。周溝の幅は、平均的な部分でも22~45cmと開きがあり、北東角付近はさらに幅が広い。深さは15~20cm程度で、断面形は逆台形を基本としているが、西壁部は周溝内側壁面の途中にテラス状の平坦部が形成されている。北壁の底面には、掘削の際の工具による痕跡と想定される小さな凹凸がある。

【掘り方】掘り方の埋め戻し土層の厚さは、10~20cm程度で、掘り方の底面には緩やかな凹凸がある。掘り方の埋め土は、基本層II層に由来する明黄褐色のシルト質粘土層である。

【遺物出土状況と出土遺物】カマド脇の床面から土師器壺が3個体出土したほか、住居跡堆積土及び床面検出遺構

中からも、土師器を主とする多数の遺物が出土している。固化した遺物には、土師器・石製品・鉄製品・土製品がある。土師器はいずれもロクロを使用していないもので、壺と甕がある。壺は、口径の割に器高の低い丸底のものである。底部と口縁部の境は、外面にはいずれも段が形成され、内面には角が形成されるものと、丸く緩やかに済曲するものがある。また、「関東系土師器」と呼ばれている、内外面とも橙色を呈し、口縁部がS字状に屈曲する薄手で小型の片片（C-17・18・19）も出土している。甕は小片が多いが、その中に頸部と口縁部の境の外面に軽い段が形成され、口縁が強く外反するものがある。石製品は、直徑が5cm程の扁平な自然石で、表面に金属器によると観察される擦痕や削った跡が観察されるものが2個出土している。鉄製品は、鉄の棒を輪状に折り曲げたものと、片方の端部が折れ曲がっている板状の製品がある。土製品は羽口の破片が出土している。



第26図 SI-5 壁穴構造

SI-5 壁穴構造 [位置・遺存状況・重複] 調査区中央部、SI-4 壁穴住居跡の東側で、遺構の北端部が検出された。南半部は調査区の外にのびる。P.52・115切られているが、壁穴住居跡との重複はない。

[平面形・規模・方向] 平面形は、方形を呈するものと推定される。規模は、東西2.9m・検出部南北長0.6mを測る。一辺の長さが3mにも満たないことなどから、壁穴住居跡とは別の遺構の可能性が高い。北辺の方向はN-90°-Eである。

[堆積土] 堆積土は、にぶい黄褐色の粘土質シルト層1層である。

[床面・廻面] 床面は、ほぼ平坦である。壁面は直線的で、立ち上がりは比較的急であるが、北壁の西半分には、途中にテラス状の段がある。

[柱穴・カマド・周溝] いずれも検出されていない。

[掘り方] 掘り方及びその埋め戻し土層はない。

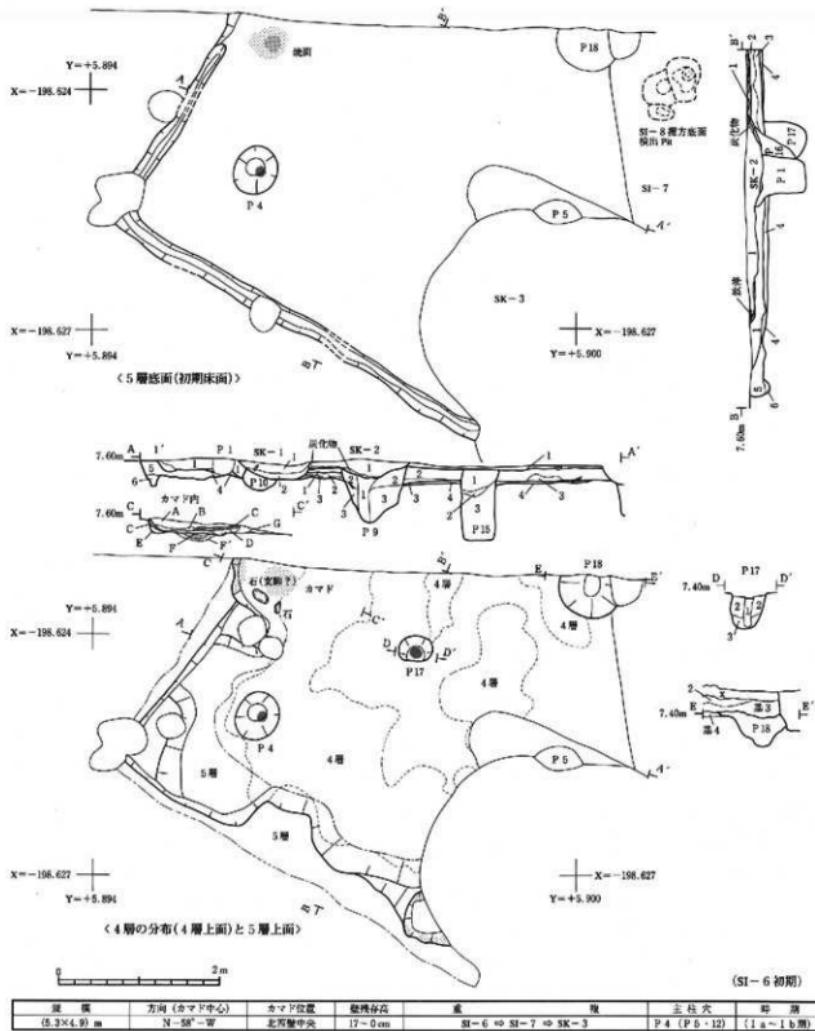
[遺物出土状況と出土遺物] 堆積土中から土師器細片が6点出土しただけで、固化した遺物はない。

SI-6 壁穴住居跡 [位置・遺存状況・重複] 調査区中央部の北側で検出された。SK-3土坑・SI-7・8壁穴住居跡に東辺を切られ、北辺部は調査区外にのびている。後述のように5時期程度の床面の改変がある。改変毎に床面のレベルが高くなり、最終床面の一部は耕作による削平を受けている。平面形は、初期プランでは方形を呈していたと考えられるが、その後3時期の改変があり、改変毎にプランの変形と規模の縮小が行われている。以下、各段階毎の概要を古い順に記述する。

<5層底面-初期床面一段階> (第27図上)

[平面形・規模・方向] 平面形は、方形を呈するものと推定される。規模は、東西検出部長5.6m・南北検出部長5.2mを測る。方向はN-58°-Eである。

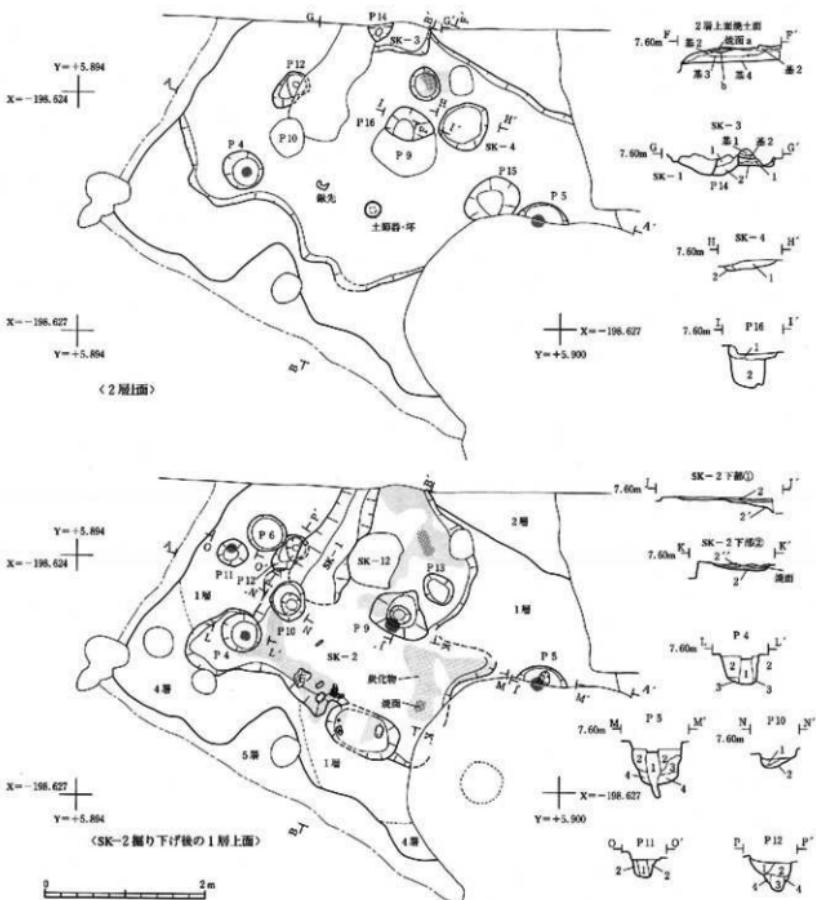
【床面・壁面】床面は比較的平坦である。床面は、西北壁中央付近で検出された焼け面と、柱穴と考えられるP.4及び周溝があるだけで、遺構は少ない。焼け面は位置関係からカマドに伴う焼土と考えられる。



第27図 SI-6 穫穴住居(1)

【柱穴】P.4が住居跡の対角線上に位置することから、南西角の主柱穴と考えられる。P.4を、カマドを反映する焼土面を通る住居跡東西軸線で折り返した位置に北西角の主柱穴が存在すると推定され、その間隔は約3.4mと復元される。P.4を3.4m南東の方向に展開した南東角の主柱穴は、SK-3土坑の中央付近となる（第28図下）。この柱配置で、北東角の主柱穴の位置を推定すると、SI-8竪穴住居跡の掘り方底面で検出されたピット状の落ち込みの位置にあたり、前記の推定復元と符合する（第27図上）。

【カマド】カマドは残存していないが、焼け面の存在と、その部分で他の竪穴住居跡と同様に周溝が途切れるところから、西北壁中央に位置していたと考えられる。焼け面の中心は、壁面から約65cm離れている。



第28図 SI-6 竪穴住居跡(2)

(SI-6)

ピットNo.	P-4	P-5	P-6	P-9	P-10	P-11
地盤形状	円 形	円 形?	円 形	不規則円形	椭 圆 形	椭 圆 形
断面形状	50×48cm	58×(32)cm	47×44cm	76×61cm	47×44cm	35×34cm
深 度	49cm	56cm	33cm	71cm	28cm	31cm
柱穴形状	円 形	円 形	円 形	円 形	円 形	円 形
柱穴幅	15×13cm	17×(8)cm	—cm	18×16cm	—cm	12×13cm

ピットNo.	P-12	P-13	P-14	P-15	P-16	P-17	P-18
地盤形状	不要地円形	不要地円形?	椭 圆 形?	不规则形	椭 圆 形?	円 形?	円 形
断面形状	54×(32)cm	43×36cm	28(20)cm	71×(53)cm	69×(41)cm	42×(32)cm	77×(55)cm
深 度	—	7cm	23cm	37cm	42cm	32cm	30cm
柱穴形状	—	—	—	—	—	円 形	—
柱穴幅	—cm	—cm	—cm	—cm	—cm	17×14cm	—cm

柱穴No.	土 色	土 質	備 考	柱穴No.	土 色	土 質	備 考
P-11	2.5%明黄褐色	粘 土	炭化物・鐵・少量鉄錆を多量に含む	P-15	2.5%明黄褐色	粘 土	炭化物・塵土粒を多量に含む
P-12	2.3%灰褐色	粘 土	明黄褐色土中ワブロックを多く含む	P-16	10%灰褐色	粘 土	炭化物・塵土を多量に含む
P-13	5.0%灰褐色	粘 土	明黄褐色土中ワブロックを多く含む	P-17	10%灰褐色	粘 土	炭化物・塵土を多量に含む
P-14	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土中ワブロックを多く含む	P-18	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土中ワブロックを多く含む
P-15	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土中ワブロックを多く含む	P-19	2.5%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上・灰褐色上・炭化物を多く含む
P-16	2.5%灰褐色	粘 土	明黄褐色土中ワブロックを多く含む	P-20	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土・灰褐色土・炭化物を少量含む
P-17	2.5%灰褐色	粘 土	明黄褐色土中ワブロックを多く含む	P-21	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土・灰褐色土・炭化物を少量含む
P-18	2.5%灰褐色	粘 土	明黄褐色土中ワブロックを多く含む	P-22	2.5%灰褐色	粘 土	明黄褐色土の小ワブロックを多く含む
P-19	2.5%灰褐色	粘 土	明黄褐色土中ワブロックを多く含む	P-23	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土の小ワブロックを多く含む
P-20	2.5%灰褐色	粘 土	明黄褐色土中ワブロックを多く含む	P-24	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上・灰褐色土上を多く含む
P-21	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-25	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-22	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-26	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-23	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-27	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-24	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-28	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-25	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-29	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-26	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-30	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-27	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-31	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-28	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-32	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-29	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-33	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-30	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-34	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-31	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-35	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-32	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-36	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-33	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-37	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-34	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-38	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-35	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-39	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-36	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-40	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-37	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-41	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-38	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-42	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-39	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-43	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-40	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-44	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-41	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-45	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-42	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-46	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-43	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-47	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-44	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-48	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-45	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-49	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-46	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-50	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-47	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-51	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-48	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-52	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-49	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-53	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-50	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-54	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-51	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-55	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-52	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-56	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-53	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-57	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-54	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-58	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-55	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-59	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-56	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-60	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-57	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-61	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-58	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-62	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-59	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-63	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-60	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-64	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-61	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-65	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-62	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-66	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-63	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-67	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-64	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-68	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-65	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-69	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-66	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-70	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-67	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-71	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-68	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-72	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-69	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-73	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-70	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-74	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-71	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-75	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-72	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-76	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-73	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-77	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-74	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-78	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-75	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-79	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-76	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-80	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-77	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-81	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-78	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-82	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-79	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-83	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-80	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-84	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-81	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-85	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-82	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-86	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-83	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-87	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-84	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-88	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-85	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-89	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-86	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-90	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-87	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-91	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-88	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-92	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-89	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-93	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-90	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-94	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-91	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-95	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-92	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-96	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-93	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-97	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-94	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-98	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-95	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-99	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む
P-96	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む	P-100	10%灰褐色	粘 土	明黄褐色土上を多く含む

(周溝) 周溝は、各壁面直下の床面で検出されたが、カマドが存在したと推定される部分は掘り残されている。周溝の幅は15~20cmである。

(掘り方) 掘り方及びその埋め戻し上層はない。

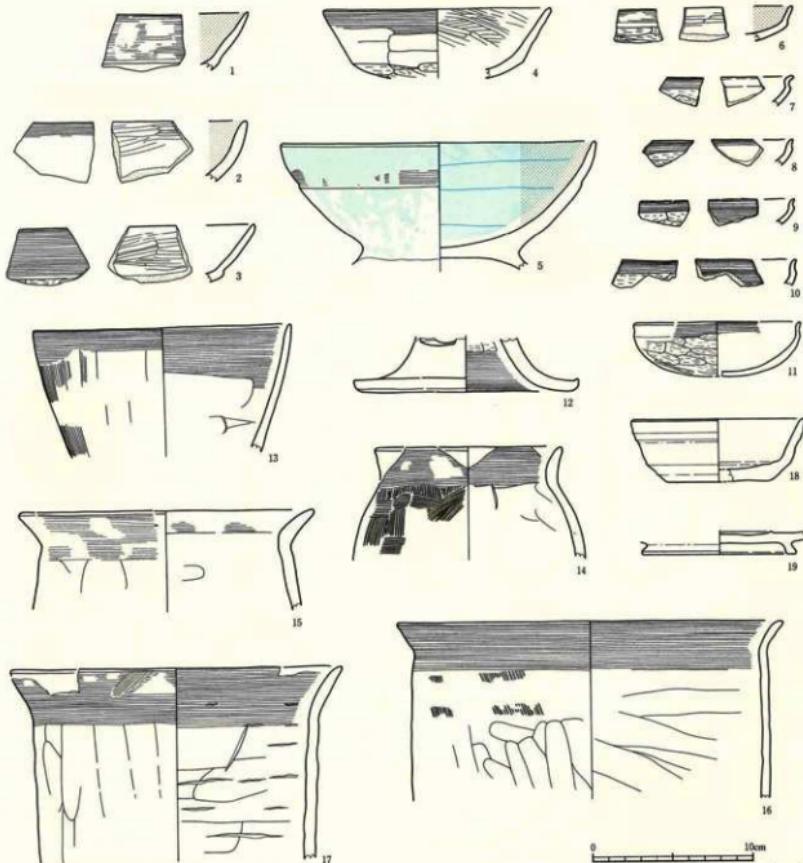
<5層上面と4層上面段階> (第27図下)

[平面形・規模・方向] 1回目の変化は、基本層Ⅱ層に類似する明黄褐色土(5層)を、住居跡の横面に沿って貼り付けるように敷設して窓穴の規模を縮小している。平面形は、基本的に前段階と同様に方形を呈するが、東西壁面には凸凹が見られ、壁面の傾斜は緩やかになっている。さらに、住居跡中央部近傍には3~5cmの厚さで貼り床(4層)を施している。規模は、東西検出部長5.4m・南北検出部長5.2mとなり、方向はN=58°-Eである。5層の壁際への貼り付けと4層の貼り床との間には、5層上面に際立った汚れが確認されないことから、作業工程に伴う時間差は存在するとしても、長期の時間差は無かったものと解釈される。

[床面・壁面] 床面は比較的平坦であるが、壁際の床面は緩やかに傾斜しながら高くなっている。壁面の傾斜は、前段階と比較するとかなり緩やかになっている。

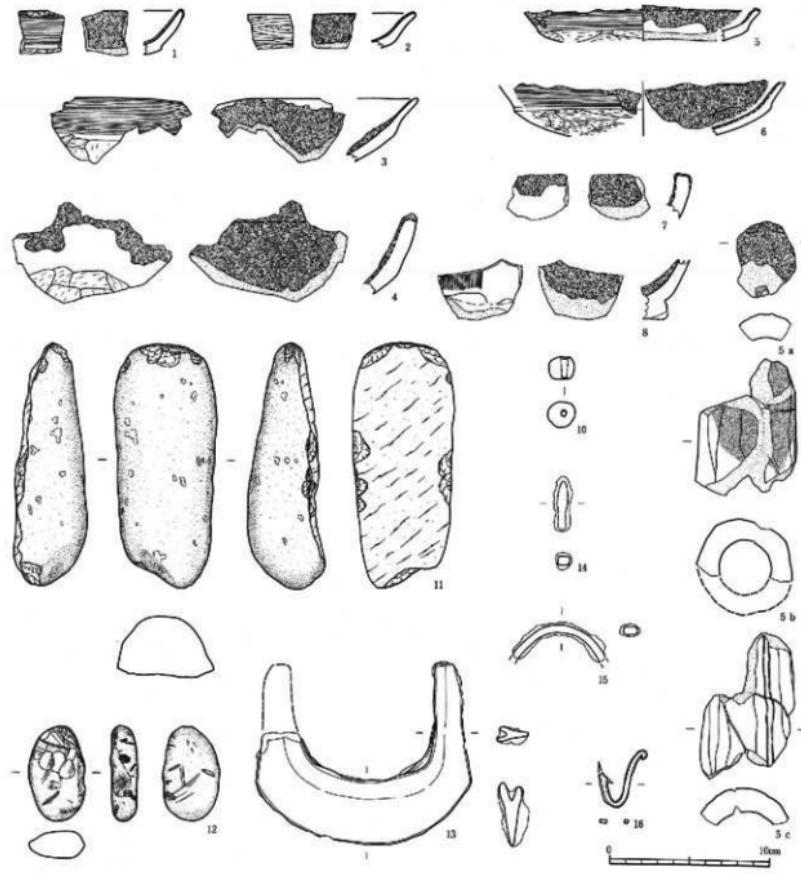
[柱穴] P. 4が主柱穴として存続する。新に柱痕跡を有するP. 17・18が検出されているが、役割は不明である。

[カマド] カマドは、前段階と同位置に築かれ、左袖の基部が残存する。前段階の焼土面は明黄褐色土(4層)によって覆われている。焼け面の受熱状況は前段階よりも弱い。カマドの支脚として使用された可能性のある柱状の石材が横転した状態で出土している。



番号	登録番号	種	形	性	遺構番号	出土位置	測定番号	周長	口径	底径	外 面	内 面	参考
1	C-28	土器部	环	SI-6	P 5 番	竪方	(3.5)				ヨコナデ		12-13
2	C-25	土器部	环	SI-6	P 6		(3.7)				ヨコナデ・ナデ		13-7
3	C-29	土器部	环	SI-6		2層	(3.6)				ヨコナデ・ヘラケズリ		12-14
4	C-27	土器部	环	SI-6		2層	(4.3)	14.0			ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ		12-19
5	C-31	土器部	台付环	SI-6		2層	(8.0)	19.5			ヨコナデ・脚附着		14-3
6	C-26	土器部	环	SI-6		1層	(2.2)				ヨコナデ・ヘラケズリ		12-15
7	C-42	土器部	环	SI-6	P 12		(1.8)				ヨコナデ・ヘラケズリ		13-5
8	C-44	土器部	环	SI-6			(1.6)				ヨコナデ・ヘラケズリ		13-7
9	C-45	土器部	环	SI-6		1層	(1.6)				ヨコナデ・ヘラケズリ		13-8
10	C-43	土器部	环	SI-6		1層	(1.7)				ヨコナデ・ヘラケズリ		13-6
11	C-41	土器部	环	SI-6		2・3層	3.4	10.4			ヨコナデ・ヘラケズリ		13-4
12	C-24	土器部	高环脚	SI-6	SK-6	5K-2-2層	No.3	(3.4)	14.0		3方透し ヘラケズリ・ヨコナデ		12-12
13	C-30	土器部	脚	SI-6		5層	(7.9)	16.0			ヨコナデ・ハケメ		14-10
14	C-40	土器部	脚	SI-6	P 1-1層		(7.0)	(11.6)			ヨコナデ・ハケメ		ヨコナデ・ハナナデ
15	C-22	土器部	脚	SI-6		1層	(6.3)	(18.3)			ヨコナデ・ナデ		ヨコナデ・ナデ
16	C-21	土器部	脚	SI-6		1層	(11.0)	24.0			ヨコナデ・ハケメ・ナデ		14-9
17	C-23	土器部	脚	SI-6		1層	(12.0)	(20.6)			ヨコナデ・ナデ		ヨコナデ・ナデ
18	E-2	須恵器	环	SI-6		5層	(3.9)	(10.6)	(6.6)	ロクロ・底部ナデ		ロクロ	17-2
19	E-3	須恵器	高台环	SI-6		5層	(1.4)		9.5		ロクロ		ロクロ

第29図 SI-6 竪穴住居跡出土遺物(1)



(cm : 1)

番号	世跡番号	種 別	部 像	遺構番号	出土位置	出土年月	断面形	厚さ	口径	版長	外観	内観	写真図版
1	C-34	土師器	片(とく)	SI-6		(2.8)	ヨコナデ・ヘラケズリ				溶滲物付着		
2	C-37	土師器	片(とく)	SI-6	P 4面の方	(2.2)				ハラミガニ			
3	C-32	土師器	片(とく)	SI-6	1層	(4.0)				ヨコナデ・ヘラケズリ			
4	C-33	土師器	片(とく)	SI-6	2層	(5.1)				ナデ・ヘラケズリ			
5	C-36	土師器	片(とく)	SI-6	SK-2-1W-2B	(2.3) (14.7)	ヨコナデ・ヘラケズリ			溶滲物付着・口縁再生			
6	C-35	土師器	片(とく)	SI-6	P 4面の方	(3.4) (17.8)	ヨコナデ・ヘラケズリ			溶滲物付着・口縁再生			
7	C-39	土師器	片(とく)	SI-6	1層	(2.8)				溶滲物付着			
8	C-38	土師器	片(とく)	SI-6	2層	(3.7)	ハケメ・ナデ			溶滲物付着			

番号	世跡番号	種 別	部 像	遺構番号	出土位置	出土年月	全長	幅	厚さ	重量	特 徴	写真図版
9	P-5	土製品	瓦LI	SI-6	SK-2-2層	(9.2) (6.8)	1.6				外周ハラケズリ彫刻	18-8
10	P-7	土製品	土玉	SI-6	廻山西面	1.4	1.6	1.7	3.5	直径3mmの円孔		19-9
11	K-5	石製品	瑪瑙	SI-6	SK-3-1層	15.5	5.5	3.8	46.3			18-3
12	K-6	石製品	不明	SI-6	SK-2-1層	5.9	3.5	1.8	26.5	細密削り痕あり		18-8
13	N-20	鉄製品	U字形先	SI-6	2層上面	11.5	13.5	1.6	191.0			20-14
14	N-7	鉄製品	不明	SI-6	1層	(3.4) (1.1) (1.1)			7.0			20-22
15	N-8	鉄製品	不明	SI-6	1層	(2.4) (5.7) (0.6)	18.5			複数製品の破片		20-16
16	N-27	鉄製品	鉗子?	SI-6	1層	(2.6)	(3.0) (0.2)	3.0		もじと折れし		20-13

第30図 SI-6 穹穴住居跡出土遺物(2)

〔周溝〕この段階以降周溝は存在しない。

<2層上面段階>（第28図上）

〔平面形・規模・方向〕2回目の改変は、先のプランをさらに炭化物や焼土の混入する2・3層で埋め、竪穴の南北幅を狭く作り変えている。竪穴の上部が削平を受けているために、狭くなつて長方形を呈するプランが竪穴の全体の規模であるのか、南北の両壁際が一段高くなつて、前段階と同様の規模の方形プランを呈していたのか判断できない。狭くなつた部分の大きさは、東西検出部長5.4m・南北幅3.2mを測る。軸方向は基本的に前2段階と変わらない。

〔床面・壁面〕床面は緩やかな凹凸があるが、比較的平坦である。南西部は、次段階（1層）の改変による削平を受けている。この段階の床面では新に数基のピットが掘られている。また、北壁中央近くには、強く焼けた床面と、その横に炭と焼土を多量に含む土坑（SK-4土坑）が検出されている。壁面は緩やかに立ち上がる。なお、2層を敷設する際に竪穴の中央付近に土師器の高台壇（C-31）を正立の状態で埋め込んでいる。この土器の内外面には漆と観察される樹脂が付着し、内面にはヘラ状の工具で器壁に沿って撫でた痕跡が残っている。

〔柱穴〕P.4は主柱穴として存続すると考えられ、P.4と狭くなつたプランと対応するようにP.12・P.5が直角に位置して並ぶ。この東西が長く、南北に短い柱配置は、北壁を2層の立ち上がりに、南壁を4・5層の立ち上がりとした場合に、竪穴のほぼ中央に位置する。

〔カマド〕カマドは、この段階になると廃絶される。

<1層上面-SK-2-段階>（第28図下）

〔平面形・規模・方向〕この段階では、2層上面段階の凹地を1層によって埋めた後、新に不整形の土坑（SK-2土坑）を掘削し、その不整形の凹面を床面としている。SK-2土坑は、検出面は不整形のプランで、大きさは東西3.5m・検出部南北長約3.5mを測る。土坑に方向性は認められないが、建物自体は前段階の柱を踏襲していると考えられる。

〔床面・壁面〕SK-2土坑の床面は、中央部が窪んで皿状になっている。床面には、全面的に炭化物が分布して汚れている。炭化物は厚いところで2cm前後の層状に堆積している。また、土坑の北部と西部に、床面が強く焼けている部分が検出されている。壁面の立ち上がりは緩やかである。

〔柱穴〕P.4・P.12・P.5が柱穴として存続すると考えられる。

〔カマド〕カマドはない。

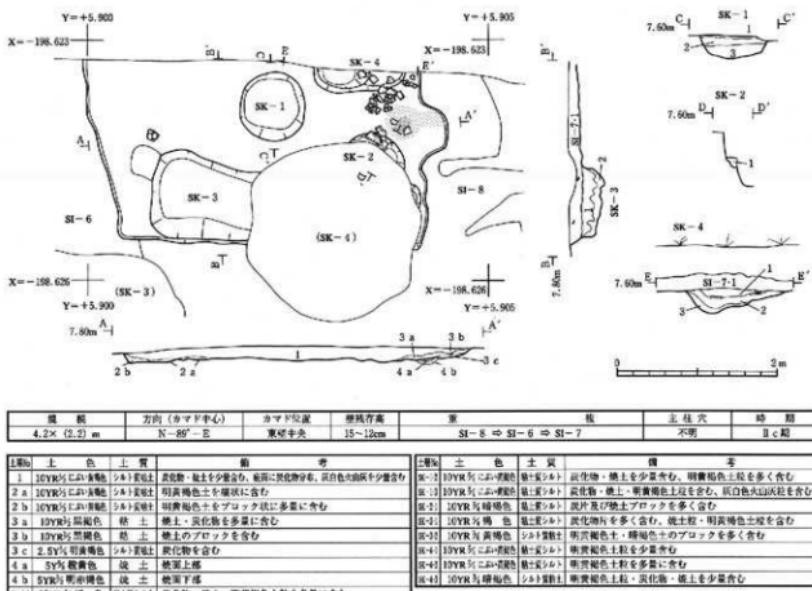
以上のようにSI-6竪穴住居跡は4段階の変遷をしている。

〔遺物出土状況と出土遺物〕SI-6竪穴住居跡からは多数の遺物が出土している。特に1・2層以降の床面及び堆積土中からの出土遺物が多い。遺物の種別としては、土師器・須恵器・石製品・鉄製品・土製品がある。出土土師器は、ロクロを使用しないもので、壺・台付壺・高壺・鉢・甕がある。壺には在地の丸底壺のほかに「関東系土師器」の壺片（C-41・42・43・44・45）も多数含まれている。また、トリベに転用されて溶解物が付着した土師器の破片も多数出土している。須恵器は、団化した壺片2点のほか、甕の破片も多数出土している。石製品としては、割れた自然石を叩き石として使用したものと、擦痕と削り痕跡のある小砾がある。鉄製品は、U字状鍬先・釣針などがある。土製品には、羽口の破片と土玉がある。また、2層より上層では鉄滓が多量に出土している。

SI-7竪穴住居跡 〔位置・遺存状況・重複〕調査区東部北側で検出され、北半部は調査区の外にのびる。SI-6・8竪穴住居跡を切り、南東部をSK-4土坑に切られている。

〔平面形・規模・方向〕平面形は、方形を基調とするものと考えられるが、検出部の西南角は鈍角となり、西壁中央部にかけて広がっている。規模は、東西4.2m・検出部南北長2.2mを測る。方向はN-89°-Eである。

〔堆積土〕堆積土は、にぶい黄褐色のシルト質粘土を主体とする。層中に所謂「灰白色火山灰」と観察される白色



第31図 SI-7 積穴住跡

の土壤が少量含まれている。

【床面・壁面】床面はほぼ平坦であるが、炭化物・焼土粒によって汚れている。床面上では大型の土坑が4基検出されている。壁面は、南壁は直線的であるが、西壁は多少の出入りがある。壁面の立ち上がりは急である。

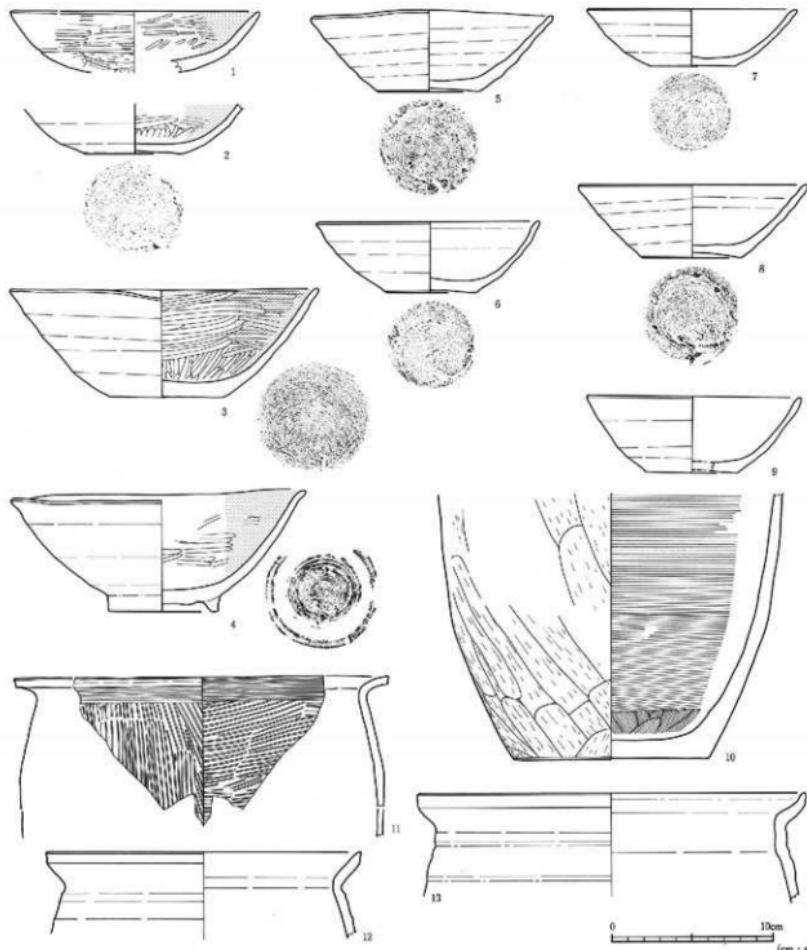
【柱穴】柱穴と考えられるピットは検出されなかった。

【カマド】カマドは東壁に位置している。この住居の平面プランが正方形であると推定した場合、東壁におけるカマドの位置は、南壁寄りの三等分線付近にある。カマドの奥部は壁面の外側へ30cm程U字状に張り出している。カマド底面に残る焼け面は、左の袖に寄った位置で検出されている。

【周溝】周溝は検出されていない。

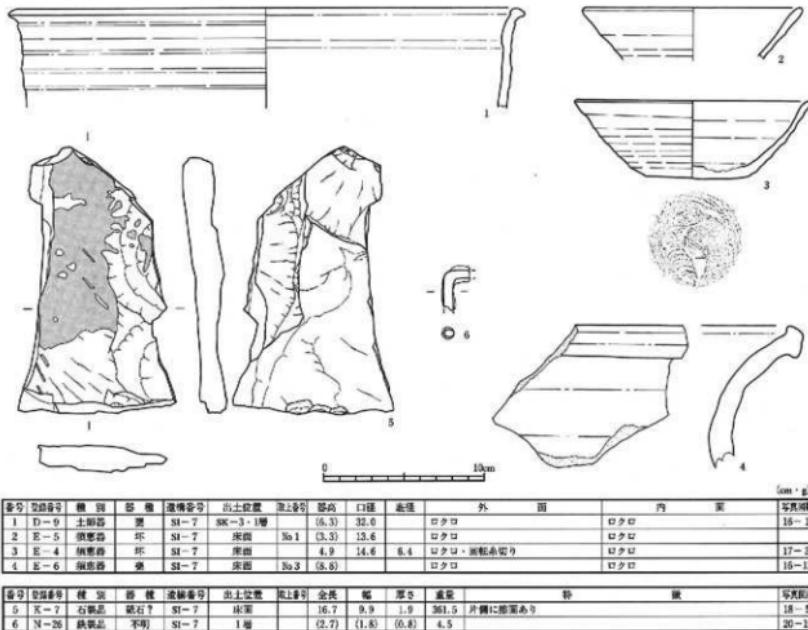
【掘り方】掘り方は検出されていない。

【遺物出土状況と出土遺物】カマド周辺の床面などから遺物がまとまって出土している。出土遺物には、土師器・須恵器・石製品・鉄製品がある。土師器はロクロを使用したものが主となっており、ロクロを使用していないものは混入品と考えられる。ロクロ使用の土師器には、壺と甕がある。壺はロクロ調整の後に内面へラミガキのうえ黒色処理されたものと、ロクロ調整だけで黒色処理されないものがある。ロクロ使用の土師器甕は、口縁部が受け口状のもの（D-6・7）と、端部が僅かに外反するだけのもの（D-9）がある。須恵器は、壺と甕が出土している。壺は回転糸切り無調整のもので、器高の割に底径が小さい。石製品は結晶質安山岩の板状剥片を素材とするもので、片面に広い範囲で磨耗が認められる。鉄製品は、L字状に折れた破片である。



番号	形	年	施	度	度	出土位置	出土年	器形	口径	底径	外 形	内 形	写真
1	C-38	上加西	年	SI-7	床	床面	(3.6)	15.4	6.0	ハフミガキ・ハラケズリ	ハラミガキ		
2	D-29	上加西	年	SI-7	床	床面・SK-2-1号	16.6	(3.1)	6.0	ロクロ・圓錐形切り	ハラミガキ		
3	D-21	土師器	年	SI-7	1層		6.8	16.1	7.0	ロクロ・圓錐形切り	ハラミガキ	15-6	
4	D-22	土師器	高台付耳	SI-7	1層		7.6	18.2	6.7	ロクロ・圓錐形切り	ハラミガキ	15-7	
5	D-1	手挽土器	年	SI-7	1層		5.1	14.9	6.3	ロクロ・圓錐形切り	ロクロ	15-1	
6	D-5	手挽土器	年	SI-7	[層 SK-2-1] 1層		4.5	13.7	5.7	ロクロ・圓錐形切り	ロクロ	15-5	
7	D-3	手挽土器	年	SI-7	[層 SK-2-1] 1層		3.6	13.0	5.2	ロクロ・圓錐形切り	ロクロ	15-3	
8	D-2	手挽土器	年	SI-7	1層		4.6	14.2	6.1	ロクロ・圓錐形切り	ロクロ	15-2	
9	D-4	手挽土器	年	SI-7	[層 SK-2-1] 1層		4.8	13.2	5.8	ロクロ・圓錐形切り	ロクロ	15-4	
10	ワ-8	土師器	素	SI-7	床面	16.2	(19.6)	12.0	ヘラケズリ	ロクロ・ハラナデ・ナゲ			
11	C-49	土師器	素	SI-7	SK-3-1等	16.2	(19.1)	(23.2)	青コナデ・ハラケズリ	ロコナデ・ハラナデ			
12	ロ-5	土師器	素	SI-7	1層	(5.4)	(19.4)	ロクロ	ロクロ				
13	ロ-7	土師器	素	SI-7	1層	(6.9)	(24.0)	ロクロ	ロクロ				

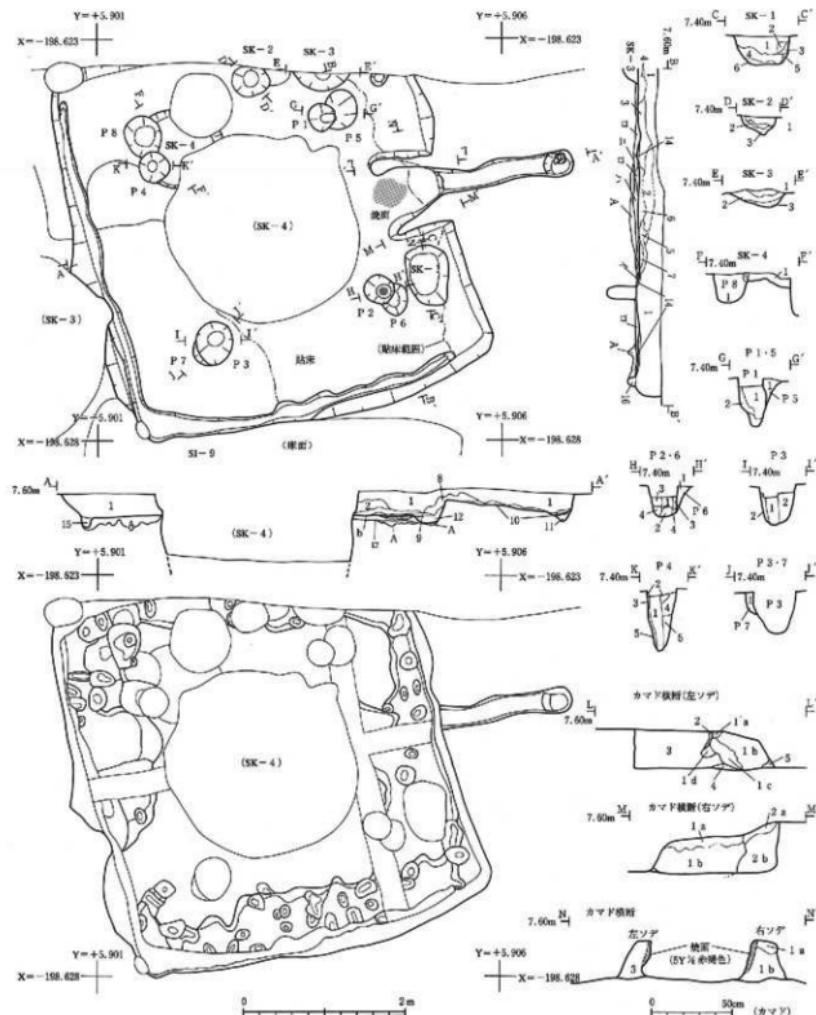
第32図 SI-7 壁穴住居跡出土遺物(1)



第334図 SI-7 壁穴住居出土遺物(2)

(SI-8)

番号	地質番号	種	形	備	遺跡名	出土位置	測定番号	断面	口径	底径	外	内	写真番号
1	D-9	土塊	柱	薄	SI-7	SK-3-1号	(6.3)	32.0	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	16-1
2	E-5	須恵器	环	SI-7	床面	No.1	(3.3)	13.6	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	16-2
3	E-4	須恵器	环	SI-7	床面		4.9	14.6	6.6	ロクロ・圓盤底切り	ロクロ	ロクロ	17-3
4	E-6	須恵器	瓶	SI-7	床面	No.3	(5.6)	10.0	6.8	ロクロ	ロクロ	ロクロ	16-12
番号	地質番号	種	形	備	遺跡名	出土位置	測定番号	全長	幅	厚さ	重さ	特	写真番号
5	K-7	石製品	砾石?	SI-7	床面			16.7	9.9	1.9	361.5	片側に擦痕あり	18-5
6	N-26	鉄製品	不明	SI-7	1号			(2.7)	(1.8)	4.5			20-19

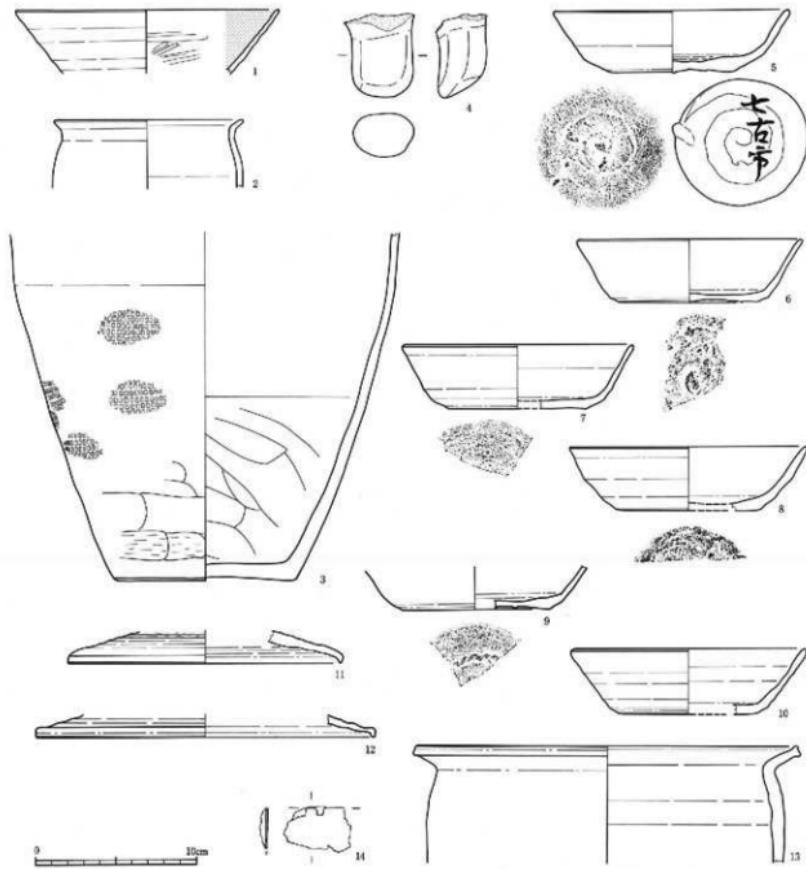


規 模	方 向(カマド中心)	カマド横衝	壁残存高	重	施	主柱穴	時 期
4.7×(4.7) m	N-79°-E	東壁	30~35cm	SI-9 ⇔ SI-8 ⇔ SI-7	P1-2-3-4-5-6-7-8	II-a期	

(SI-8)

ピットNo	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8
細長形状	円 形	椭 圆 形	椭 圆 形	円 形	椭 圆 形	椭 圆 形	円 形?	椭 圆 形
粗方形状	36×33cm	35×35cm	54×44cm	39×36cm	50×41cm	40×(33) cm	(36×8) cm	(50)×44cm
深 度	60cm	35cm	55cm	75cm	(36) cm	(33) cm	(28) cm	36cm
柱状形状	-	円 形	-	-	-	-	-	-
柱状範囲	-×-cm	13×11cm	14×-cm	12×-cm	-×-cm	-×-cm	-×-cm	-×-cm

第34図 SI-8 穫穴居跡



番号	空器番号	種	固	器	種	遺物番号	出土位置	出土季	断面	口径	底径	成形	外 面	内 面	馬鹿目
1	D-24	土器器	灰	SI-8	1	器	(3.9)	16.2	ロクロ				ヘラミガキ		
2	D-11	土器器	灰	SI-8	モマド・SK-1		(4.3)	11.6	ロクロ				ロクロ	16-2	
3	D-10	土器器	灰	SI-8	1	器	(21.6)		11.0			筋子彫りのらわロクロ	ロクロ・ナデ	16-3	
4	D-12	土器器	灰?	SI-8	1	器	(5.2)	3.8	2.7				筋子彫り	16-5	
5	E-12	陶器器	灰	SI-8	1	器	3.9	14.6	7.5			網絞ヘラ切り・墨書き「七吉年」	ロクロ	17-4	
6	E-8	陶器器	灰	SI-8	1	器	4.0	14.0	8.0			網絞ヘラ切り	ロクロ		
7	E-11	陶器器	灰	SI-8	1	器	4.1	(14.3)	8.5			網絞ヘラ切り?のちナデ	ロクロ		
8	E-10	陶器器	灰	SI-8	1	器	4.0	14.6	9.1			網絞彫り不明	ロクロ	17-6	
9	E-18	陶器器	灰	SI-8	1	器	(2.8)		9.1			網絞ヘラ切り	ロクロ	16-14	
10	E-9	陶器器	灰	SI-8	1	器	4.1	14.6	8.8			網絞切り掌し不同的もナデ	ロクロ	17-5	
11	E-13	陶器器	灰	SI-8-9	1	器	(2.6)	16.5				天井器持瓶ヘラケズリ	ロクロ	16-9	
12	E-14	陶器器	灰	SI-8	1	器	(1.4)	20.8				ロクロ	ロクロ	16-10	
13	E-7	陶器器	灰	SI-8	1	器	(7.3)	23.4				ロクロ	ロクロ	16-15	

第354図 SI-8 穴式住居跡出土遺物

SI-8 穫穴住居跡 【位置・遺存状況・重複】調査区東部で検出され、北半部は調査区の外にのびる。SI-7 穫穴住居跡に北西部の堆積土上部を、また SI-11 穫穴住居跡に南西部の堆積土上部を削平され、SK-3・4・十坑に西壁と住居跡中央を切られている。多くの遺構に切られてはいるが、住居跡本体の掘り方が深いために、住居跡中央部を除くと保存状態は良好である。

【平面形・規模・方向】平面形は方形を呈する。規模は、東西4.7m・南北約4.7mを測る。方向はN-79°-Eである。

【堆積上】堆積上は厚いところで30~40cmあり、1層の褐色シルトを主体とするが、カマド周辺は複雑な堆積状況を呈する。

【床面・壁面】床面はほぼ平坦である。東壁面から30~50cm離れたところから、住居跡の東側2/3の床面は、約2.5mの幅で、黄褐色のシルト質粘土により貼り床が施されている。壁面は、各面とも直線的で、壁面の立ち上がりは急である。

【柱穴】対角線上の4隅に各2個のビットが検出されたことから、建替えが行われ、柱穴に2時期の変遷があると判断される。最初の柱穴は、P.5・6・7・8で組み、その後やや内側に寄ってP.1・2・3・4の組合せで建替えられている。前者の柱間間隔は2.4m前後、後者は2.3m前後である。柱列と壁面までの距離は、建替え後で東壁と西壁が1.0~1.1m・南壁と北壁が1.1~1.2mである。

【カマド】カマドは東壁中央に位置し、袖部と煙道部が比較的良好残っている。袖部は、両袖とも壁面から80cm程度のびており、カマドの先端で約90cmの幅がある。高さは、床面から20~30cmほど残っている。袖部の断面を観察すると、両袖とも、壁際と先端側で積み手に大きく2時期の違いがあり、先端側が新しい積み上によって築かれている。このことから、このカマドは、東壁に近い部分を残して造り替えが行われたと観察される。また左袖の新旧の積み土の境目に、左広がりの斜めに焼け面が残していることから、最初の袖は現状よりもやや北に寄っていたか、袖の開きが大きかったものと推察される。カマド本体と煙道部の境は、東壁のライン上で段がつき、煙道側が30cmほど高くなっている。煙道は、長さ160cm・幅20~25cmで、住居の外に向って低くなるように傾斜する。煙道の先端はビット状に一段低くなっている、底面からは完形の須恵器坏が伏せた状態で出土している。

【周溝】周溝は、南壁と西壁直下で検出されたが、東壁と調査範囲内の北壁下では確認されなかった。検出部の周溝は、幅10~30cm・深さ10cm前後である。

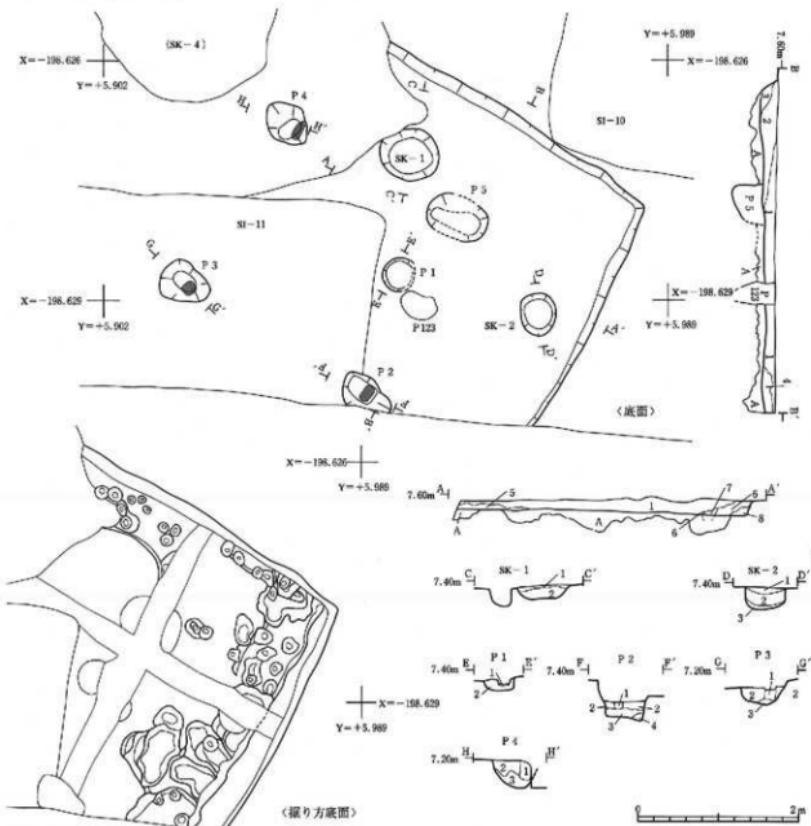
【掘り方】住居跡の一部を除き、床面のほぼ全面に渡る掘り方が検出された。掘り方は、壁際の幅40~90cmの範囲が特に溝状に深くなっていることから、この部分の掘り方底面には、掘削具の痕跡と観察される小さな凹凸が検出されている。

【遺物出土状況と出土遺物】SI-8 穫穴住居跡からは多量の遺物が出土しているが、そのほとんどは堆積上1層中から出土した土師器・須恵器の小破片である。土師器は、壺と甕の破片・把手片がある。須恵器は壺・蓋・甕などがある。須恵器坏の底部は、回転ヘラ切り無調整のものと、切り離し技法が不明でナデ調整されるものがある。煙道端部から出土した須恵器坏（E-12）の底部外面には「七古市」の墨書きがある。上器以外には、鎌の断片と考えられる鉄製品の破片が出土している。

SI-9 穫穴住居跡 【位置・遺存状況・重複】調査区東部北側で検出された。西側をSI-8・11 穫穴住居跡に掘り方に至るまで切られている。南辺は調査区の外にのびる。このため、調査ができたのは住居跡の北東部だけである。

【平面形・規模・方向】直角に折れて接する北壁と東壁の一部しか検出されていないので、全形は不明であるが、柱穴の配置から一辺が5.5~6.5mの方形を呈するものと推定される。方向はN-15°-Wである。

【堆積上】堆積上は、10~20cm残り、1層の暗褐色のシルト質粘土を主体とするが、壁際にはこれより明るい褐色

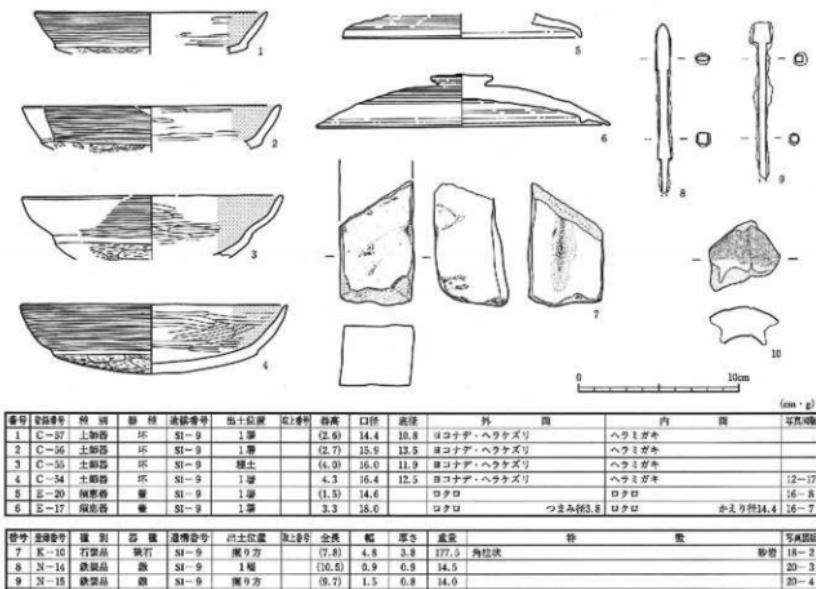


面積	方向(カマド中心)	カマド位置	壁残高	底	幅	朱塗穴	時期
(4.6×4.2)m	(N=SE-W)	(北西側?)	15~11cm	SI-9 40 SI-8 40 SI-11	P 2~3·4·5	Ia期?	

ピット名	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
南北形状	円 形 ?	不整円形	不整円形	不整円形	椭 圆 形
南北幅	46×(36) cm	79×(46) cm	62×53cm	64×90cm	77×50cm
南北	15cm	15cm	(29) cm	(24) cm	35cm
東西形状	-	東 方 形	方 形	東 方 形	-
東西幅	- × - cm	21×12cm	16×16cm	22×19cm	- × - cm

序号	土 色	土 質	性 質	備 考	序号	土 色	土 質	性 質
1.	IHYR 及褐色色	シルト質粘土質砂土・礫土・炭化物・土器片を含む			1.	IIYR 及褐色色	粘土・沙土	に古い黄褐色土塊を少量含む
2.	IHYR 及褐色 色	シルト質・黄褐色土質・礫土・炭化物を含む			2.	3.5y 及褐色	粗 砂	
3.	IHYR 及褐色 色	シルト質・黄褐色土のブロックを含む			3.	IHYR 及褐色色	シレ・要埴土	に古い黄褐色土塊を含む
4.	IHYR 及褐色 色	シルト質・黄褐色土を含む			4.	IYVR 及褐色色	褐色土塊	褐色土塊に多量に含む(柱跡跡)
5.	IYVR 及褐色色	褐色土・に古い褐色土層・鐵化鉄粒をまばらに含む			5.	IYVR 及褐色 色	褐色土・要埴土	褐色土塊及び黄褐色土の小ブロックを多量に含む、焼土を含む
6.	IHYR 及褐色 色	シルト質・粘化物質・燒土を多量に含む			6.	IYVR 及褐色 色	シレ・要埴土	褐色土塊を少量含む
7.	IHYR 及褐色色	シルト質・褐色土かられのカクテル			7.	IYVR 及褐色色	シレ・要埴土	に古い黄褐色土塊にクロックを含む
8.	IHYR 及褐色 色	シルト質・褐色土のブロックを含む			8.	IYVR 及褐色色	シレ・要埴土	褐色土塊を埋蔵状況に含む(柱跡跡)
A.	IYVR 及褐色 色	シルト質・褐色土・粘化物質・土器片を含む			P-1.	IYVR 及褐色色	褐色土・要埴土	褐色土及び燒化土・に古い黄褐色土のブロックを少量含む
B-1.	IYVR 及褐色色	褐色土・粘化物質・土器片を含む			P-2.	IYVR 及褐色 色	シレ・要埴土	褐色土の小ブロックを少量含む
B-2.	IYVR 及褐色 色	褐色土・粘化物質・褐色土・土器片を多量に含む			P-3.	IYVR 及褐色 色	シレ・要埴土	褐色土・要埴土・燒土を含む(柱跡跡)
B-3.	IYVR 及褐色色	褐色土・粘化物質・褐色土・土器片を多量に含む、燒土を含む			P-4.	IYVR 及褐色 色	シレ・要埴土	褐色土色及び黄褐色土色ブロックを多量に含む
B-4.	IYVR 及褐色色	褐色土・土器片を多量に含む			P-5.	IYVR 及褐色 色	褐色土・要埴土	褐色土色・褐色土色を少量含む

第36図 SI-9 穴竪居跡



第37図 SI-9 壁穴住居跡出土遺物

土が流入している。

【床面・壁面】床面はほぼ平坦である。床面で検出された遺構は少なく、汚れも少ない。残存する壁面は、各面とも直線的で、壁の立ち上がりは急である。

【柱穴】住居跡の床面で検出されたP. 2・5と、SI-8・11壁穴住居跡の掘り方底面で検出されたP. 3・4の4箇所で柱穴が構成される。柱穴のうち、柱痕跡の検出ができたP. 2・3・4は、柱痕跡の平面形が長方形ないし方形を呈している。柱の間隔はP. 3-P. 4が2.35m・P. 3-P. 2が2.55mで、北列と北壁間隔が140cm前後・東列と東壁の間隔が190cm前後である。

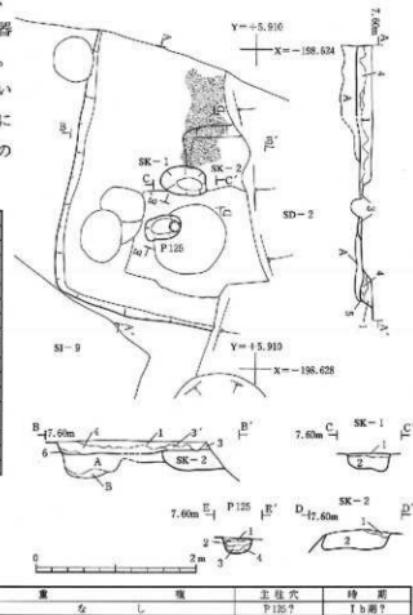
【カマド】検出部及び残存部ではカマド及び焼け面は検出されていない。SI-9 壁穴住居跡と同じ方向に向いて建てられているSI-2・6壁穴住居跡は、いずれも西壁にカマドが設置され、出土遺物も同時期頃のものと判断されることから、SI-9 壁穴住居跡についても、削平された西壁にカマドが存在した可能性が考えられる。

【周溝】周溝は検出されていない。

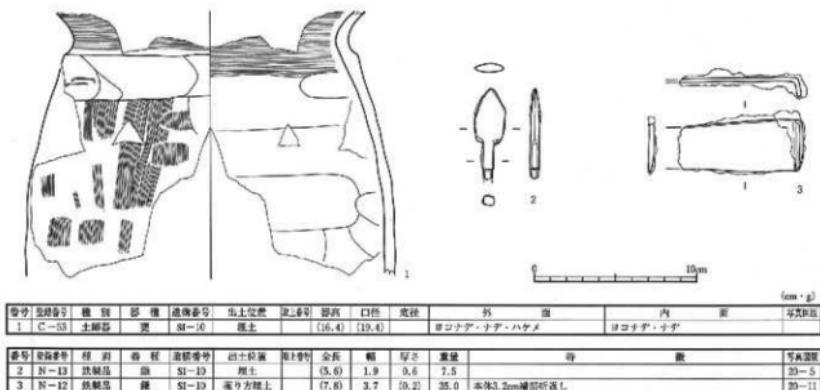
【掘り方】住居跡の中央部の一部分と東壁際を除き、検出された床面のほぼ全面に渡る掘り方が検出された。東壁際は、10~30cmの幅でテラス状に掘り残されていた。この部分については、一度掘り方を埋め戻した後に、東壁際だけを、掘り方を埋め戻した段階の床面レベルに合わせて抜張したことによる段差であると推察される。掘り方底面は、全体的に著しい凹凸があり、掘り方の深さには5~27cmの幅がある。東壁際におけるテラス状の部分の際と、北壁際の掘り方は、不整形の溝状に深く掘られている。この部分の掘り方底面には、掘削具の痕跡が小さな凹凸となって残っている。

〔遺物出土状況と出土遺物〕堆積土中からは多量の土器片が出土しているが、確実に床面の遺物として取り上げることができた遺物はない。調整痕跡の明確な土師器には、ロクロを使用したものはない。堆積土から出土した土師器の坏は、内面黒色処理された有段の丸底坏が占めている。土師器以外には、須恵器・鉄器・磁石・羽口が出土している。須恵器は各器種の破片があり、このうち蓋には内面にカエリのあるものと、端部が下方に折れ曲がるだけのものがある。

地盤		土 色	土 質	特 性
1	10YR 5/2 黄褐色	シート状土	黄褐色土及び真褐色土粒を多く含む	
2	10YR 5/2 黄褐色	シート状土		
3	10YR 5/2(?) 黄褐色	シート状土	暗褐色土粒を少量含む	
4	10YR 5/2(?) 黄褐色	シート状土	黄褐色土粒・炭化物を含む	
5	10YR 5/2 黄褐色	シート状土	黄褐色土粒・炭化物を含む	
6	10YR 5/2 黄褐色	シート状土	黄褐色土粒を含む	
A	10YR 5/2 黄褐色	シート状土	暗褐色土のブロックを含む	
B	10YR 5/2 黄褐色	シート状土	暗褐色土のブロックを少量化	
C	10YR 5/2 明褐色	粘土状シート	黄褐色土・暗褐色土のブロックを少量含む	
D	2.5YR 4/2 黄褐色	粘土状シート	暗褐色土・真褐色土のブロックを多く含む	
E	10YR 4/2 黄褐色	粘土状シート	明褐色土を軟状に少量化	
F	10YR 4/2(?) 黄褐色	粘土状シート	明褐色土・暗褐色土のブロックを多く含む	
G	10YR 4/2 黄褐色	粘土	暗褐色土のブロックを多く含む	
H	10YR 4/2 黄褐色	粘土	暗褐色土のブロックを含む	
I	2.5YR 4/2 黄褐色	粘土	暗褐色土を軟状に少量化	
J	2.5YR 4/2 黄褐色	粘土	暗褐色土を軟状に少量化	



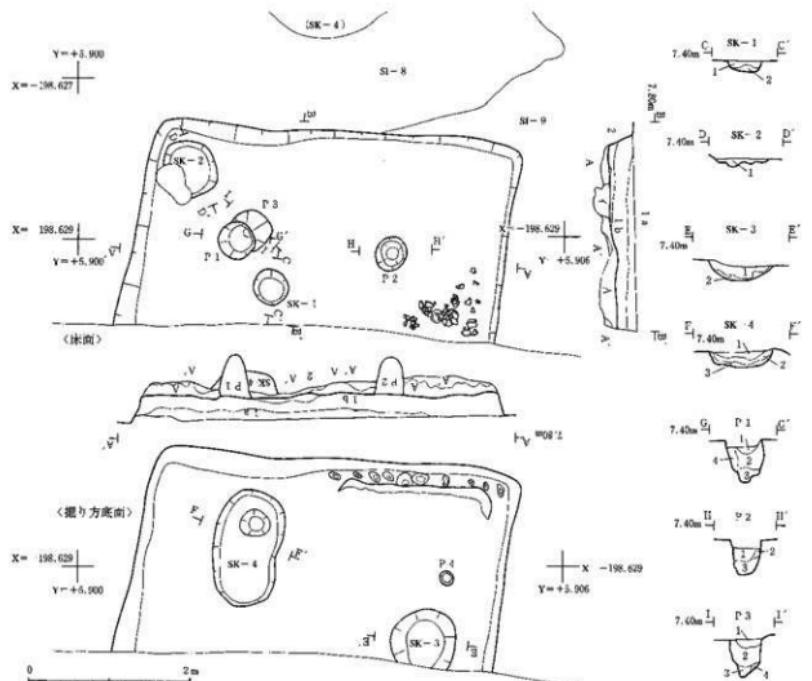
第38図 SI-10豊穴住居跡



第39図 SI-10豊穴住居跡出土遺物

SI-10堅穴住居跡 [位置・遺存状況・重複] 調査区東端部で検出された。東側をSD-2溝跡に切られ、北側は調査区の外にのびる。SI-9堅穴住居跡と接しているが、重複は確認できなかった。

[平面形・規模・方向] 西壁と南壁が直角に折れ、平面形は方形を基調とするが、全容は不明である。



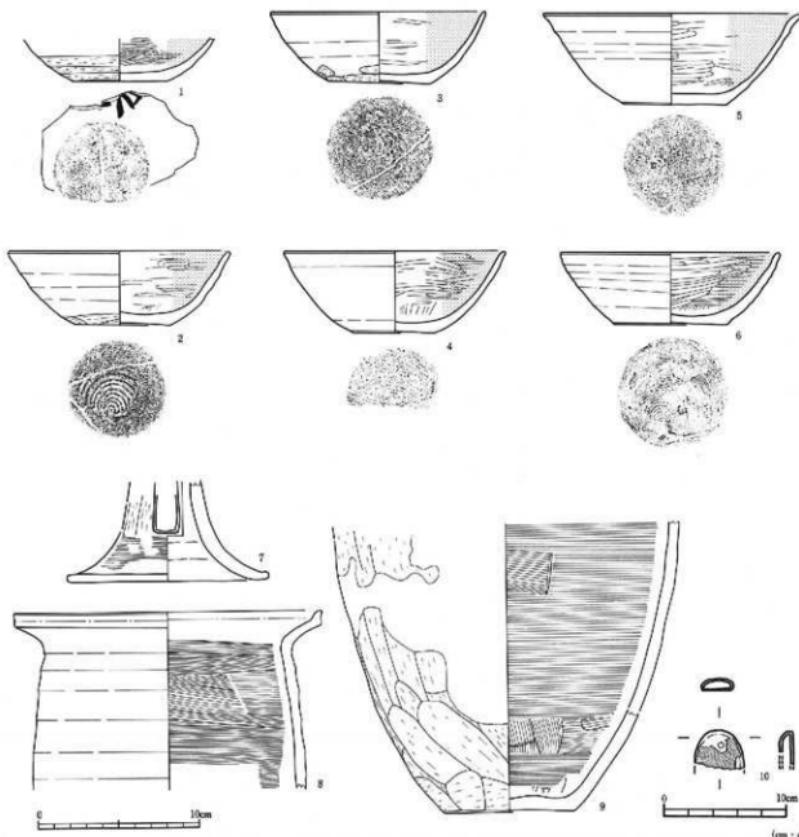
概要	方向(カマド中心)	カマド位置	壁残存高	土	種	主柱穴	時期
4.6×(2.6) m	(N-82°-W7)	東裏?	32-27cm	SI-9→SI-11	SI-11	P1-2,(3),II中期	
ピットNo	P 1	P 2	P 3				
最方形寸	円 形	円 形	円 形?				
面方観測	45×42cm	43×39cm	48×(40) cm				
周 長	52cm	43cm	53cm				
平面形状	-	-	-				
柱痕直径	×-cm	×-cm	×-cm				
1. a	10YR 5/4-5/2褐色 シート地質	帶状褐色土を柱跡に含む、南側に炭化物の堆積あり		上 級 土 質	偏 密 带		
1. b	10YR 5/4 色 柱跡地質?	炭化物、柱跡、帶状褐色土柱を少量含む		底 10YR 5/4-5/2褐色 シート地質	に赤い黄褐色土のブロックを作り、しまり無い		
2.	10YR 5/4-5/2褐色 柱跡地質?	柱跡土を柱跡に含む		底 10YR 5/4-5/2褐色 シート地質?	褐色土のブロックを作り、土性を含む		
3.	10YR 5/4 黄褐色 シート地質	帶状褐色土上、灰白色地質、柱跡土を含む		底 10YR 5/4-5/2褐色 シート地質?	底のP1-2及びP3-1のブロックを多量含む		
A.	10YR 5/4 黄褐色 シート地質	帶状褐色土をグリック状及び柱跡に含む(振り方下記)		中層 10YR 5/4-5/2褐色 シート地質	底層土に柱跡土を含む		
A'	10YR 5/4 黄褐色 シート地質	帶状褐色土をグリック状及び柱跡に含む(振り方下記)		中層 10YR 5/4-5/2褐色 シート地質	帶状褐色土のブロックを多量に含む		
底 1.	10YR 5/4 黄褐色 シート地質?	帶状褐色土上、柱跡土を多量含む		底 10YR 5/4-5/2褐色 シート地質?	帶状褐色土のブロックを含む		
底 2.	10YR 5/4 黄褐色 シート地質?	帶状褐色土を柱跡土を含む		底 10YR 5/4-5/2褐色 シート地質?	帶状褐色土、柱跡土を含む		
底 3.	10YR 5/4 黄褐色 シート地質	帶状褐色土のブロックを含む、柱跡土を含む		底 10YR 5/4-5/2褐色 シート地質?	帶状褐色土のブロックを多量に含む		
底 4.	10YR 5/4 黄褐色 シート地質	帶状褐色土のブロックを多量に含む、柱跡土を含む		底 10YR 5/4-5/2褐色 シート地質?	帶状褐色土のブロックを含む、炭化物、塊化土を含む		

第40図 SI-11堅穴住居跡

検出・残存長は、東西2.7m・南北3.4mを測る。方向は北壁でN-10°-Eである。

〔堆積土〕堆積土は、10~20cmあり、褐色及びにぶい黄褐色のシルト質粘土を主体とする土層が堆積している。

〔床面・壁面〕床面はほぼ平坦である。検出部の北東部・住居跡の中央付近の床面には、炭化物が南北1.3m・東西



番号	発掘場所	標	形	部	種	造作番号	出土位置	出土年月	形状	口径	底径	底壁	外	内	参考点
1	D-18	不	不	SI-11	柱頭・脚立	(2.7)			直筒ヘラケズリ	5.9			ヘラミガキ		15-13
2	D-17	不	不	SI-11	梁頭	4.7			直筒ヘラケズリのち手摺らヘラケズリ	5.9			ヘラミガキ		15-12
3	D-15	不	不	SI-11	梁頭	No2 4.5			直筒ヘラケズリのち手摺らヘラケズリ	13.3	6.2		ヘラミガキ		15-10
4	D-16	不	不	SI-11	柱上	6.1			不規(手摺らヘラケズリ)	13.8	5.3		ヘラミガキ		15-11
5	D-13	土脚筋	环	SI-11	縫り方・SK-3	5.7			直筒ヘラケズリのち手摺らヘラケズリ	18.0	6.4		ヘラミガキ		15-8
6	D-14	土脚筋	环	SI-11	梁頭	No3 4.5			直筒ヘラケズリ	13.5	7.2		ヘラミガキ		15-9
7	C-60	土脚筋	高さ脚	SI-11	2連・SK-1盛土	(6.2)			ヘラケズリ・ヨコナデ	12.6			3万通し		
8	D-20	土脚筋	丸	SI-11	梁頭	(11.1) (19.0)			ヨコナデ				ヘラナデ		15-4
9	D-19	土脚筋	丸	SI-11	柱頭・SK-2	(18.0)			ヘラケズリ	8.2			ヨクロヘラナデ・ヘラナデ		15-5
番号	2回発	標	形	部	種	造作番号	出土位置	出土年月	全長	幅	厚さ	底壁	特	類	参考点
10	N-12	鋼製品	不明	SI-11	1-2層		(1.6)		2.0	0.5	1.5	中空			20-25

第41図 SI-11堅穴住居跡出土遺物

0.5mの範囲で分布している。検出された壁面は、各面とも直線的で、壁の立ち上がりは急である。

【柱穴】住居跡の床面では柱穴を検出することはできなかったが、試掘調査の際に削平された部分で、住居跡の対角線上に位置するピット（P.125）が検出されており、このピットは住居跡の柱穴の可能性がある。P.125の底面は、東端に寄った部分が直径14cmの円形に窪んでおり、この部分は柱痕跡を反映していると解釈される。

【カマド】検出された範囲内では、カマド及び焼け面は確認されていない。

【周溝】周溝は検出されなかった。

【掘り方】住居跡の南東隅付近を除き、検出範囲のほぼ全面で掘り方が検出された。掘り方の深さは10~30cmである。西壁際は、幅70cmで溝状に深く掘られている。

【遺物出土状況と出土遺物】堆積土中からは多量の上器片が出土している。出土した土器器のうち、調整痕跡の明確なものにはロクロの痕跡は認められない。須恵器は、壺・甕・壺などの破片があり、壺の底部には回転ヘラ削りによる再調整がなされている。これ以外には鉄製品の鏃と鎌（？）が出土している。

SI-11堅穴住居跡 【位置・遺存状況・重複】調査区東端部で検出され、SI-8・9堅穴住居跡を切っている。南半分は調査区の外にのびている。検出部は、耕作による削平が浅く、遺存状況は比較的良好である。

【平面形・規模・方向】南辺は不明であるが、検出部から方形の住居跡と推定される。規模は、東西4.6m・南北検出部長2.6mを測る。方向は北壁でN-82°-Wである。

【堆積土】堆積土は、20~30cmあり、上部がぶい黄褐色のシルト質粘土（1a層）、下部が褐色の粘土質シルト層（1b層）からなる。住居跡中央付近の両層間に薄い炭化物の集積層が存在している。

【床面・壁面】床面には緩やかな起伏がある。床面で検出された遺構は少ない。検出部の壁面は、各面とも直線的で、壁の立ち上がりは急である。

【柱穴】住居跡の床面で検出されたP.1・2が北列の柱穴と考えられる。P.1はP.3と重複しており、建替えられている可能性があるが、P.2で柱穴の重複は確認できなかった。P.1・2の間隔は1.8m、柱穴列から北壁までの距離は1.3~1.4m、P.1から西壁までが1.3m、P.2から東壁までが1.3mである。

【カマド】検出された範囲内では、カマド及び焼け面は確認されていない。カマドの位置としては、床面から土器がまとまって出土した東壁の可能性が高い。この場合、東壁中央部は十器が多数出土した地点に当たるので、カマドの位置は、SI-7堅穴住居跡のように東壁の南壁寄りの三等分線付近に築かれていたと考えられる。

【周溝】周溝は検出されなかった。

【掘り方】住居跡の検出範囲の全面に渡る掘り方が検出された。掘り方の深さは5~25cmあり、底面には緩やかな起伏がある。北壁の東寄りの部分は他の部分より掘り方がやや浅く、テラス状に掘り残されており、その上面には掘削具の痕跡が小さな連続するピット状に残されている。掘り方底面で2基の土坑と1個のピットが検出されている。

【遺物出土状況と出土遺物】堆積土中から多量の土器片が出土したほか、東壁中央付近の壁際の床面から土器器の壺と甕がまとまって出土している。土器器壺はいずれもロクロ調整の後、ヘラミガキのうえ内面黒色処理されたものである。これらの壺のうち、床面から出土したものは切り離し後回転ヘラ削り調整と、切り離し後手持ちヘラ削り調整のもの、糸切り無調整のものが混在している。堆積土中から出土したものは、回転糸切り無調整である。十器器壺のうち1点（D-18）には判読不明の墨書きがある。須恵器は壺・甕の小破片が出土しているだけである。上器以外の遺物としては舌状の中空の銅製品が1点出土している。

6 III・IV層出土遺物

調査区の西部で、堅穴住居跡等の検出面であるIIa層より下層の調査を実施した。その結果、現状のIIa層上面

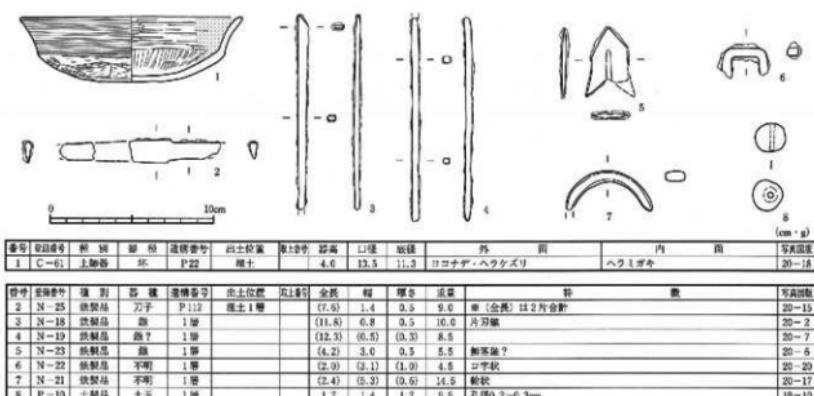
から80cm前後下がったⅢ層中及びⅣ層上面から土器片が出土した。出土土器のはほとんどはⅢ層から出土したものである。Ⅳ層上面出土として取り上げた土器も、Ⅲ層から出土した破片と接合したものがあり、接合しない破片も同一個体と観察されるので、基本的にはⅢ層の遺物と解釈される。

Ⅲ層は、黒褐色の粘土層で、その成因の一つに植物が泥炭化したものが含まれていると考えられる。泥炭質土壤が形成された背景としては、植物が繁茂するような湿潤な環境が一定年限継続していたことが想定される。したがって、Ⅲ層出土土器については、河川の洪水などによって運ばれてきた二次堆積物ではなく、人間の活動の結果により当該地に存在するものと理解される。

出土土器は、接合した結果、未接合のものを含めて8点にまとめた。このうち7点（第42図1a～1c）は、胎土・色調・焼成の類似性から同一個体と考えられ、他の1点は胎土・色調の違いから別個体と判断される。前者は小形鉢の下半部の破片である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は砂粒が多いが緻密で、焼きは堅硬である。造りは比較的薄い。外面は、沈線・縦文・研磨により区画と模様を描いている。底部から2cmほど上に浅い沈線がめぐり、この沈線より下はミガキ調整されている。沈線より上は、浅く太い沈線による模様、および沈線を区画線として縦文帯と無文帯（ミガキ調整部）による文様、区画線のない縦文帯と無文帯による文様などが認められるが、文様構成は明らかでない。縦文はLR縦文で、細かな擦りの原体を使用している。内面は横方向を主体とする粗いミガキ調整が施されている。後者は、外面にミガキ調整、内面にヘラ状工具によるナデ調整のある薄手の土器片である。



第42図 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物



第43図 ピット・I層出土遺物

7 その他の出土遺物

これまで述べた遺構及び下層調査により出土した遺物以外には、掘立柱建物跡として復元されなかったピットから出土した遺物とI層（耕作土層）から出土した遺物がある。

ピットからの出土遺物には土師器と須恵器の小破片が多い。これらの土器の破片は、ピットが堅穴住居跡を切っていることにも要因があると考えられる。P.22から出土した土師器坏も、この遺構がSI-4堅穴住居跡の標準を切っていることに出来する可能性があり、同坏がSI-4堅穴住居跡と関係していることも考えられる。土器以外の遺物としては、刀子の破片がP.112から出土している。

I層（耕作土層）からも、土師器・須恵器・陶器・磁器の破片が多数出土している。それ以外には、鉄製品と土製品が出土している。

第5章 考察と調査のまとめ

1 遺構の時期と性格

今回の調査で検出された遺構には、掘立柱建物跡・溝跡・井戸跡・土坑・堅穴住居跡がある。遺構によっては個別に所属年代の位置付けを行ったものもあるが、それらを含めて遺構毎に整理する。

1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、比較的柱穴規模の小さな建物5棟分を復元した。5棟の柱穴に切り合いはないが、位置が重複または近接していることから、各建物は同時に存在した可能性は低く、比較的長期に渡って連續的に形成された建物と考えられる。建物の形態や規模が異っており、その点において建物の性格に同一性は認められない。

掘立柱建物跡の時期としては、SB-5掘立柱建物跡のピット95中より17世紀後半から18世紀前半頃の唐津窯の陶器が出土しているので、この時期を中心とする年代が考えられる。

2) 溝 跡

溝跡は調査区の東西両端で各1条検出された。両者とも自然堤防と同方向の南北方向にのびている。

SD-1溝跡は、自然堤防の肩部に掘削された溝で、耕作により削平を受け、堆積土中から古代の土器片が出土しているが、年代を決定できる遺物は出土しておらず、所属時期は不明である。自然堤防の肩部に位置することから、区画溝の可能性もあるが、自然堤防面と旧河道面の高低差が大きいことを考えると区画施設は不適と思われる。

SD-2溝跡は、上面幅が2m以上で、現地表から150cmを超す深さがあり、比較的規模の大きな溝跡である。調査区東部では、この溝の近くになると掘立柱建物跡に隣接する柱穴も希薄になることから、掘立柱建物跡に係わる屋敷を区画する堀としての性格が考えられる。遺構の年代は、掘削時期は不明であるが、埋没時期は出土した磁器の年代が18世紀以降から19世紀後半以降のものであることから、この頃に堀の機能が廃されたと考えられる。堀の時期と掘立柱建物跡の時期は一部重複しており、遺構の配置とともに関係が推定される。

3) 井戸跡

明確な井戸跡は1基検出された。掘り方直径3.1m、現地表からの深さ3.5m以上で、河原石の石組み井戸枠を有する井戸である。遺構の年代としては掘り方埋め土から17世紀後半以降に位置付けられる肥前窯の磁器が出土していることから、17世紀後半以降に掘削されたと考えられ、掘立柱建物跡の時期と重複し、同期に存在して有機的に関連した遺構の可能性がある。

4) 上 坑

土坑跡は10基検出された。形態的に分類すると、イ.平面形が長方形を呈し、比較的大型で深いもの（SK-1上坑）、

ロ、平面形が円形を呈し、大型で深いもの（SK-3・4・5土坑）、ハ、小型で浅いもの（SK-7・10・11・12・13・14土坑）、の三種類がある。

イのSK-1土坑は、人為的にしかも掘削後に自然堆積が生じる間でもないほど短期間のうちに埋められた状況を呈し、形状とともに墓壙の可能性があるが、これを裏付ける資料に欠けている。時期決定に係わる資料としては、カワラケが出土しているが、中世のものか近世以降のものか判断できない。

ロのSK-3・4・5土坑は、直径が2m前後、深さは1.5m以上あり、壁面はほぼ直立している。完掘していないので造構の性格は明らかでないが、このような形状でさらに深くなる造構としては井戸跡が考えられる。その場合、先に記したように造構の壁面が崩落しやすいので、何らかの井戸枠を設けて壁面の保護が必要と考えられるが、調査部分ではそのような施設は検出せず、井戸跡と確定できなかった。上坑からは古代の土器が多数出土しているが、これらの遺物は、重複して切っている堅穴住居跡からの崩落土に混入していたと考えられるもので、土坑の年代と関係する遺物は出土していない。掘立柱建物跡の柱穴を切るもの（SK-3土坑）と、掘立柱建物跡との関係は不明であるが柱穴の可能性のあるピットに切られるもの（SK-5土坑）の両者があることから、この類の土坑も掘立柱建物跡の時期と平行して存在した可能性が考えられる。

ハの類型の土坑は、掘立柱建物跡の時期と関係するSK-3上坑に切られるSK-14土坑や、SK-1土坑に切られるSK-13土坑など個別の重複関係はあるが、出土遺物によって年代が明らかにできるものはない。また、形態や出土遺物によって性格の推定できる造構もない。

5) 壁穴住居跡

① 住居跡の変遷と年代

住居跡と考えられる壁穴は10棟検出された。これらの壁穴住居跡から出土した遺物のうち土器の环についてみると、ロクロ未使用の段階の住居跡（SI-2・3・4・6・9=Ⅰ期）とロクロ使用の段階の住居跡（SI-7・8・11=Ⅱ期）、及び上器環坏の時期不明の住居跡（SI-1・10）がある。SI-10壁穴住居跡は、土器環坏は出土していないが、ロクロを使用していない土器環が出土しているので、ロクロ未使用段階の住居跡と考えられる。これまでの土器の編年研究によると前者が古く、後者が新しく位置付けられる（氏家：1957他）。さらに、壁穴住居跡の変遷を、造構の重複関係・建物及びカマドの方向・出土遺物をこれまでの編年研究により整理したのが第44図であり、その関係をもとに主な土器を集成したのが第45図である。

〔上器環坏非ロクロ段階：Ⅰ期〕

先ず、ロクロ未使用段階の土器の环についてみると、在地の丸底のもので、内面がヘラミガキ調整のうえ黒色処理されたもの（内黒）と、「関東系上器」呼ばれる橙色を呈して外面が口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラケズリ調整、内面が口縁部ヨコナデ・体部～底部ヨコナデないしナデ調整されるもの（C-17～19/C-41・42・45他）の2種類がある。在地のものは、口径の割に比較的浅いものが多く、体部と底部の境は器高の中程から下位にある。体部と底部の境の外側には段ないし後があり、それに対応する内面にも屈曲ないし角が付くものが多いが、SI-3壁穴住居跡出土のC-10のように底部から口縁まで緩やかに丸みをもって立ち上がるものもある。口縁部は端部付近がわずかに内湾気味のものが多いがSI-6壁穴住居跡からはC-26・27のように外傾しているものも認められる。

関東系土器の环は、小型薄手で、口縁部が短くS字状に屈曲する丸底环である。また、SI-2壁穴住居跡出土のC-6も小型薄手の非内黒の环であることから関東系土器に分類可能であるが、口縁部が他に比して幅が広く、緩やかに外反し、内面がヨコナデの後に粗くヘラミガキ調整されている点において他と異なる。

SI-2・6・9・4・3壁穴住居跡から出土した在地の土器環をみると、その特徴は仙台市都山遺跡Ⅱ期官衙外郭大溝出土环（木村他：1981・1985）や、郡山遺跡第65次調査の際に、IV層で検出された掘立柱建物跡や壁穴住

居跡から出土した土器群（長島：1992）と同様の特徴を有している。外郭大溝出土土器及び第65次調査の土器群については、Ⅱ期官衙造営以降の7世紀末葉から多賀城創建までの8世紀第1四半期（8世紀初頭）に位置付けられている（木村他：1981・1985／長島：1992）。久ノ上Ⅱ遺跡周辺における同じような土器の組合せもつ聚落としては、名取川を挟んで対岸に所在する仙台市中田南遺跡の「古代第Ⅲ群土器」に伴う住居群があり、その年代について郡山遺跡及び県内各地の関連遺跡の検討から、7世紀末から8世紀前半に位置付け、中でも8世紀前葉に中心があるものと考えられている。（太田：1994）

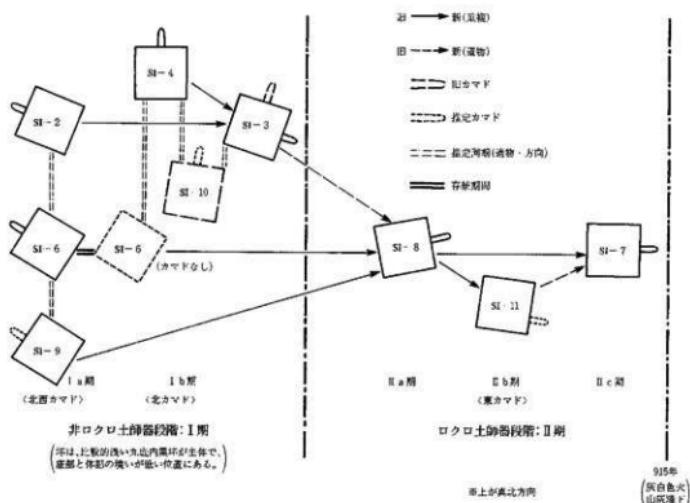
SI-2・6・9・4・3堅穴住居跡から出土した須恵器は少ないが、E-1・2のような比較的小型で丸底風の平底で体部が直立ないし直立気味に立ちあがる坏や、内面にカエリがあるがやや扁平でボタン状のつまみが付く蓋は、郡山遺跡Ⅱ期官衙関連の須恵器や、中田南遺跡古代第Ⅲ群土器に伴う須恵器に器形の共通性を認めることができ、7世紀末から8世紀初頭に位置付けることが可能である（注1）。したがって、久ノ上Ⅱ遺跡における非ロクロ土師器坏段階の堅穴住居跡の年代は、7世紀末から8世紀初頭に位置付けられる。

次に、出土土器から郡山遺跡Ⅱ期官衙とほぼ同期と見られるSI-2・6・9・4・3堅穴住居跡について建物及びそのカマドの敷設位置から新旧を検討すると、SI-2・6・9堅穴住居跡は、カマドを主軸とする軸方向がN-56°～69°-Wを示し、カマドは北西の壁に築かれている。また、SI-4・3・10堅穴住居跡は、軸方向がN-1°～18°-Eを示し、カマドは北壁に築かれている。（SI-3堅穴住居跡のカマドはその後東壁に造り変えられている。SI-10堅穴住居跡は、カマドが検出されていないが、堅穴の軸方向がSI-3・4と共通性があるので、北壁に築かれた可能性がある。）堅穴の軸方向とカマド位置で、両群の前後関係を考えると、SI-3堅穴住居跡がSI-2堅穴住居跡を切っていることから、北西カマドのSI-2・6・9堅穴住居跡が古く（I a期）、北カマドのSI-4・3・10堅穴住居跡が新しい時期（I b期）の住居群であると考えられる。

同一時期の建物群に、強い基準の方向性の認められる近隣遺跡には郡山遺跡がある。郡山遺跡では、先に久ノ上Ⅱ遺跡の非ロクロ土師器坏出土の住居跡群を同期に位置付けたⅡ期官衙の建物群は、真北方向を造営の基準方向としている。また、これに先行するⅠ期官衙（7世紀中頃から7世紀末頃）の建物群は、真北から30°～40°東に振れた方向を基準とし、Ⅰ期官衙の段階からⅡ期官衙の段階へ移行する際に、造営の基準方向が大きく転換されている。また官衙内における堅穴住居跡も、掘立柱建物跡と同様に官衙造営の基準にそって建てられており、一般集落と異なる性格が考えられている（木村：1981・1985）。

久ノ上Ⅱ遺跡の北西カマドの堅穴住居跡群は、カマドを中心とする主軸方向（N-56°～69°-W）に対して、これに直交する方向の軸を想定すると、真北から21°～34°東に振れた方向となり、郡山遺跡Ⅰ期官衙の造営の基準方向と近い数値を示している（注2）。このことは、久ノ上Ⅱ遺跡の非ロクロ土師器を出土した堅穴住居跡が、全体としては郡山遺跡Ⅱ期官衙の時期に相当するとしても、北西カマドの堅穴住居跡群の時期については、郡山遺跡Ⅰ期官衙の造営基準方向の影響を受ける段階、すなわちⅠ期官衙末期の7世紀末頃に形成されたものと考えられる。また、両遺跡間に建物の軸方向とその変遷に類似性が認められることと、SI-2・6堅穴住居跡から鐵治に関連する遺物が出土していることを合わせて考えると、北西カマドの住居跡群は、郡山遺跡の官衙と密接な関係のある住居跡群であると推察される。北西カマドの堅穴住居跡群の時期を7世紀末頃に位置付けると、これに後続する北カマドの住居跡群は、郡山遺跡Ⅱ期官衙造営基準方向の影響のもとに建てられたと考えられることから、Ⅱ期官衙と同時期中でも8世紀初頭になってから形成された可能性が高いものと思われる。

上述のとおり、北西カマドの堅穴住居跡群（I a期）について遺物と軸方向の関連から、郡山遺跡のⅠ期官衙とⅡ期官衙との中间期、すなわち7世紀末頃と考えられる。この場合、口縁部がS字状に屈曲し、小型薄手のC-17～19/C-41・42・45のような関東系土師器の年代について、7世紀中葉から8世紀初頭に位置付ける考え方（古川：1984・1985）においては、その年代幅の中でとらえることができるが、8世紀初頭に位置付ける考え方（長谷



第44図 重複関係及び方向・出土遺物からみた竪穴住居跡の変遷

川：1993）にしたがった場合は、若干の時間差が生じる。後者の立場に立った年代観の理解としては、SI-6 竪穴住居跡は、カマドの施設された段階から、鍛冶関連の工房として使用されるような段階まで、4時期程度の変遷を経ていることから、他の2棟北西カマドの竪穴住居跡より存続期間が長かったために、8世紀初頭の遺物が出土するに至ったものと解釈される。北カマドのSI-4 竪穴住居跡でも関東系土師器が出土しているので、SI-6 竪穴住居跡は、この頃まで存続したと考えられる。

北カマドの住居跡群（Ib期）は、郡山遺跡II期官衙造営後に前段階と同様に、II期官衙造営基準方向を意識して建てられたと考えられる。SI-4 竪穴住居跡はほぼ真北を基準として建てられ、郡山遺跡II期官衙の強い影響が想定されるが、これを切るSI-3 竪穴住居跡の時期になると、方向性はやや崩れ、最初北端に築かれたカマドも、改築時には東壁へと移される。出土土師器壺も、底部と体部の境が外側の調整の違いで理解できるだけとなり、平底化への移行をうかがうことができる。この時期の年代は、郡山遺跡II期官衙の年代から8世紀初頭頃と考えられる。

以上のように欠ノ上II遺跡の非クロト師器壺段階の集落は、郡山遺跡と密接な関係を持って形成され、7世紀末頃に、郡山遺跡I期官衙の造営基準方向である真北から30~40°東に振れた方向を意識して、北西の壁にカマドが敷設される住居が形成される。その後7世紀末郡山遺跡II期官衙が真北を基準方向として造営されると、欠ノ上II遺跡の住居も真北を意識した方向の北壁にカマドを敷設する住居に変化する。やがて8世紀第1四半期末頃に郡山遺跡の官衙が廃されると、欠ノ上II遺跡の非クロト上師器壺段階の集落も廃される。

なお、この段階におけるSI-6 竪穴住居跡は、竪穴内から焼け面や炭片が検出されるとともに、鐵滓（図版21-1~4）、鍛造剝片（図版21-5）、球状滓（図版21-6）、羽口片などが出土していることから鍛冶工房としての機能を果たしていたと考えられる。

時 期	カマド 作 用 別 等 級	土師器				須恵器
		(北)	(関東系环)	(境)	(境)	
土 師 器 坏 非 口 クロ 段 階	I a 期 北 西 壁 カ マ ド	S I - 2 	C-6 (SK-8) 	C-7 (境)	C-1 (境)	E-1 (縁付)
		S I - 6 	C-24 (2縁) 	C-6 (P1) 	C-23 (1縁) 	E-2 (5縁)
		S I - 9 				S-17 (1縁)
	I b 期 北 壁 カ マ ド	S I - 4 	C-19 (1縁) 	C-8 (1縁) 	C-20 (境) 	
		S I - 3 		C-11 (SK-5) 		E-19 (1縁)
	II a 期 東 壁 カ マ ド	S I - 8 		D-11 (カマド内) 	D-10 (1縁) 	E-13 (1縁) E-12 (縁付高脚) E-7 (1縁)
		S I - 11 		D-19 (境) 	D-20 (境) 	
		S I - 7 		C-18 (SK-3) 	D-8 (境) 	D-7 (縁) E-4 (境)
	II b 期				D-6 (1縁) 	
	II c 期					

第45図 穴住居跡の主な出土土器とその変遷

【土師器坏ロクロ段階：Ⅱ期】

ロクロを使用した土師器は、東北地方の上師器編年において「表杉ノ入式」と呼ばれ、平安時代のほぼ全体に渡る上器形式と理解されている（氏家：1957）。表杉ノ入式に相当する土師器は、「赤焼土器」と呼ばれる坏内面にヘラミガキ及び黒色処理を施さない土器や、須恵器とともに、その変遷過程の研究が行われている（白鳥：1980・加藤：1982・丹羽：1983・村田：1995他）。各研究によると、表杉ノ入式の土師器は、底部は切り離し後調整の行われるものから無調整ものへ、底径の割合が口径に比して大きなものから小さなものへという大きな変化の流れがあり、その過程の中にさらに法量が一度大きくなってから前段にもどり、さらに小さくなるといううねりが認められている。

本項では、ロクロ上師器の出土したSI-8・11・7堅穴住居跡について、白鳥良一氏の研究及び仙台市中在家南遺跡河川跡の堆積層から出土した遺物との対比において、その年代的位置付けを行う。

検討に先だって、造構の重複関係を確認すると、SI-8堅穴住居跡は、SI-7・11堅穴住居跡に切られ、両住居跡より古い。SI-7堅穴住居跡とSI-11堅穴住居跡は、接近して存在し、しかも出土土器の様相も異なるので、同時に存在したと考えられないが、重複関係による新旧は不明である。ただし、SI-7堅穴住居跡は、堆積土中から、915年に降下したとされているいわゆる「灰白色火山灰」と観察される白色土粒が検出されているので、SI-7堅穴住居跡の下限を10世紀初頭以前と位置付けることができる。したがってSI-8堅穴住居跡の年代はそれ以前と考えることが可能である。

比較的多数の土器が出土したSI-11堅穴住居跡の土師器坏は、口径に比して底径が比較的広く、底部は切り離し後回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリにより再調整され、壺類にはロクロ調整がなされていることから、白鳥良一氏の編年では、9世紀後半とされるD群土器段階に位置付けることができる。ただし、上師器坏D-18のような、切り離し後回転ヘラケズリ調整されるものは、D群土器に先行し、9世紀前半とされるC群土器段階の調整に多くみられる特徴とされることから、SI-11堅穴住居跡の年代は、9世紀後半でも9世紀中葉頃として考えることが可能である（II b期）。

次にSI-7堅穴住居跡についてみると、土師器坏の器形全体のプロポーションや壺の器形や調整はSI-11と違いは少なく、また、坏の底部と体部の境が明瞭に角張っている点において、D群土器の範疇であると理解されるが、土師器坏の底部が回転糸切り無調整のものだけで構成される点において、SI-11堅穴住居跡よりも後出的な要素がある。また、坏D-21や台付坏D-22のように、法量の大きな坏形土器が出現しているが、このような大型化の現象は、中在家南遺跡河川跡で灰白色火山灰層（4層）の下層におけるロクロ土師器坏の8～6層から5層への変化と対応している（工藤：1996）。したがって、SI-7堅穴住居跡については、SI-11堅穴住居跡より新しく位置付けて、9世紀後葉から灰白色火山灰層以前の10世紀初頭までの間の造構と考えられる（II c期）。

SI-8堅穴住居跡は、重複関係においてSI-7・11堅穴住居跡より古いことは先に述べたが、この住居跡も土師器の壺にロクロが使用されている点において、D群土器の段階と重複していると考えられる。ただし、9世紀中葉に位置付けたSI-11堅穴住居跡に切られていること、及び須恵器坏E-12のような、口径の割に底径が大きく、底部と体部の境が明瞭に角張り、底部の切り離しが回転ヘラ切り無調整のC群土器段階の特徴を具備している須恵器坏が出土していることから、9世紀中葉でも前半頃と考えるのが妥当であろう（II a期）。

② 堅穴住居跡の歴史的性質

今回発見された堅穴住居跡は上述したとおり、非ロクロ土師器の時期とロクロ土師器の時期の大きく2時期がある。前者は、7世紀末頃から8世紀初頭に位置付けられ、堅穴の主軸の基準方向が真北から56～69°西に振れ、カマドが北西の壁面に敷設される段階から、堅穴の主軸の基準方向が南北方向となり、北側の壁にカマドが敷設される段階への変遷があり、その変遷時期と基準方向は、郡山遺跡におけるⅠ期官衙からⅡ期官衙造営の時期と基準方向

の変化と概ね一致している。このことは、この時期の欠ノ上Ⅱ遺跡の堅穴住居跡群は、郡山遺跡の官衙と密接な係わりを持ち、その規制を受けた集落の可能性があると考えられる。この時期の集落は、Ⅱ期官衙の多賀城への移転とともに廃されている。

今回の調査成果で見る限り、欠ノ上Ⅱ遺跡ではSI-3堅穴住居廃絶後、約100年ほどの空白期間があり、9世紀中葉頃に再び集落が形成される。この集落については、一般の農村集落と考えられる堅穴住居跡と遺構・遺物の点で相違は認められないことから、農村を形成する堅穴住居跡と考えられる。この時期の3棟の堅穴住居跡には、重複や遺物に時間差が認められることから、同時に存在したと考えられていないので、散村的な農耕集落であったと推定される。この集落も10世紀初頭以降の動向は不明である。

2 遺物の総括

本調査においては、土師器・須恵器・鉄製品など多数の遺物が出土したが、本項ではこのうち主にSI-6堅穴住居跡から出土した溶解物の付着する土器と、漆状の樹脂の付着した土器について簡単に総括することとしたい。

1) 溶解物付着土器について

溶解物の付着した土器は、高熱によって土器全体が灰色に変色しているが、ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ・ハケメ調整などの製作技法や器形の特徴（第30図）から、土師器が転用されたものと観察される。器種としては壺が多いが、壺の底部付近も利用されている。壺の場合、口縁部がそのまま使用されたもの（第30図1～4）と、口縁部を連続的に欠いて口縁を再生し、浅くして使用したもの（第30図5・6）がある。溶解物は黒褐色から暗赤褐色を呈し、ガラス状に溶けている部分と発泡して白濁している部分があり、土器の内面の全体または一部に偏って付着している。口縁部及び外面には部分的に付着しているだけである。このような土器については、溶解物が鉱物起源の物質と観察されることから、トリベとして使用されたものと理解される。鉱物の成分としては、溶解物の色調が赤みを帯びていることから、銅を主成分とする金属に由来する可能性がある（注3）。したがって、溶解物付着土器については、銅製品の鋳造にあたってトリベとして使用されたものと考えられる。

溶解物の付着した土器が出土しているのは、SI-6堅穴住居跡と同期頃の住居跡では、SI-2=2点・SI-3=1点・SI-4=10点・SI-6=66点・SI-9=5点で、SI-6堅穴住居跡からの出土点数が圧倒的に多い。SI-6堅穴住居跡では、前項で述べたように、鍛冶工房としての役割を果たしていたのみならず、銅製品の鋳造も行っていたと考えられる。

2) 漆状樹脂付着土器について

漆状の樹脂の付着した土器は、SI-6堅穴住居跡の2層中に埋め込まれた状態で出土した高台付の壺である。高台は欠損しているが壺部は完形である。漆状の樹脂は、内面は全体に薄く付着し、外面は液垂れして流れたような状況で付着している。内面には、水平方向にヘラ状の道具で撫でて、丁寧に樹脂を搔き取ったような痕跡が残る。

漆状の樹脂が付着した土器は、郡山遺跡でも多数出土しており、官衙や寺院造営にあたり、塗料をはじめとした様々な用途に利用されたと考えられる。今回、鍛冶工房と考えられるSI-6堅穴住居跡から、このような土器が出土したことは、この工房において鍛冶に係わって漆が使用されていたことを推定させるものである。

3) Ⅲ・Ⅳ層出土土器について

Ⅲ・Ⅳ層から出土した土器は、前章のとおり、2個体からの破片が出土している。そのうち模様の付されているB-1は、幅が広く浅い沈線と繩文及びミガキ調整の帶状の無文部分によって模様が構成されているが、全般的な模様の意匠は不明な土器である。これに類似する土器については資料を得ていないが、繩文の原体が細かいものであることから、弥生土器の可能性が高いものと推定される。弥生土器とした場合、沈線の幅が広いことから中期前半以前のものと考えられる。なお、Ⅲ層及び出土土器の年代については、今後の発掘調査において同層から型式決

定できる良好な資料の出土を待って正式な判断をしたい。

3 まとめ

- ① 欠ノ上Ⅱ遺跡は、仙台平野中央部の広瀬一名取川が形成した沖積地の、標高約8mの自然堤防に立地する。
- ② 欠ノ上Ⅱ遺跡では、耕作土を除去したⅡ層上面で遺構が検出され、その面から約80cm下がったⅢ層中からは弥生土器と推定される土器片が出土した。
- ③ Ⅱ層面で検出される遺構は、大きく区分すると近世・平安時代・飛鳥～奈良時代の3時期のものがある。
- ④ 近世の遺構は18世紀頃を中心としたもので、掘立柱建物跡・溝跡・石組み井戸枠の井戸・井戸の可能性のある大型円形土坑などがある。
- ⑤ 平安時代の遺構は、9世紀中葉から灰白色火山灰が降下する前の10世紀初頭頃のもので、堅穴住居跡が3棟検出された。3棟の住居は東壁にカマドが敷設されるという共通性があるが、重複関係と出土遺物の検討から、それぞれ異なる時期の住居跡であると判断された。
- ⑥ 飛鳥～奈良時代の遺構は、7世紀末から8世紀初頭のもので、堅穴住居跡が6棟検出された。6棟の住居跡のカマドは、北西壁に敷設される段階から、北壁に敷設される段階へと変化しており、この変化は郡山遺跡のI期官衙からII期官衙の造営基準方向の変化に対応する。建物の軸方向の対応関係は、郡山遺跡の官衙による、欠ノ上Ⅱ遺跡の集落跡への規制によるものと推定できることから、両遺跡に密接な関係が存在したと推察され、官衙と周辺集落との関係を理解する上で貴重な発見となった。
- ⑦ 飛鳥～奈良時代の住居跡のうち、SI-6堅穴住居跡は、住居から工房へ改築されたと考えられる遺構で、鍛冶及び銅製品の鋳造の工房と推定される遺構・遺物が検出された。

注 記

- 注1 欠ノ上Ⅱ遺跡出土の須恵器壺E-1・蓋E-17は、郡山遺跡第65次調査における須恵器の分類に当てはめると、それぞれ壺I 2類・蓋I 2 b類に相当する。
- 注2 桑原滋郎氏は、郡山遺跡のI期官衙の基準方向について、調査報告の見解（「真北から30~33°東に偏している」という見方）に対して、「真北から60°西に偏している」という指摘（石松好雄・桑原滋郎：『大宰府と多賀城』岩波書店 1985）をされている。カマドを基準として考えた場合、欠ノ上Ⅱ遺跡における北西カマドの堅穴住居跡の基準線は、真北から60°西に偏していることになり、岡氏の指摘に一致する。また郡山遺跡では、I期官衙の中枢部は、約120m×約90mの長方形に区画されると推定されているが、その短辺の一つに当たる南東辺の中央部付近で、板塀の接続する門跡が発見されており（長島：1998・1999）、本遺跡SI-2堅穴住居跡が北西壁にカマドが造られ、南東辺の中央に出入り口に伴う梯子の据え方と考えられるピットが検出されている状況とに、基準方向に類似性が認められる。
- 注3 類似した赤色を呈する溶解物が付着した土師器は郡山遺跡第117次調査において多数出土しており、同資料については、国立歴史民族博物館の今村峯雄氏により、銅の成分が多いため赤色を呈するという教示が得られている（長島：1999）。

参考文献

- 氏家 和典 1957：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
- 太田 昭夫 1994：「中田南遺跡」仙台市文化財調査報告書第182集
- 小川 淳一 1980：「塙沢北遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ」宮城県文化財調査報告書第69集
- 加藤 道男 1989：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』Ⅱ 翠楽社
- 加藤 道男・阿部 博志 1980：「般音沢遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」宮城県文化財調査報告書第72集
- 木村 浩二 1981：「郡山遺跡Ⅰ」仙台市文化財調査報告書第29集
- 1985：「郡山遺跡Ⅴ」仙台市文化財調査報告書第74集
- 木本 元治 1990：「南東北地方における歴史時代の須恵器編年位置」『考古学古代史論叢』伊東信雄先生追悼論文集刊行会
- 工藤 哲司 1996：「中在家南遺跡 分析考察編 第6章 出出土師器について」仙台市文化財調査報告書第213集
- 小井川和夫・小川 淳一 1982：「御駒堂遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書VI」宮城県文化財調査報告書第83集
- 佐藤 甲二 1985：「久ノ上I遺跡」仙台市文化財調査報告書第79集
- 猪原 信彦 1993：「大遜寺窯跡 第2・3次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第168集
- 白鳥 良一 1980：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』宮城県多賀城跡調査研究所
- 1982：「多賀城跡 政府本文編 第Ⅷ章考察 2 遺物 (2) 土器」宮城県教育委員会 宮城県多賀城跡調査研究所
- 長島 栄一 1998：「郡山遺跡XⅨ」仙台市文化財調査報告書第227集
- 1999：「郡山遺跡XⅨ」仙台市文化財調査報告書第234集
- 丹羽 茂 1981：「清水遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書V」宮城県文化財調査報告書第77集
- 長谷川 厚 1993：「関東から東北へ—律令成立期前後の関東地方と東北地方の関係について—」「二十一世紀への考古学 櫻井清彦先生古希記念論文集」雄山閣出版
- 早坂 春一 1981：「口向前横穴古墳」「東北新幹線関係遺跡調査報告書V」宮城県文化財調査報告書第77集
- 古川 一明 1984：「色麻古墳群」「宮城県営園場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書」宮城県文化財調査報告書第100集
- 1995：「色麻古墳群」「昭和59年宮城県営園場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書」宮城県文化財調査報告書第103集
- 村田 晃一 1995：「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』36号

写 真 図 版



図版1 遺跡の位置と周辺の環境 (昭和36年: 国土地理院)



1 造構検出状況（調査区西部：南より）



2 造構検出状況（調査区東部：南西より）



3 調査区全景（西より）



4 調査区西部完掘状況（南より）



5 調査区中央部完掘状況（南より）



6 調査区東部完掘状況（南より）



7 調査区東部完掘状況（東より）



8 深掘り調査区全景（南より）

図版2 造構の検出と調査状況



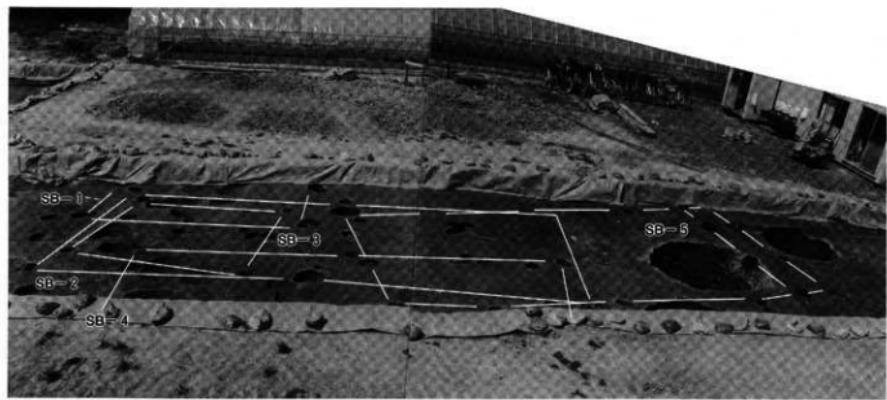
1 SD-1 溝跡全景（南より）



2 SD-2 溝跡全景（南より）



3 SD-2 溝跡北壁土層断面



4 摄立柱建物跡全景（南より）

図版3 溝跡と攝立柱建物跡



1 SE-1 井戸跡掘り方上部断面（南より）



2 SE-1 井戸跡石積み井戸枠（東より）



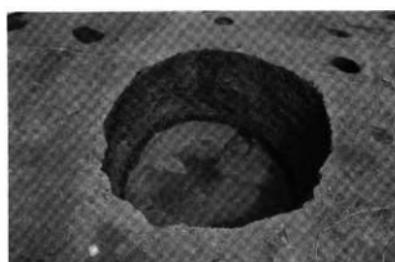
3 SE-1 井戸跡中部付近の石組配列（東より）



4 SK-1 土坑跡全景（東より）



5 SK-1 土坑跡土層断面（東より）

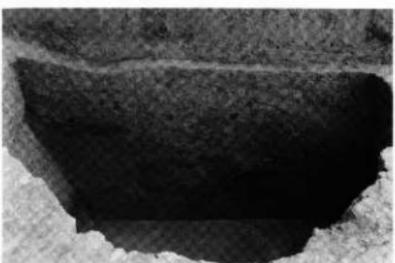


7 SK-3 土坑跡全景（南西より）

図版4 井戸跡・土坑跡（SK1～3）



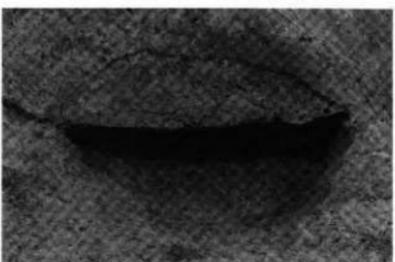
1 SK-4 土坑跡（南より）



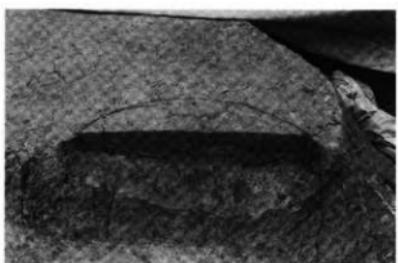
2 SK-5 土坑跡（北より）



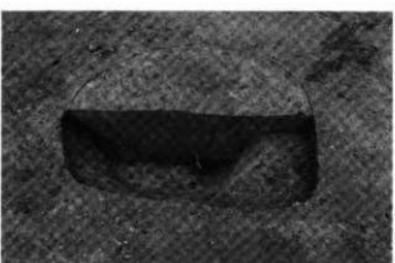
3 SK-7 土坑跡（南より）



4 SK-10 土坑跡（南より）



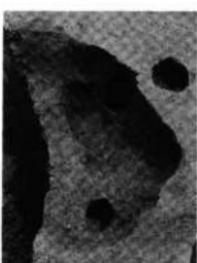
5 SK-11 土坑跡（南より）



6 SK-12 土坑跡（南より）

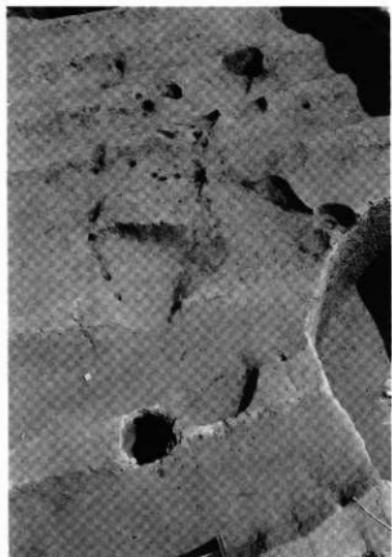


7 SK-13 土坑跡（南より）

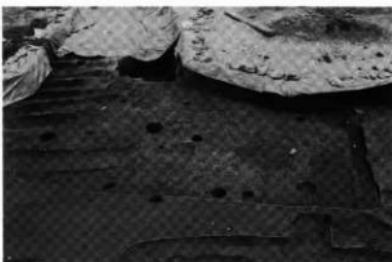


8 SK-14 土坑跡（西より）

図版5 土坑跡（SK 4～14）



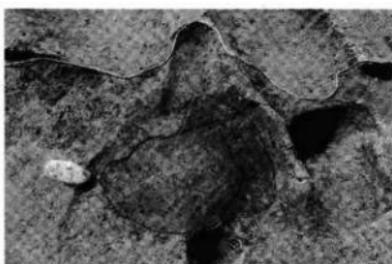
1 SI-1 壁穴住居跡 (南より)



2 SI-2 壁穴住居跡床面検出状況 (南より)



3 SI-2 壁穴住居跡完掘状況 (南より)



4 SI-2 壁穴住居跡カマド (東より)



5 SI-2 壁穴住居跡 SK-2 土坑土層断面 (南より)



6 SI-2 壁穴住居跡カマド右側の遺物出土状況 (東より)

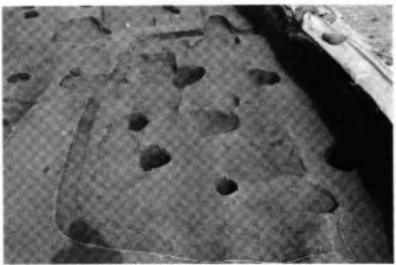


7 SI-2 壁穴住居跡床面中央の遺物出土状況 (東より)

図版 6 壁穴住居跡 (SI-1 ~ 2)



1 SI-3 壁穴住居跡床面検出状況（西より）



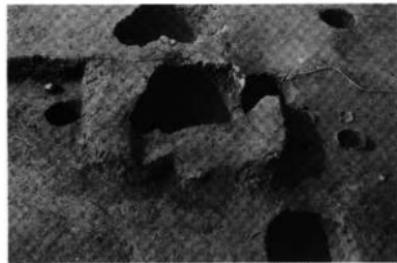
2 SI-3 壁穴住居跡完掘状況（西より）



3 SI-4 壁穴住居跡床面検出状況（東より）



4 SI-4 壁穴住居跡完掘状況（東より）



5 SI-4 壁穴住居跡カマド（新期：南より）



6 SI-4 壁穴住居跡（古期：南より）



7 SI-4 壁穴住居跡 P2 柱穴断面（西より）



8 SI-5 壁穴住居跡（北より）

図版7 壁穴住居跡（SI-3～5）



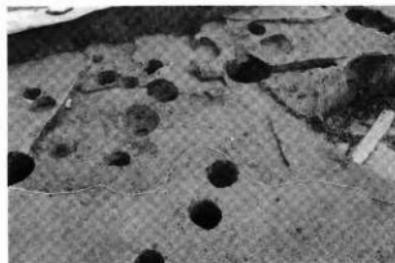
1 SI-6 穫穴住居跡 SK-2 土坑検出状況（南西より）



2 SI-6 穫穴住居跡 2層中からの土器出土状況（南より）



3 SI-6 穫穴住居跡 SK-2 土坑調査状況（南西より）



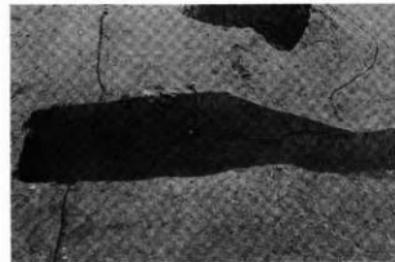
4 SI-6 穫穴住居跡 2層上面（南西より）



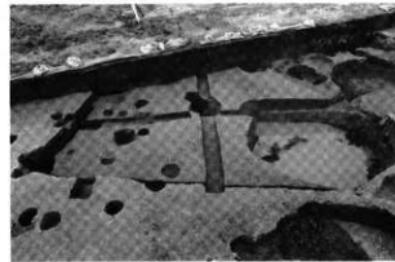
5 SI-6 穫穴住居跡 4層上面検出状況（南西より）



6 SI-6 穫穴住居跡 5層検出状況（南西より）



7 SI-6 穫穴住居跡周溝 5層断面（南より）



8 SI-6 穫穴住居跡 5層底面（南西より）

図版 8 穫穴住居跡（SI-6）



1 SI-7 穫穴住居跡完掘状況（西より）



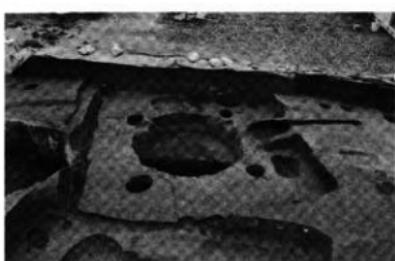
2 SI-7 穫穴住居跡カマド周辺遺物出土状況（北より）



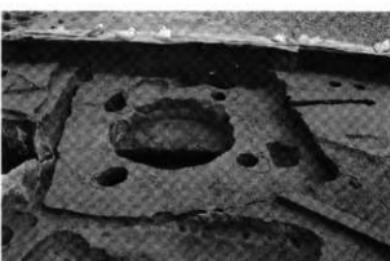
3 SI-7 穫穴住居跡カマド（西より）



4 SI-7 穫穴住居跡 SK-3 土坑土層断面（東より）



5 SI-8 穫穴住居跡床面検出状況（南より）



6 SI-8 穫穴住居跡柱跡床除去後の柱穴検出状況（南より）



7 SI-8 穫穴住居跡掘り方検出状況（南西より）



8 SI-8 穫穴住居跡掘り方完掘状況（南より）

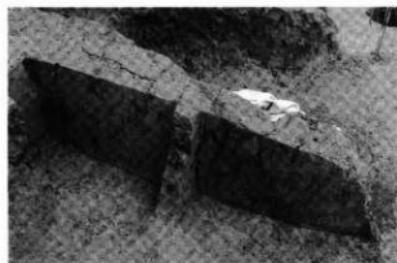
図版9 穫穴住居跡（SI-7～8）



1 SI-8 壁穴住居跡カマド



2 SI-8 壁穴住居跡煙道端部



3 SI-8 壁穴住居跡カマド左袖断面（北より）



4 SI-8 壁穴住居跡カマド右袖断面（南より）



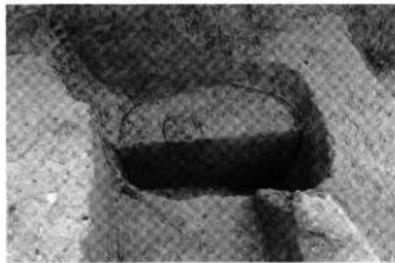
5 SI-9 壁穴住居跡床面検出状況（南西より）



6 SI-9 壁穴住居跡柱穴配置（北東より）



7 SI-9 壁穴住居跡掘り方除去状況



8 SI-9 壁穴住居跡 P 2 柱穴（北より）

図版10 壁穴住居跡（SI-8～9）



1 SI-10豊穴住居跡床面（東より）



2 SI-10豊穴住居跡掘り方埋土層断面（南より）



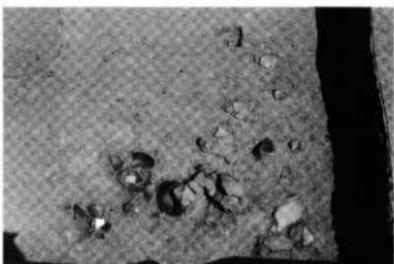
3 SI-10豊穴住居跡掘り方完掘状況（東より）



4 SI-11豊穴住居跡堆積土層断面



5 SI-11豊穴住居跡床面（東より）



6 SI-11豊穴住居跡東壁際からの遺物出土状況（東より）

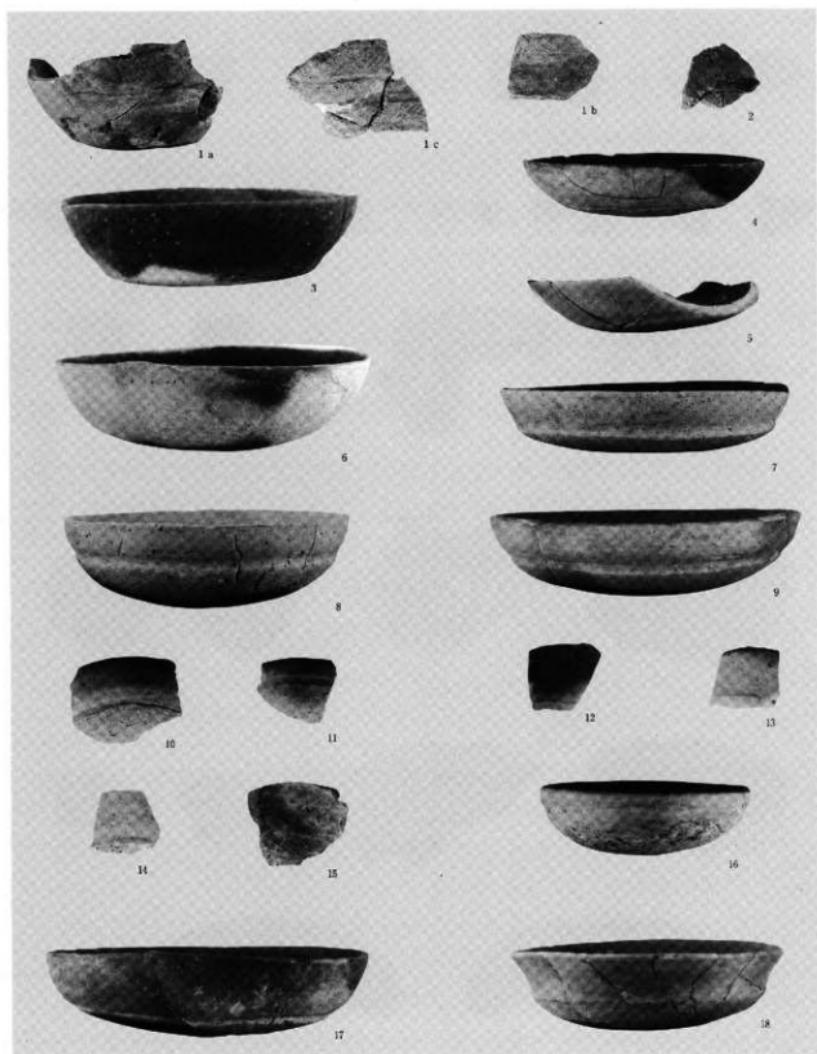


7 SI-11豊穴住居跡床面完掘状況（東より）



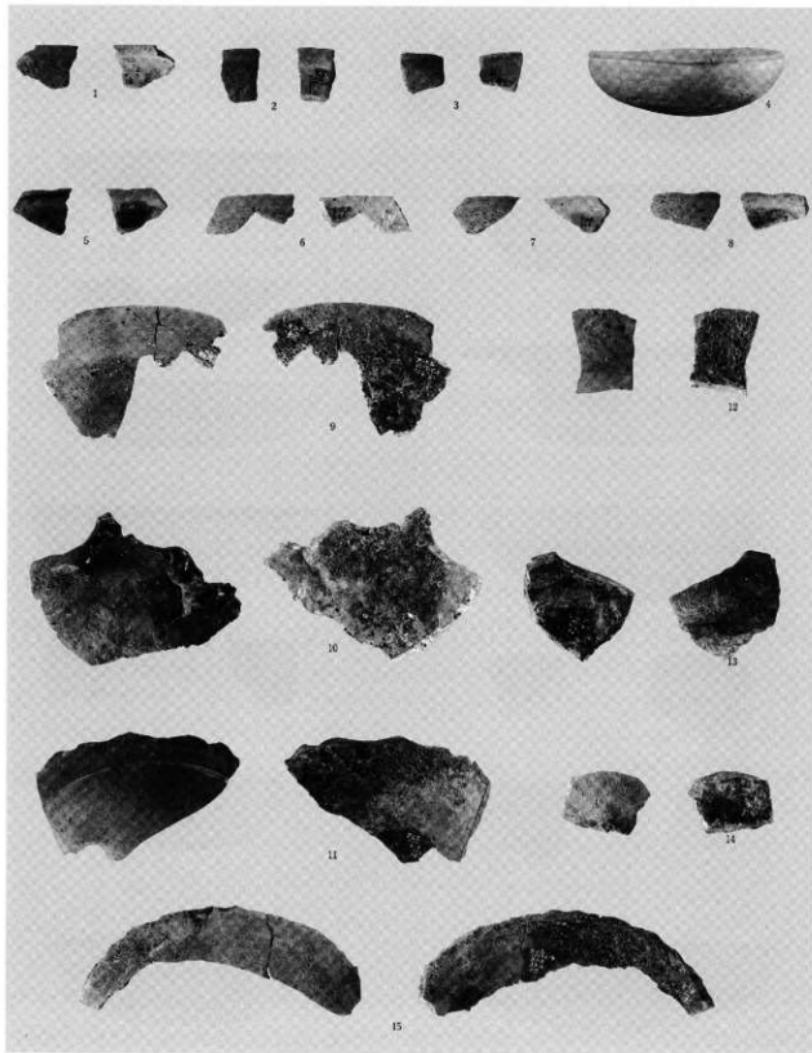
8 SI-11豊穴住居跡掘り方除去状況（東より）

図版11 豊穴住居跡（SI-10~11）



- | | | |
|-----------------------------|-----------------------------|--------------------------------|
| 1 鉢 B-1 (Ⅲ・Ⅳ層 第42図1) | 2 鉢 B-2 (Ⅲ層 第42図1) | 3 壺 C-2 (SI-2 底面 第21図3) |
| 4 环 C-3 (SI-2 底面 第21図2) | 5 壺 C-4 (SI-2 P 3 第21図5) | 6 环 C-10 (SI-3 SK-4 第23図2) |
| 7 壺 C-12 (SI-4 底面 第25図1) | 8 壺 C-13 (SI-4 底面 第25図2) | 9 环 C-14 (SI-4 1層 第25図4) |
| 10 壺 C-15 (SI-4 SK-3 第25図5) | 11 壺 C-16 (SI-4 SK-6 第25図3) | 12 高环壺 C-24 (SI-6 SK-2 第29図12) |
| 13 壺 C-28 (SI-6 P 5 第29図1) | 14 壺 C-29 (SI-6 2層 第29図3) | 15 壺 C-27 (SI-6 2層 第29図4) |
| 16 壺 C-51 (SK-4 4層 第17図3) | 17 壺 C-54 (SI-9 1層 第37図4) | 18 壺 C-61 (P 22 盤上 第43図1) |

図版12 弥生土器・非口クロ土器(壺)



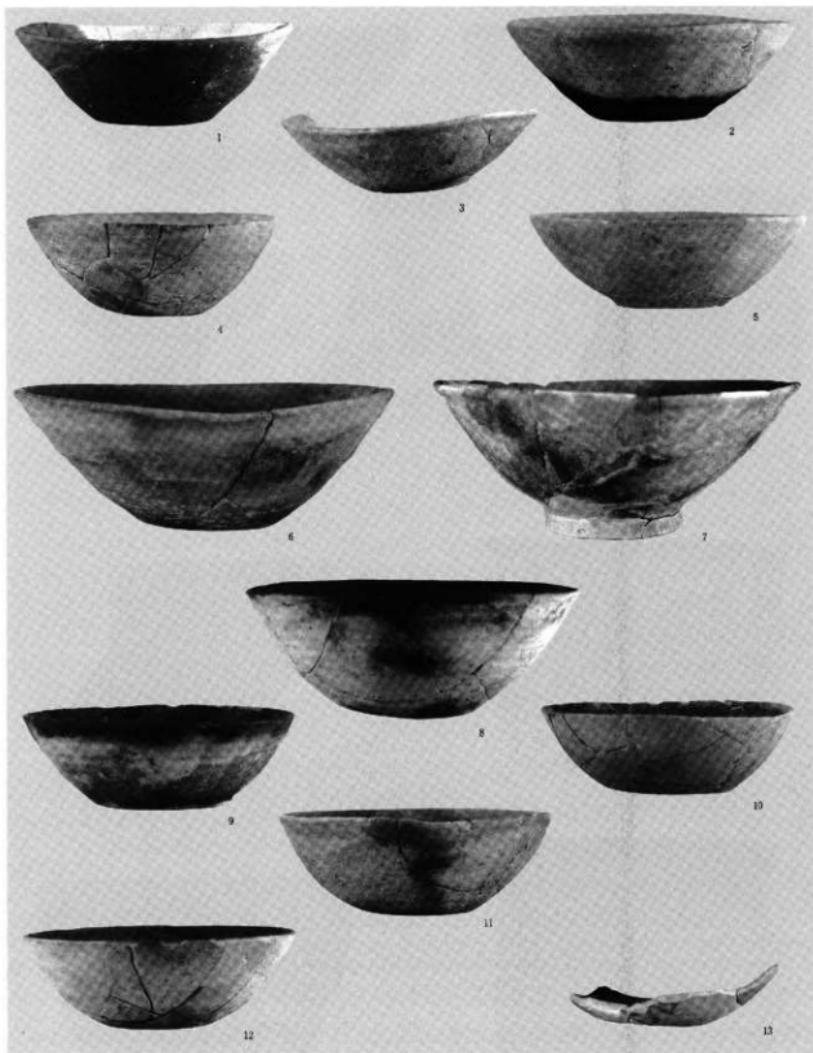
- 1 壺 C-17 (SI-4 1層 第25図6) 2 壺 C-18 (SI-4 1層 第25図7) 3 壺 C-19 (SI-4 1層 第25図8)
 4 壺 C-41 (SI-6 2・3層 第29図11) 5 壺 C-42 (SI-6 P12 第29図7) 6 壺 C-43 (SI-6 1層 第29図10)
 7 壺 C-44 (SI-6 第29図8) 8 壺 C-45 (SI-6 1層 第29図9) 9 壺 C-32 (SI-6 1層 第30図3)
 10 壺 C-33 (SI-6 2層 第30図4) 11 壺 C-35 (SI-6 P4 第30図6) 12 壺 C-34 (SI-6 第30図1)
 13 壺 C-38 (SI-6 2層 第30図8) 14 壺 C-39 (SI-6 1層 第30図7) 15 壺 C-36 (SI-6 2層 第30図5)

図版13 関東系土師器・トリベ



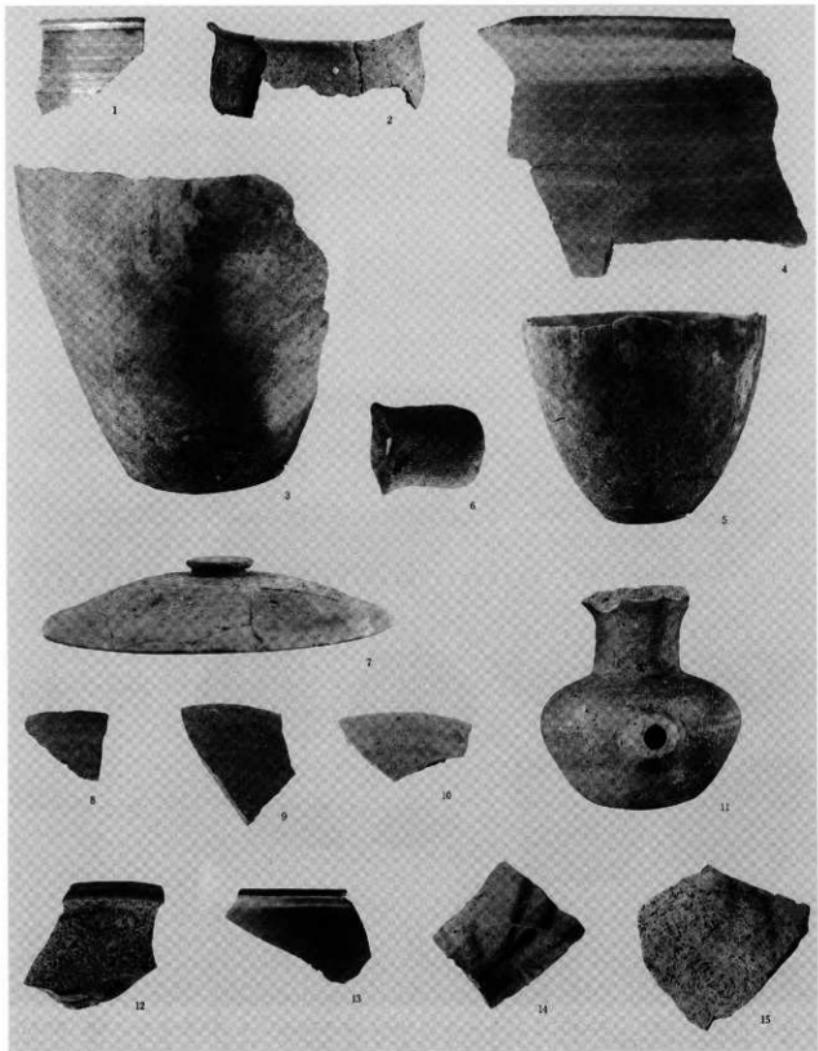
1 塚 C-7 (SI-2 周溝 第21圖7) 2 塚 C-11 (SI-3 SK-5 第23圖1)
 3 台付坏 C-31 (SI-6 2層 第29圖5) 4 高坏 C-1 (SI-2 底面 第21圖8)
 5 高坏 C-50 (SK-3 1層 第17圖1) 6 壶 C-52 (SK-4 3層 第17圖4)
 7 美 C-8 (SI-2 SK-1 第21圖9) 8 美 C-9 (SI-2 SK-3 第21圖10)
 9 美 C-21 (SI-6 1層 第29圖16) 10 缸 C-30 (SI-6 5層 第29圖13)

图版14 非口口土器 (塚・台付坏・高坏・美)



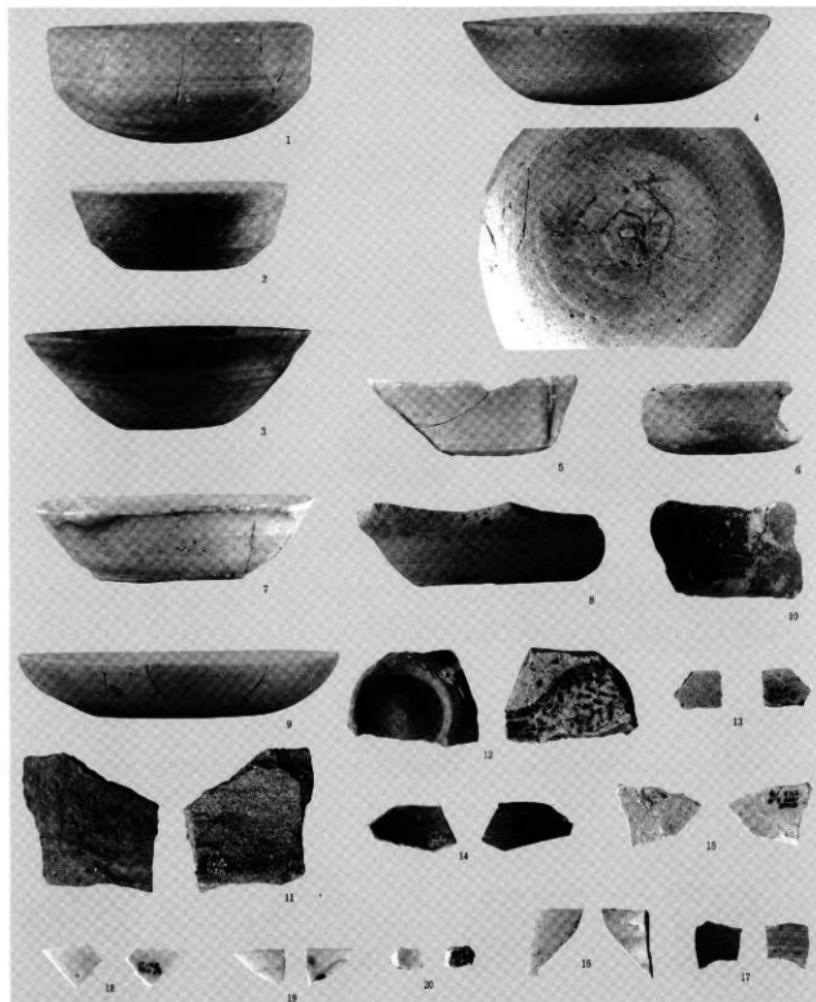
- | | | |
|-----------------------------|----------------------------|----------------------------|
| 1 坯 D-1 (SI-7 1層 第32図5) | 2 坯 D-2 (SI-7 1層 第32図8) | 3 坯 D-3 (SI-7 SK-2 第32図7) |
| 4 坯 D-4 (SI-7 1層 第32図9) | 5 坯 D-5 (SI-7 1層 第32図6) | 6 坯 D-21 (SI-7 1層 第32図3) |
| 7 高台付坯 D-22 (SI-7 1層 第32図4) | 8 坯 D-13 (SI-11 握り方 第41図5) | 9 坯 D-14 (SI-11 床面 第41図6) |
| 10 坯 D-15 (SI-11 床面 第41図3) | 11 坯 D-16 (SI-11 1層 第41図4) | 12 坯 D-17 (SI-11 床面 第41図2) |
| 13 坯 D-18 (SI-11 床面 第41図1) | | |

図版15 口クロ土器類 (坯)



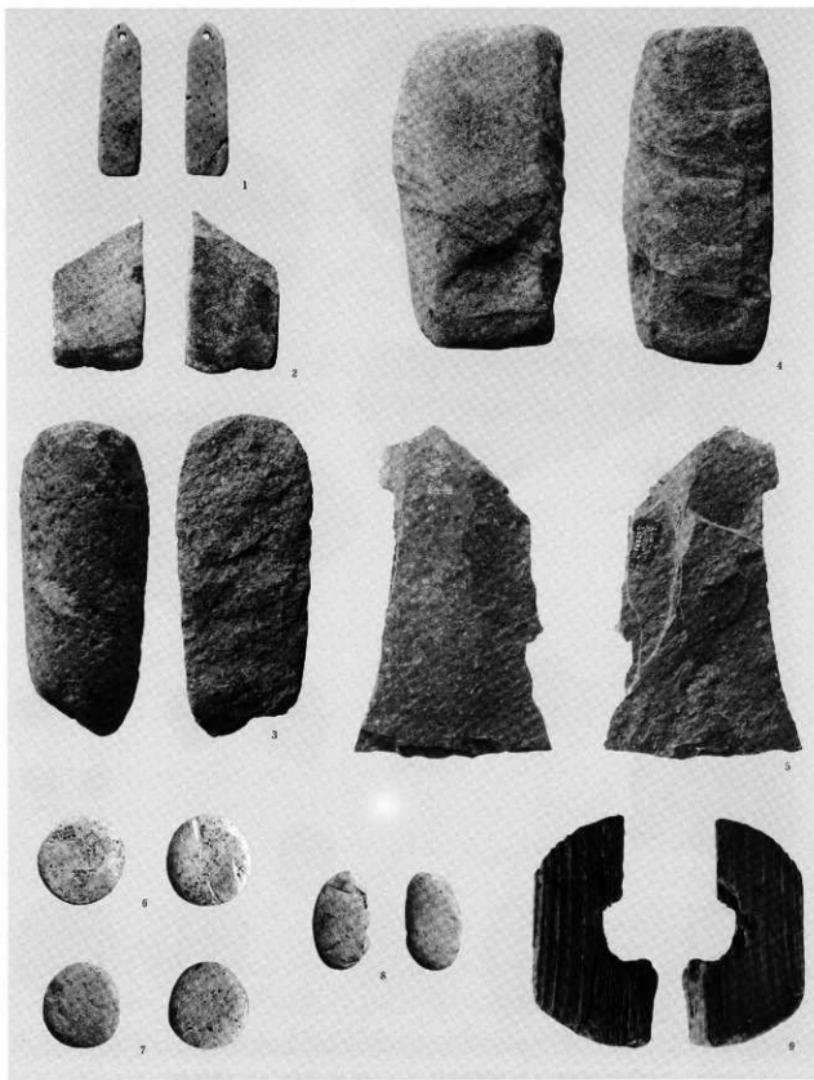
- 1 壺 D-9 (SI-7 SK-3 第33図1) 2 壺 D-11 (SI-8 カマド第35図2) 3 壺 D-10 (SI-8 1層 第35図3)
 4 壺 D-20 (SI-11 床面 第41図8) 5 壺 D-19 (SI-11 床面 第41図9) 6 瓶? D-12 (SI-8 掘り方 第35図4)
 7 盖 E-17 (SI-9 1層 第37図6) 8 盖 E-20 (SI-9 1層 第37図5) 9 盖 E-13 (SI-8・9 掘出面 第35図11)
 10 盖 E-14 (SI-8 1層 第35図12) 11 通 E-15 (SK-3 3層 第17図2) 12 盖 E-6 (SI-7 床面 第33図4)
 13 壺 E-7 (SI-8 1層 第35図13) 14 坏 E-18 (SI-8 カマド第35図9) 15 环 E-19 (SI-3 1層 第23図3)

図版16 口クロ土師器(壺他)・須恵器(蓋・壺他)



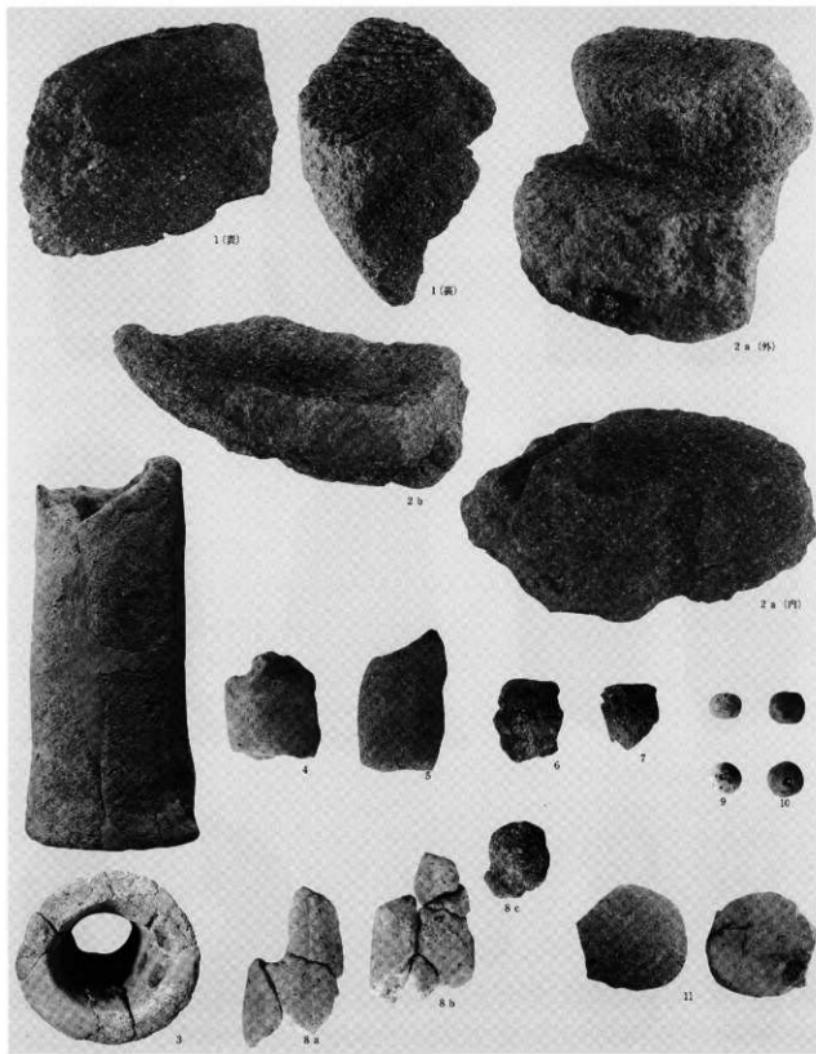
- | | | |
|----------------------------|---------------------------|--------------------------|
| 1 壁 E-1 (SI-2 底面 第21图11) | 2 壁 E-2 (SI-6 5层 第29图18) | 3 壁 E-4 (SI-7 底面 第33图3) |
| 4 壁 E-12 (SI-8 烟道底面 第35图5) | 5 壁 E-9 (SI-8 14层 第35图10) | 6 壁 E-10 (SI-8 1层 第35图8) |
| 7 壁 E-16 (SK-4 4中层 第17图5) | 8 盘 I-1 (SK-1 2层 第16图1) | 9 盘 I-2 (SE-1 挖方第14图1) |
| 10 足? I-9 (SD-2 1层 第12图2) | 11 瓢 I-8 (SD-2 1层 第12图1) | 12 壁 I-4 (SE-1 1层) |
| 13 壁 I-6 (SE-1 1层) | 14 足? I-7 (SD-2 1层) | 15 盘? I-5 (SE-1 1层) |
| 16 盘 I-10 (SD-2 1层) | 17 盘 or 壁 I-11 (P95埋土) | 18 壁 J-1 (SE-1 1层) |
| 19 浅足? J-2 (SD-2 1层) | 20 壁 J-3 (SD-2 1层) | |

图版17 需查器(环)·陶器·磁器



- 1 稚石 K-1 (SI-2 床面 第21図16)
 2 砥石 K-10 (SI-9 掘り方 第37図7)
 3 呼石 K-5 (SI-6 SK-3 第30図11)
 4 不明 K-2 (SI-2 カマド 第21図15)
 5 稚石? K-7 (SI-7 床面 第33図5)
 6 不明 K-3 (SI-4 SK-7 第25図11)
 7 不明 K-4 (SI-4 SK-7 第25図11)
 8 不明 K-6 (SI-6 SK-2 第30図12)
 9 不明 L-1 (SD-2 1層 第12図4)

図版18 石器・石製品・木製品



- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 1 上曰 K-8 (SE-1 1・2層第14回2) | 2 下曰 K-9 (SE-1 1・2層第14回3) |
| 3 羽口 P-3 (SI-2 床面) | 4 羽口 P-1 (SI-2 6層 第21回12) |
| 5 羽口 P-2 (SI-2 周溝 第21回13) | 6 羽口 P-4 (SI-4 1層 第25回10) |
| 7 羽口 P-6 (SI-6) | 8 羽口 P-5 (SI-6 SK-2 第30回9) |
| 9 土玉 P-7 (SI-6 検出面 第30回10) | 10 土玉 P-10 (I層 第43回8) |
| 11 円盤 P-8 (SD-2 1層 第12回3) | |

図版19 石臼・土製品

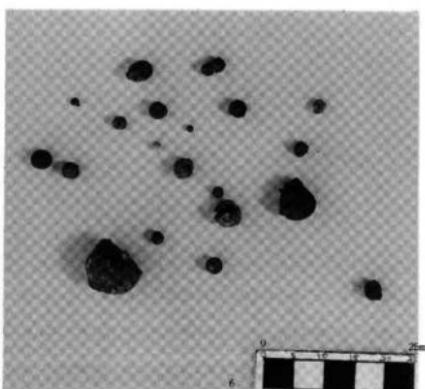
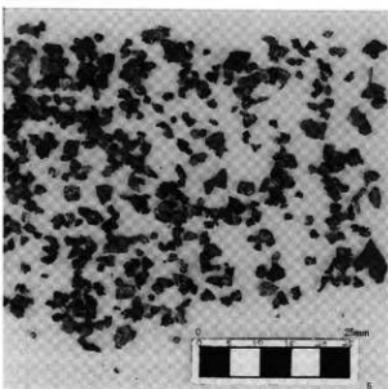


- | | | | | | |
|--------|--------------------------|---------|------------------------|-------|------------------------|
| 1 錐 | N-1 (SI-2 6層 第21図17) | 2 錐 | N-18 (I層 第43図3) | 3 錐 | N-14 (SI-9 1層 第37図8) |
| 4 錐 | N-15 (SI-9 捜り方 第37図9) | 5 錐 | N-13 (SI-10 墓土 第39図2) | 6 錐 | N-23 (I層 第43図5) |
| 7 錐? | N-19 (I層 第43図4) | 8 錐? | N-9 (SI-8 1層 第35図14) | 9 錐? | N-3 (SI-2 墓拂 第21図18) |
| 10 不明 | N-4 (SI-4 1層 第25図13) | 11 錐 | N-12 (SI-10 捜り方 第39図3) | 12 不明 | N-5 (SI-4 SK-6 第25図14) |
| 13 鈎針? | N-27 (SI-6 1層 第30図16) | 14 U字彫先 | N-20 (SI-6 2層 第30図13) | 15 刀子 | N-25 (P-112 墓土 第43図2) |
| 16 不明 | N-8 (SI-6 1層 第30図15) | 17 不明 | N-21 (I層 第43図7) | 18 不明 | N-2 (SI-1 貼灰 第21図19) |
| 19 不明 | N-26 (SI-7 1層 第33図6) | 20 不明 | N-22 (I層 第43図6) | 21 不明 | N-10 (SD-2 1層 第12図5) |
| 22 不明 | N-7 (SI-6 1層 第30図14) | 23 不明 | N-11 (SD-2 1層 第12図6) | 24 古銭 | N-24 (I層 第43図5) |
| 25 不明 | N-17 (SI-11 1-2層 第41図10) | 26 銅錐? | N-16 (SI-9 捜り方) | | |

図版20 鉄・銅製品



SK-2 下 17g



- | | |
|-------------------------|-------------------|
| 1 鐵滓 (知覺仔著) (SI-6 SK-2) | 2 鐵滓 (SI-6 罩) |
| 3 鐵滓 (SI-6 SK-2) | 4 鐵滓 (SI-6 SK-2) |
| 5 鐵造屑片 (SI-6 SK-2) | 6 球狀滓 (SI-6 SK-2) |

圖版21 鐵 淚

報告書抄録

ふりがな	かけのうえにいせき							
書名	久ノ上Ⅱ遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第246集							
編著者名	工藤哲司							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町3丁目7-1					電話 022-214-8893		
発行年月日	2000.3.31							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡No.	北緯	東經	調査期間	調査面積m ²	調査原因	
久ノ上Ⅱ遺跡	仙台市太白区 郡山字久ノ上 2-10	04100	10269	38°12'36"	140°54'03"	1999.04.12 1999.06.30	340	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			
久ノ上Ⅱ遺跡	集落跡	弥生時代 飛鳥時代 奈良時代 平安時代 中・近世	包含層 堅穴住居跡 掘立柱建物跡 井戸跡		弥生土器 土師器 須恵器 陶器・磁器 鉄製文字鋏先・鎌			

仙台市文化財調査報告書第246集

久ノ上Ⅱ遺跡

—発掘調査報告書—

2000年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

〒980-8671 仙台市青葉区国分町3丁目7-1
文化財課 022(214)8893~4

印刷 株式会社 百般印刷芸社

仙台市若林区六丁の目西町2-11

TEL 022(288)5251

